

一橋大学基督教青年会

会報第 77 号



上段左 YMCA 一橋ホールでの寮祭、同右韓国 YMCA 交流会
下段左イーランサーCEO ロイドパーク氏と、同右 McLord Seoung 氏とソウルアメリカンクラブにて

2025 年 12 月 発行

一橋大学基督教青年会 会報 第77号(2025年12月発行) 目次

卷頭言-公益認定取り消しについて-		齋藤金義	昭46経・昭48法	1	
寮長挨拶		花田智紀	法学部2年	2	
女子寮の現状について		古川こころ	社会学部4年	3	
追悼	野澤寮母様追悼について	齋藤金義	昭46経・昭48法	4	
	野澤琵壽恵元寮母様を偲んで(告別式弔辞)	白川 嶺	平成18年経	4	
	よくやった、良い忠実なしもべだ	野澤 晃(野澤琵壽恵様ご主人)		5	
	野澤琵壽恵告別式 寮生出席者・式次第・略歴	編集人		15	
OB寄稿文	コロンビアってどういうところ?	高杉 優弘	昭63年法	17	
	40年前の卒業生からの海外便り	峯村政孝	昭61年社	21	
	女性の時代	古倉義彦	昭60年法	25	
	書評:『戦時下の教会を知ろう』	佐藤周一	昭54年法	26	
寮生寄稿文	完璧と妥協	飯塚陵雅	法学部1年	31	
	鉄道貨物輸送の役割-石油輸送	中田勇輔	経済学部1年	33	
	始まった寮生活	目黒蒼弥	法学部1年	37	
	書評:国家社会主義的大衆音楽	古家大輝	商学部1年	38	
	ドイツでの思い出	花田智紀	法学部2年	41	
	私の大学生活	本田和士	法学部2年	43	
	キリスト教精神の入り口	白川優太	経済学部2年	45	
	北アルプス立山連峰縦走記 2日目	山田圭一郎	経済学部2年	46	
	「のこす」	三浦 龍平	SDS学部2年	50	
	喰らったパンチライン集	金 賢	経済学部3年	52	
	「なぜ、私はイエス・キリストを信じるのか」	瀧山恵輝	法学部3年	54	
	不安な心のゆくえ:アウグスティヌスに学ぶ恩寵と自由の深み	高天愛	法学部3年	57	
	ワーカホリック予備軍	高瀬ひなた	社会学部4年	60	
	東アフリカ渡航記	古川こころ	社会学部4年	62	
	ロンドン留学記	吉田元喜	経済学部4年	64	
	ゴミを集めて生きる	見定和樹	経済学部4年	65	
	狭間としての「ハーフ」、狭間としての「台湾」	樋口祐熙	社会学研究科修士1年	67	
	スウェーデン留学記	北川諒	経済学4年	72	
	可愛げのある寮	加藤 弘人	経済学研究科修士2年	76	
	韓国研修旅行 訪問先レポート		研修旅行参加寮生		78
海外研修報告	韓国研修旅行感想文		中田勇輔	経済学部1年	92
			山田圭一郎	経済学部2年	93
			白川優太	経済学部2年	94
			金 賢	経済学部3年	95
			瀧山恵輝	法学部3年	96
			吉田元喜	経済学部4年	97
			北川諒	経済学部4年	98
寮祭実施報告「自動車産業のBEVシフト」萩原裕輔氏ご講演		講演会記録まとめ	山田圭一郎	101	
秋季修養会	2025年度秋季修養会実施報告				
	2025年度 秋季修養会感想文	花田智紀	法学部2年	104	
	修養会感想文「脱出と救済」	三浦 龍平	SDS学部2年	105	
	秋季修養会 感想文	見定和樹	経済学部4年	106	
理事会だより				109	
編集後記		白川優太・齋藤金義		111	

卷頭言

公益認定取り消しについて

理事長 齋藤 金義 (昭46 経・48 法)

2025年6月の評議員会において、当会は公益認定の取り消しの決議を行った。すなわち、これまでの公益財団法人から一般財団法人になる決議である。当会は2016年の9月1日に東京都から公益財団法人の認定を得たのち、約9年間公益財団法人を維持してきた。今回、公益認定を取り消した理由とその経緯並びに今後一般財団法人としての当会の運営について、ここにご報告し、当会の会員の皆様のご理解を賜りたい。

公益法人は、一度認定を受けたあとも、公益に相応しいかどうかのチェックが毎年行われ、具体的には内閣府の公益法人サイトから一定の書式により、毎年3月末までに事業計画書、収支予算書の提出があり、6月末までに事業報告書の提出があり、評議員会において理事、監事、評議員の変更が生じた場合、変更届出書の提出が義務付けられている。なかでも一番手間が必要なのは、毎年の事業報告書の提出である。事業報告書の内容は前年度の会計決算書が中心であるが、提出する項目は数十以上に及び、またこの決算書では単に計算書類や財産目録を添付するだけにとどまらず、公益を満たすかどうかの数々の計算書式フォーマットに数字を記入し、それが公益財団としての基準を満たすかどうか、チェックがなされる。提出した書類は所管の東京都公益担当事務官により、精査が行われる。問題はこのチェックの算定式が結構複雑で、通常の企業会計のような単純なものでは済まされない。即ち、公益会計は、公益事業会計、収益事業会計、および法人会計の3部門に分かれており、それぞれ正味財産増減計算書の場合であれば、3部門に分割された正味財産増減内訳書を作成する。貸借対照表も3部門に分かれた内訳書の作成が必要となる。更には、財産は一般正味財産と指定正味財産にわかれています、これはそれぞれの財産が指定正味財産からなるものと一般の収支からなされる一般正味財産に分かれて表示する。これらの3部門に分割して表示すること、一般と指定に財産を区分することと、正味財産の増減がそれぞれ貸借対照表の指定財産と一般財産に区分し、前年度の残高から当期の収支を経て、期末財産に表示する会計決算の作成が極めて複雑であり、これは通常の会計事務では手に負えない内容であり、勢い専門家に作成を依頼せざるを得ないものである。当会はこれまで某公益会計専門の会計事務所にこの作成をお願いしてきたものの、2024年の2月からこの会計事務所の報酬がそれまでの年間30万円から一挙に3倍の値上げを通告され、年間の報酬金額が100万円近いものとなった。理事会において慎重に協議した結果、当会の財政基盤からこの報酬を支払ってまで公益を維持するメリットが見当たらないこと、更には事業報告書などの申請事務はこれまで理事長である齋藤が一手に引き受けており、この事務も実際には極めて複雑でかつ時間を要し、この申請業務を専門の会計事務所に依頼すればさらにこの報酬が約30万円必要となる。これまで理事長である齋藤が何とか申請業務を行ってきたが、これとて一回や二回の申請では済まされず、東京都の担当官から何度も指摘を受けて、修正を数度、酷い場合は十回以上もやり取りし、ようやくチェックが済むという状況であり、これを後任の理事長あるいは理事に引き継げない物である。つまり、これでは公認の理事、理事長の引き受け手がいなくなることになる。公益認定取り消しの今年の評議員会の席上、OBのある方から、費用をかけてでも公益を維持すべきとのご意見を賜ったものの、計算書類の作成に100万円、申請業務にさらに30万円、合計130万円の費用をかけて公益を維持する理由、必要性がないと判断した次第である。

さて、一般財団法人としての当会の運営は今後どうなるかである。当然、当会への寄付金は一般財団法人であることから寄付金の税制上の特典が失われる。この点が一番大きなデメリットであり、そもそも9年前に公益申請を行った理由は寄付金の税制上のメリットがその理由であった。その点に関しては、今後、当会の上部団体である公益財団法人日本YMCA同盟経由で当会へご寄付頂ければ、税制上の特典は維持される。ただし、当会は日

本 YMCA 同盟に対して手数料として 5%を支払うことになる。それ以外では、当会が保有する土地と建物、所謂公益目的保有財産は、当会が公益認定を取り消すことから、これを当会と類似の公益事業を営む日本 YMCA 同盟に寄付をしなければならない規定があり、従って、当会の土地と建物については、公益財団日本 YMCA 同盟が保有することになり、固定資産税は公益目的利用に関して非課税となるので、問題はない。つまり、当会の運営上、当会が一般財団法人になっても税制上のメリットと特典は实际上、殆ど失われることはないことになる。それどころか、会計ソフトの利用は、公益会計の場合、特殊な会計ソフトを利用するため、年間 20 万円の利用料が必要であるが、これを一般企業会計ソフト、例えば弥生クラウド会計を利用すれば年間5万円程度に軽減される。言い換えると、公益から一般なることで、当会の費用は約 150 万円の節約となり、更に事業報告書の提出などの事務上の負担もなくなり、良いことばかりとなる。では、何故公益法人にしたかという素朴な疑問が生じるが、こればかりは実際やってみて初めて気が付いたという不明をお詫びするしかありません。公益財団法人となる以上は、それ相当の財政規模と要員体制を欠いて安易に公益になることは厳に戒めるべきであります。それが今回、当会が経験した貴重な経験であったと深く反省をいたしたい。

寮長挨拶

花田智紀(法学部 2 年)

2024年度寮長を務めております法学部 2 年の花田智紀と申します。ここでは今年度の寮の様子や活動について報告させていただこうと思います。

今年度、男子寮には 3 年生 1 名 1 年生 4 名の計 5 名が入寮しました。昨年度は途中退寮者が 2 名出たために、昨年同様に新歓活動の重要性がかなり高かったのですが、無事今年も満室となりました。現在の寮生の学年構成は院生 2 名、4 年生 3 名、3 年生 2 名、2 年生 5 名、1 年生 4 名 + 寮監 1 名の計 17 名となっています。今年何よりもありがたかったのが、新 3 年生の入寮です。昨年は新 3 年生が寮内におらず、ゆえに入寮して 1 年と少しの自分たち新 2 年生が寮の幹部となり、運営していく必要がありました。しかし、船頭なくしては船も沈みます。下級生に対して手本となり、年の功を見せる役割を担える人物の不在と、まだまだ新米な 2 年生による寮運営は展望が見えず不安に思っていました。今年の新 3 年生は、形こそ新入寮生の扱いになりますが、大学生活にも慣れ、将来を見据え就職活動を行ったり或いは院進を視野に学問に励んだりと、自分たち下級生よりまた一段階先を生きる先輩として頼りになるものがあります。そうした先輩方とともにより良い寮を目指して日々の共同生活を営むことができればと思っております。

また、1 年生たちも寮での生活が半年を超えて慣れが見えたあたりから、徐々に個性を発揮するようになりました。寮外での活動や自分の趣味に熱中したり、他の寮生の影響からか夜型の生活習慣になり、夜な夜な食堂で議論をするようになったり。昨年度以前の諸先輩方と話す機会があるごとに、僕の入寮前の YM 寮を語っていただく機会があります。安藤理事(寮監)や僕より十代以上も上の先輩方となると『最近の寮変わったよね』と、改修以前の寮や寮生活を振り返られますが、その実態や寮生間のコミュニケーションには所どころ今に通ずるものを感じます。私自身、寮のような共同体は生き物だと考えています。毎年一部が代謝され、最上級生が卒寮すると同時に新入寮生がやってくる。しかし、その間を繋ぐ寮生が 3 学年ある。社会人となった先輩方が所属する”会社”もそのような組織なのだろうか。いや、形は変わりながらも、どこか連綿と続いている伝統のようなものが、寮ならではの共同生活の目に見えない部分にもあるのではないかでしょうか。

YMCA の一員としての活動ですが、本年度は例年通り聖書研究会を食堂班(マタイの福音書、水口先生)、ホール班(創世記前半部分、野崎先生)に分かれて行いました。これに加え、全国 YMCA 同盟会への参加(寮長、齋藤理事長)や学生 YMCA の春季・秋季オリエンテーションへの参加、韓国での夏季海外研修、京都での秋季修養会と例年以上の行事に参加いたしました。また、一部寮生による東大 Y の聖書研究会への参加なども散見さ

れました。一昨年度より一橋寮内に留まらず寮外生などの積極的な参加がある本会ですが、今年度は全国YMCA 同盟や他大Yとの交流がより増えた 1 年となりました。今後も、キリスト教の学びを通して寮生がより多くの方々との交流する機会を得られるよう、私も寮長として残りの任期を精一杯務め上げようと思います。

女子寮の現状について

女子寮長 古川こころ(社会学部 4 年)

今年度の女子寮は、定員五名のところ現在三名で生活しています。人数が少ない分、一人ひとりが互いをよく知り、落ち着いた雰囲気の中で生活することができます。しかし、その一方で、少人数だからこそ日々のちょっとした行き違いや生活スタイルの違いが大きなストレスにつながりかねません。そのため私たちは、より良い住環境を維持するために、毎週、女子寮生会議を開き、生活上のトラブルや不明点をその都度話し合って解消するよう努めています。会議では、掃除当番や共有スペースの使い方、備品管理の方法など、細かい点についても寮生全員で合意の上でルール化し、無理なく運用できる仕組みを整えています。

食事面では、学生生活を支える重要な制度である寮食制度を、現在の三名中二名が頻繁に利用しています。授業やサークル、アルバイトで忙しい中でも、温かく栄養のある食事を手軽に摂ることは大きな助けになっており、寮生からも非常に好評です。食堂での食事は、健康管理だけでなく、他の寮生や学内の学生との交流の機会ともなり、日々の生活に程よいリズムを与えてくれています。

また、今年度は女子寮にとって大きな転換点でもあります。現在在寮している高瀬が今年度末に卒業予定であるため、来年度以降の女子寮生は現状二名のみです。来年度以降の女子寮の運営を安定させるためにも、新歓活動に特に力を入れているところです。女子寮の魅力をより多くの新入生に知ってもらうため、寮の雰囲気や生活の様子を丁寧に紹介し、安心して入寮を検討してもらえるよう工夫しています。

加えて、近年は対面での広報だけでは十分に情報が届かない場合もあるため、女子寮では SNS を積極的に活用し、新入生や在校生へ幅広くリーチすることを目指しています。生活の写真やイベントの告知、ルール作りの様子などを発信することで、女子寮がどのような環境でどんな人たちが暮らしているのかを、外部の学生にも分かりやすく伝えられるようになりました。SNS を通じて質問を受け付けたり、入寮希望者と気軽に連絡を取れる体制も整えつつあります。

今後も、安心して暮らせる女子寮であり続けるため、寮生全員で協力しながら環境づくりに努めてまいります。

野澤元寮母様追悼について

理事長 齋藤金義

本年 7 月 31 日に故野澤琶壽恵様が召天されました。享年 87 歳でした。1993 年から 16 年間にわたり、YMCA 一橋寮の寮母として、寮生をわが子のように慈しみ、お世話をされ、多くの寮生諸兄から慕われました野澤様に對して、心からの感謝を申し上げますとともに、天国において安らかに憩われておりますこと、残されたご家族の皆様の上に、主イエスの慈しみと限りない哀れみをお祈り申し上げます。水口牧師先生の司式により 8 月 5 日に桜ヶ丘教会において執り行われました告別式には現役世代の寮生諸兄 24 名(令夫人 1 名を含む)が多忙な仕事中にも拘わらず数多く参列されましたこと、野澤様のご人徳が如何に凄いものであったかを物語るものと存じます。ここに野澤琶壽恵様を偲び、深い哀悼の意をお捧げいたします。

野澤琶壽恵姉 告別式弔辞

白川 嶺(平成 18 年経)

皆さま、本日はこのような大切な場で、野澤さんへの感謝の気持ちをお伝えする機会をいただき、心よりお礼申し上げます。

私は大学時代、YMCA 一橋寮で 4 年間を過ごしました。野澤さんは寮母さんとして、毎日の食事を用意し、私たち学生の生活を見守ってくださいました。私も寮生も野澤さんの作るカレーが大好きで、毎週火曜日の聖書研究会の前に、野澤さんと寮生と食卓を囲んだ時間は今でも忘れられない大切な思い出です。ときにはご自宅に招いて頂いたり、桜ヶ丘教会に連れて行ってくださったり、寮の外でも変わらぬ温かさをもって接してくださいました。

野澤さんの存在が私たちにとって特別だったのは、単に生活を支えてくださったからではありません。信仰者として、聖書研究会で水口先生とともに私たち寮生の歩みに寄り添いながら、何よりも日々の言動を通して、イエス・キリストの愛と赦しの心を体現されていた方でした。困っている仲間がいればそっと声をかけ、誰かが沈んでいれば静かに寄り添ってくださいました。私自身、その後の人生も含め、迷いや不安の中にあった時期、野澤さんから多くの励ましを受けました。「あなたのために祈るわ」と祈ってくださったり、新聞の切り抜きや本を送ってくださったり、その姿に支えられたことを、今でもよく思い出します。

そして私にとって野澤さんは、寮母でもあり、信仰者でもありながら、何より「東京のお母さん」のような存在でした。大学を卒業した後も野澤さんとのご縁は続き、結婚の仲人をつとめて下さり、子どもが生まれてからも家族ぐるみでお付き合いくださいました。長男が大きくなってから一緒に動物園に出かけた時には、お弁当を作つて下さいました。その中にロールサンドがあり、子供が「これ、初めて食べた」と喜んでいたことをよく覚えています。人見知りな長男といつの間にか仲良くなり、「次はどの動物を見ようか」と話したり、楽しませてくださいました。一緒に笑いながら過ごす時間に、私自身も深く癒されました。

このように、野澤さんの温かさと信仰に根ざした生き方は、私だけでなく、多くの寮生の心に深く刻まれています。私たちは野澤さんの姿を通して、「人とどう関わるか」、「どう生きるか」を学びました。そしてその学びは今、私たちが社会に出て職場で、地域で、また家庭を築き、次の世代と向き合う中にも生き続けていると感じます。

今は寂しさが募りますが、野澤さんが今、主のみもとで安らかに過ごしておられることを信じ、感謝の思いとともに見送りたいと思います。主の深い愛と慰めが、ご遺族の皆さんに豊かにありますよう、お祈り申し上げます。

野澤さん、本当にありがとうございました。

「よくやった、良い忠実なしもべだ」（マタイ 25:21 告別式説教聖書箇所）

野澤 晃（野澤琶壽恵様ご主人）

妻、琶壽恵（はすえ）は7月31日に大層穏やかに、安らかに愛する主の身許に、車いすではなく馬車に乗り、ラッパの鳴り渡る中を天使たちに迎えられ天国に凱旋いたしました。8月5日は特に暑い日でしたが、告別式が桜が丘キリスト教会で行われ、100名を超える参列者があり、特に一橋大学 YMCA 寮 OB の皆様は働き盛りで超多忙の中、23名の方が、それぞれのお仕事を休んでいらして下さり心からお礼を申し上げます。告別式を前に齋藤理事長には行き届いたご采配を賜りお励ましをいただきました。海外や遠地から生花や弔電を下さった方々にもお礼を申し上げます。大阪や京都からは信仰の友や親戚の方々、他教会などでお交わりをいたいた皆様のご参列に、琶壽恵はどんなにか驚き喜んでいたこと思います。重ねてお礼を申し上げます。ありがとうございました。願いながらも参列かなわざとの方もあり、故人の思い出を書かせていただきます。

私たちの出会い；琶壽恵は中国山地、岡山県新見市の寒村で生まれ育ち、県立新見高校卒業後に就職で親戚を頼って東大阪市に、その隣家に夫になる私が住んでいて出会いました。今から69年前のことです。彼女の勤務先は大阪市交通局、当時は花形職業「発車オーライ！」市バスの車掌で、観光シーズンには観光バスガイドに駆り出されていました。

イエス・キリストとの出会い；交際相手の私の姉夫婦が10年あまり前からクリスチャンで、「教会で特別な集会があるので来てみない？」に誘われ、大阪のど真ん中、南の繁華街外れにあるフリー・メソジスト教団（＊）大阪日本橋教会の特別伝道集会に出席、以来、毎週教会に行くようになりました。今までの生活が眞の神の存在を認めぬ、神に背いた自己中心の生活であったことを共に悔い改め、1959年のクリスマスに二人で（総勢13人が）洗礼を受けました。教会生活は大変に楽しく、日々喜びと感謝でいっぱいでした。そして3年後の1962年9月に結婚、200人近い方が祝福してくださいました。宴は会費制で一人100円、それがアルバムに変わり、結婚式のアルバムになりました。新居は高槻市で、結婚の翌年と3年後に息子が3人与えられました。計算が合わない？3年後は双子でした。（＊フリーメソジスト教団は、1860年に北米メソジスト監督教会から分離し、日本では1896年に伝道が開始したプロテスタント系の教団、FMという）

東京転勤；教会生活8年目の1967年、夫が勤める事務機商社の貿易部門を本社がある東京に移すため、転勤が決まりました。当時の教会は日曜日夕刻の伝道会が始まる前の1時間、路傍伝道と言って、先頭が教会名を書いたプラカードを掲げ、後に大太鼓、小太鼓、タンバリンなどで「ただ信ぜよ、ただ信ぜよ」との讃美歌（新聖歌182番）を歌いながら大阪なんばの繁華街を練り歩き、道角で集会案内を、仲間の一人が神を信じた喜びをスピーカーを使って話します。当時はすぐに大勢の人が、酔っ払いを含め集まります。説教者の一人が「私は東京の銀座で、通行人を暗がりに引っ張り込み、金品を強奪していました。しかし今は救い主キリストに出会い、罪を悔い改め、まっとうな生活をしています。こんな私を救い出して下さるキリストの神様は素晴らしい方です」と。東京は怖いところやな、との印象が強く、東京転勤は嫌だし、大阪の教会生活はすごく楽しいし、との思いはありましたが、この神様がどこに行っても一緒にいてくださるとの信仰で東京転勤を受け入れました。“わたしは世の終わりまで、いつもあなた方とともにいます。”（マタイ 28:20）

58年前の1967年9月に上京。当時は大阪駅まで同僚が来て万歳を叫び、隣では胴上げなど。東京駅にも迎

えが来るといった時代でした。祈りにより与えられたのは小平市の小平団地。転勤が決まった時、「東京に行ったら小金井教会に行きや」と言っていたその小金井教会は小平団地から頻発するバスでなんと 10 分。早速夕刻に自転車で5分の教会を訪ねると牧師夫人が庭の手入れをしておられ、翌聖日の礼拝に家族で出席、大歓迎を受けました。力強い賛美の声、み言葉に立つ説教、大阪日本橋教会と変わらへん！と安堵し、東京での生活が始まりました。神様はこの広い東京で「行きなさいと言われていた教会」のすぐ近くに住居を備えてくださった不思議！“求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。”(マタイ 7:7) 主に感謝。

米国転勤；東京転勤から 3 年後の 1970 年 8 月に米国への転勤が決まりました。ただし単身で。それまでは先輩は何代も単身赴任で 2 年サイクルで交代していたのです。当時の上司は、1 年我慢しろ、家族が行けるよう取り計らってみるから。願いが叶い、10か月遅れで家族も合流。自宅から車で 7 分の所に小金井と同規模の Ferndale FM 教会に出席。渡米に先立ちここにも神の介在と思えることがあった。渡米前年 11 月に小金井教会に北米カダ FM 宣教視察団が来訪、そのメンバーの一人 D さんが米国ミシガン州の方で、「来年夏に米国 M 州に転勤予定」と話したところ、暫くして M 州 Ferndale FM 教会の牧師から郵便が届き「貴方が来る教会はここですよ」との連絡に驚く。米国到着最初の日曜日は前任者に頼んで車に乗せてもらい F 教会に行く。何と車で 5 分ほどの距離。教会に入ると当日の Usher(案内係) Tenney さんが「私の弟が朝鮮戦争で日本に行ったことがある」と弟さん家族の席に案内される。礼拝後には牧師はじめ皆さんから歓迎を受け、そのまま弟さん家族の自宅に連れられバーべキューをご馳走になる。このテニ一家との交流はテニ一家が召された昨年まで 50 年続いた。

家族合流；それから 10 か月後の 1971 年 5 月に、会社が家族帯同を許し 4 人を迎える、家族が揃う。Detroit から San Francisco まで空路迎えに行き、Los Angeles ではディズニーランド観光を含め休暇を楽しむ。西岸で家族を迎えて自宅に帰ると大きな生花が“大歓迎”的カードとともにリビングにドンと置いてあり、F 教会からで、驚くとともに感謝！家族を迎えての住まいは Detroit の北 14 マイル(22.5Km)郊外にあり、子ども 3 人は現地の小学校に入学。当時はキューバ難民なども多く、マイミブックという外国人用英語学習教材が用いられていましたが、子どもたちはすぐに友達ができ学校生活も楽しみ、言葉の壁も速やかに乗り越えたようです。悪い言葉からまず。日本語を忘れないよう、子どもたちには日本語補習学校が毎週土曜日に開かれ、当時、デトロイトには駐在員家族は 30 家族ほどで、奥様方が教壇に立ち、私も 1 年間校長？を勤める。妻は気の毒なことに子どもたちへの日本語教育のため自身の英語習得が進まなかった。帰国時は長男は学齢に達しており、小学校最終学年で中学校に進んでの英語の授業では native な発音が逆に日本人の英語らしくなくて先生に注意され、戸惑ったらしい。

単身赴任時はアパート住まいでしたが家族を迎えて、戸建てに移る。当地も竜巻避難用に各戸には地下室があり、我が家では卓球台を置き、時にはパーティー用テーブルに、あるいは学校友達が集まり、にぎやかに卓球を楽しんでいました。長男は慶應義塾大学の卓球部で主将として頑張り、三部から二部への昇格を果たしたとか。50 年前のその時の友達と最近 FB つながりができるのも SNS の面白さであり、怖さでもあります。現地は札幌の緯度位に位置し、冬の寒さは厳しく、日中でも 0°C になると暖かいと感じ、0° F (-18°C)になると車のトラブルが急増するのもうなずけます。室内はセントラルヒーティングで常時半そででも過ごせます。日本からの出張者がデトロイトは寒いからと下に着込んで屋内に入ると暖房が暑すぎで下着を脱げず大変な思いをした話を聞きます。大雪もたびたびあり、妻が雪かきをしていると、「別れ話が出たらいつでもあなた(妻)の証人になってあげるからね」と言って下さる親切？なご近所さんがおられたとか。そういうれば自宅前庭の歩道の積雪で歩行者が転倒すると訴えられ

ること。広い裏庭も夏場に芝刈りを怠ると近隣から苦情が出るようで、隔週の労働が必須です。幸いにして妻の頑張りにより滞在した4年間に何一つ苦情を受けることなく近隣の皆さんと仲良く過ごすことができました。

自動車運転免許証取得；日常生活にも慣れ、Driver License の必要を覚え挑戦する。先ず筆記試験。問題は当然ながら苦手とする英語への挑戦である。幸い、使い慣れない英和辞書持ち込みOK、時間は無制限で何とかパス。それから150日以内に免許保有者を助手席に乗せて一般道で運転練習をし、実地試験は検査官を自家に乗せて一般道で行われる。米国では大都市を除いては車なしの生活はできず、従って免許証は必需品、取らせてあげようとの姿勢にも助けられ、無事合格。さて、車だが、新聞には全紙2,3頁にわたり中古自動車売りだし、買いたしの個人広告が満載。そこにGM社製の比較的高級なOldsmobileの年式は忘れたがCatlusに惹かれ、直接交渉し1400ドルで購入、妻の愛車となる。当時の米ドルは変動相場制で1ドル260円~300円なので40万円ほど。帰国時、持ち帰りも考えたが中型車でもトヨタクラウンより大きく、売却を決め、買ったときと同額の1400ドルで処分する。

家族旅行；在米中は車で行ける範囲での旅行を楽しむ。北ミシガンの夏は避暑地としても有名で、フリーウェイはキャンピングカーやトレーラーで常に渋滞。わが車はテントを積み、設備の行き届いたキャンプ場で大きなキャンピングカーに挟まれてのグランピングも楽しい。当時のDetroitには日本食レストランもなく、お寿司を求めて275マイル(440キロ)西のシカゴに車を飛ばす。日本からの来客があればナイアガラ滝へ700マイル(1120キロ)。恥ずかしいことが一度あった。現地駐在員の仕事は日本からの技術者が多く、顧客(見込客が多い)の工場案内や観光案内がある。某銀行の支店長4人をナイアガラ滝見学にお連れしたのは良いが、パスポート持参を忘れる。カナダ側にある馬蹄形のカナダ滝を観なければ、ナイアガラ滝を見たとはいえない。苦肉の策としてヘリコプターツアーを選択する。ヘリ・ツアーアは皆さん初めてでありそれなりに楽しんでいただけたと思うが、カッパをかぶって水しぶきを浴びながらの滝の裏側の洞窟ツアーも味わっていただきたかったと悔いる。

家族旅行の圧巻は日本へ帰任前年のクリスマス休暇に雪が降る自宅を出て真南に向けてハイウェイを走ること1600マイル(2570キロ、cf: 東京-鹿児島は約1400キロ)、数時間走ると車内暖房を切り、窓を開ける、さらに走ると冷房に切り替える。真冬から真夏への大変化。フリーウェイの制限速度は時速75マイル(120キロ)、往路では一泊してクリスマス前にFlorida州Orlandoのホテル(Motor Inn)に入る。LAのディズニーランドは開園が1955年、Floridaのウォルト・ディズニーワールドは1971年なので、私たちが訪れたのは開園3年目、Dランドが東京ドーム16個分に対し、W-Dワールドは山手線内側面積の1.6倍と100倍以上の広さがあり、何を見ても退屈せず素晴らしい演出、装置、効果であり、クリスマスの3日ほどがあつという間に過ぎる。近隣のKennedy Space Center、ワニ園(2000匹)、Monkey Jungle、Parrot Jungleなどで楽しむ。

この旅行のもう一つのイベントは7DAY CARIBBEAN CRUISES。マイアミ近くの港からイタリア船籍の豪華客船で1974年暮れから1975年にかけての一週間、カリブ海のプエルトリコのサンホワン(San Juan)、ヴァージン諸島のSt.Thomas、ジャマイカのMontego Bayを巡る。毎朝船室に新聞が届き、その日の予定、寄港地の案内、催事予定、お勧めや注意事項などが記されている。部屋の世話係も、食堂の席も決まっており、食事は食べ放題。隣席のアルゼンチンからの母子は朝から分厚いステーキを。お国ではそういう。椅子に座るときは良いが、立つときは一人が椅子を抑え、椅子から離れたときはニコッとする。大きなプールに映画館、ダンスホール、チャペル、ゲーム室などで楽しむ人がおれば、船上デッキで長時間過ごす人も多い。Walt Disney WorldでMerry Christmas！そしてカリブ海でHappy New Year! このような素晴らしい時を迎えたことへの感謝とともに、4月に日本に帰国することの複雑な思いが交錯

する。

マイアミからデトロイトまでは non-stop で帰ることにする。勿論深夜も走り続ける。テネシー州内を走行中、走る車もほとんどなく妻にハンドルを任せた。助手席で休んでいるとピカピカと赤色灯が後ろに見えるので道路わきに停車させると、パトカーが。強烈な南部訛りで「車が二車線の真ん中をやや蛇行しながら走っている。飲酒運転では」との質問に、飲酒は全くない、免許取得から日が浅い、と説明して無罪放免。あとで聞くと、二車線の広い道で他に車はなく、もったいないから真ん中を走りたかったとか。2570 ^{キロ}を一昼夜、通行料金は勿論無料で走り続け、雪の町、自宅に無事帰りつく。感謝。

米国は車社会の国、特にデトロイトは Motor City と呼ばれ、当時は GM、Ford、Chrysler といった自動車大手の本社があり、私が赴任する前年には日本車バッシングで一人の中国人が日本人と間違って殺害されたことがある。デトロイトは人口比米国一の犯罪都市、オフィスの女性がダウンタウンに行くときには貴重品を金庫に残して行くとか。ある日、ダウンタウンで左折禁止を左折し、交通裁判に出頭する。ダウンタウンは上野のように狭い道路が交錯している。勿論ナビもない。裁判と言っても小部屋で裁判官らしき人から“Are you guilty or not?”と聞かれる。そこで、左折した場所には道路標識が乱立しており、わかりにくく不親切だとの説明が聞き届けられ、分かった、無罪となる。ついでに、標識を分かりやすく何とかして、と訴えると、すれば別の担当に行きなさい、で終了。別の日、接触事故を起こした時のこと、保険会社が手続きのため来社し、事故説明の中でこちらの信号は間違いなく「青」だったと伝えると、「あんたは色盲ではないか」と言われる。日本では信号は青・黄・赤と教えられ、道路交通取締法にもそのように記されているが、海外では BLUE ではなく GREEN なのです。もう一つ聞いてください。冬の朝の出勤時、側道からフリーウェイに入るためアクセルを踏み込むと車が回転を始め、三車線を一回りして反対側に進行方向に向いて停車。すぐ後から来た大きなトラックが私の車の反対側車線に急停車し「大丈夫か?」と声をかけてくれる。親切に感謝し、無事に出社、タイヤの空気バランスが崩れていたため、タイヤとホイールの間に草が食い込んでいた。急加速でスリップしたらしい。その時、車が多ければ大事故の加害者になっていたこと間違いない。主に感謝！

現地新聞に；在米中に妻は二度、現地新聞に取り上げられた。一つは茶の湯 Tea ceremony、もう一つは隣接の Royal Oak 市の THE DAILY TRIBUNE 誌に料理教室で日本のクリスマス料理を創作し地域の会合でお教えした記事が写真付きで掲載されました。

母教会の小金井教会から芳賀牧師が我が家を訪ねてくださる。目的は我が家から 1 時間余り西にある Spring Arbor University 神学部の親しい教職者に会うため。その一人ハドソン・テラー4世の曾祖父ハドソン・テラーは英国生まれで、17 歳の時、父の書斎で1冊の信仰書を読み、回心を経験し「主なる神の臨在に触れ」献身し、その年の12 月に彼は中国に宣教師として赴くと告白。51 年間中国で過ごす。彼が創立した CIM (China Inland Mission) 中国奥地宣教団は 800 人の宣教師を呼び、125 の学校を開校し、18,000 人の回心者を生んだそうです。今はOMF として宣教の働きを進めている。SAU からの帰路、ハイウェイに入ると車大好きの芳賀師の思いを汲んでハンドルをお譲りする。「先生、国際運転免許をお持ちですか」とお尋ねしたが答えの記憶は定かでない。最初にブレーキテストをお願いしたところ、当時のアメ車のブレーキの効きの良さに私は大きく前につんのめった。当時はシートベルトも必要はなかったのです。高速を運転されている牧師の得意げな横顔は、講壇で説教中のお顔とは全く別人。日曜礼拝での芳賀師の英語による説教はやはり理解しやすい。

スポーツ観戦；Detroit Tigers は今年の MLB の American League で優勝し、ポストシーズンに進んでいる。デトロイト・タイガースは、MLB アメリカンリーグ中部地区のプロ野球チーム。本拠地はミシガン州デトロイトにあるコメリカ・パーク。19 世紀

から存在する古参球団。地区優勝 7 回、リーグ優勝 11 回、ワールドシリーズ制覇 4 回の実績を誇る。当時はあまりぱっとしなかったが家族で観戦に行く。私は大阪生まれ大阪育ちなので Tigers ファンで育つ。米国で最も人気のスポーツはフットボール。日本ではアメフト。当地のミシガン大学は優秀な大学だがフットボールも強い。大学のフットボールスタジアムで観戦機会があった。収容人員は何と 101,100 人。野球場は大体 5,6 万人であり、スケールの違いを感じる。アイスホッケーはスピードの速さに驚くとともに、座席によっては首がおかしくなる。

帰国;1975 年 4 月に帰国、渡米中留守番代わりに住んでもらった妻の妹家族に代わって元の小平団地に落ち着く。学校では子どもたちは“アメリカ人”といじめにもあったが、日本で落ち着くのは早い。小金井教会では米国教会から幾つかのイベントを持ち帰った。一つはバルーンサンデイ。教会学校の行事として 50 個ほどのヘリウムガス入り風船に返信用葉書を付け一斉に飛ばす。すぐ上の電線に絡むものもあるが空高く飛んでいくのを見るのは楽しい。5 枚程葉書が戻っただろうか、遠くても北埼玉辺りかと記憶する。

転居;米国生活を終えて古巣の小平団地に帰ったが、子どもの成長を見ると 2LDK (48 m²) は余りにも狭い。祈りのうちに与えられたのが今の住まい。転居条件は環境、広さなどあるが、教会が近いこと。新しい八王子市松が谷の住宅は多摩ニュータウンの一角にあり、5LDK (120 m²) と広さは申し分ない。多摩センター駅徒歩 20 分弱、団地は EV なし 5 階建ての 1 階。私は景観を求める 5 階を希望したが妻の希望で 1 階に。これが高齢になって大いに助けとなる。教会へはバスで 20 分、車で 15 分で申し分ない。東京都住宅供給公社の物件で抽選に当たる。感謝、以来 43 年。

パーティー会場か;我が家には訪問客が多い。在米中も多くの来客を迎えた。小金井教会から先述の牧師を含め 3 組が、現地の教会から一度は 30 人ほどを迎える地下卓球台が活躍。同志社大学の合唱団が地域を訪問、ホームステイで団員を迎えるなど。帰国して更に来訪者が激増する。小金井教会の高校生を数年担当し、野外活動後の打ち上げはすべて狭い我が家。教会に海外からの宣教師を迎えると、その宣教師家族を我が家へ迎える。八王子転居後、小金井教会から牧師夫妻を含めなんと 40 名が我が家を訪問。我が家で我が家送別会が。さすがに定員をはるかにオーバー。しかし楽しさも倍増。若者たちは立食となる。

イスラエル旅行;2010 年 5 月～6 月に延べ 16 日間聖地イスラエル旅行に(今は残念ながら行けません)。姉夫婦はすでに 10 回以上訪れており、何度も誘われたが果たせなかつたが、やっと夢が叶う。以下は旅行の後に書いたものです。

【この旅行は神様からのご褒美として与えられたものと思う。イスラエルのエルサレムにメシアニックーシュ(ユダヤ人の伝統や文化を保持しつつ、イエスをメシアと信じるユダヤ人)のシュロモ・ヒサク師が運営する AMI エルサレムセンターが主催する聖地巡礼ツアーでユダヤの祭り、近代イスラエルの背景、今日におけるイスラエルの政治情勢などの講義がある。このツアーには北米、スウェーデン、オランダ、ルクセンブルグ、ドイツ、NZ などから総勢 17 人が集まり、すべてが英語で進められ、日本語には通訳が付いた。バスでエルサレムからヘブロン、ベツレヘム、ナザレなどを訪れる。出発前には必ずシュロモ師が詩篇を朗読、祈りをもって始まる。安息日の体験もしました。ホテルすぐ横に Great Synagogue があり、金曜の日暮れから、きわめて保守的なユダヤ教会(シナゴグ)でキッパや黒一色で正装をしたユダヤ教徒たちが集まり、女性は二階に追いやられ、聖書(旧約)が朗々と節をつけて(素晴らしいテナーで)朗読されていた。土曜日には朝、午後とシナゴグでの礼拝が守られる。別のシナゴグでは男女一緒の所もあるが、それぞれに厳格に安息日を守る姿が印象的。安息日には車も道路から消え、エレベーターなどの動きも滞ります。日本は安全と水は無償ですが、イスラエルではどこでも機関銃をぶら下げた男女のイスラエル兵があり、イエス・キリスト生誕の地ベツレヘムからの帰りの検問所

では渋滞があり、イスラエル兵により1台ずつ検問が行われ、私たちのバスにも若いながら恐ろしい顔をした兵が機関銃を下げて車内を一回りしたときは緊張しました。ホテルのガードマンもすべてピストルを下げており(これは米国も)、どこにも緊張感が漂う。町中の自動車の8割は水不足のためでしょう、アラビヤ砂漠からの黄砂で真っ白のままでした。

印象に残ったところと言えば、アブラハム、イサクなど族長の墓が残されているヘブロンやホロコスト記念館、イエスが洗礼を受けられたガリラヤ湖近くのヨルダン川で様々な教会の人たちが集まり、洗礼式や様々な集いが模様されていました。イスラエルへは大韓航空で行ったが、韓国人は多くいたが日本人は少なく、聖地に各国のみ言葉のプレートがあつても日本語は皆無で、さびしいおもいがしました。ガザでの出来事も何物をも恐れず自らを守ろうとするイスラエルの姿勢をうかがえるが、何しろイスラムの国 22 カ国を敵に回し、アメリカの大統領がオバマに代わってから、イスラエルも入植地の拡大に制約があり、世界でのイスラエルの孤立化が進んでいるようです。旅行を通して個人的な感想は聖書知識の不足。グループメンバーが聖地と聖書個所とをよく理解していたこと。もう一つはグループが日本人を除く英語が堪能な人たちで、セミナーやガイドもすべて英語であり、英語力の不足を痛感した。センター長のヒザク師は日本びいきで大変明るい人で、センターでもバスの中でも賛美をリードし、常に楽し雰囲気を醸し出そうとのもてなしをされました。主がこのような時を与えられたことを感謝し、多くの日本人が訪れる事を願う。】

残念ながら、今のイスラエルは大きく変わり、良いときに聖地旅行ができました。死海での浮遊体験も忘れられません。ある人は聖地を訪ねることで聖書の世界がモノクロからカラーに変わったというのも然りである。

海外旅行と言えば、長男が勤務先、生保会社の語学研修で1年余りドイツの Frankfurt に嫁と1才の息子とが滞在したときの 1993 年2月に私たちと三男、姪の4人で訪問し、本場のソーセージを味わい現地生活を垣間見られました。空港から市中へは 30 分ほどと近い便利さもうれしい。電車でフランスのパリも訪れる。長男の語学研修1年がのちの業務に役立ったかは不明。

理髪師国家資格取得;小金井教会復帰後のこと、教会員 Y さんご子息に障害があり、散髪を始めたが、中途半端ではいけないと、それだけの理由で都心の理容学校に 2 年通い、京橋のクリスチャンの友人、名取理髪店でのインターンを含め3年で国家資格を取得する。その腕で神学生の散髪奉仕も行う。それぞれ牧師になっての顔は覚えてないが髪形を見れば思い出すとか。一度小金井教会芳賀牧師を散髪したのは良いが出来具合が気になり次聖日の説教が耳に入らなかったとか。

千客万来;在米中多くの来客があり、ゲストブックを用意しなかったことを悔いています。海外駐在員の宿命か、日本からの出張者を迎えると滞在はホテルでも、当時のデトロイトにはまだ日本食堂がなく、一週間程度で日本食が食べたいというのが必ずいて我が家にお招きすることになる。加州米はおいしい。最近の米騒動で話題になったカリフォルニアロースで勿論新米。しゃぶしゃぶをご馳走したいと肉屋で薄くスライスにと注文すると、それならミンチ肉にしたらどうかと曰く。しゃぶしゃぶやすき焼きの説明で何とか入手する。当家はパーティー会場かで書きましたが、実に大勢の来客がありました。在米中にはおそらく 200 人以上あり、帰国後 guest book を用意し、忘れるときもあるが、皆さんに毎回記帳をお願いする。妻が体調を崩す 2019 年までの記帳者を数えると 1200 人を超えていた。何組かのカップルは交際中に紹介に訪れ、結婚しての挨拶に、そして子どももができたので見てほしい、と。居心地の良さ以上に妻の心を込めた接待が目当てらしい。教会で年初には新年聖会があり、その後は野澤宅へと決めている人たちがあり、教会員の地域別クリスマス会場として 5 回それぞれ各 40 人近い参加が、クリスマス聖歌隊の感謝会会場として7回、各 20 数人ほどの集まりで、すべて食事目当てである。米国教会からも牧師夫妻が宿泊付き

で訪ねてくださる。琶壽恵はいつも穏やかで多くの方々に愛され、祈られた人です。皆さんの楽しみは琶壽恵の料理で彼女へのお礼がゲストブックに多々あります。“聖徒たちの必要をともに満たし、努めて人をもてなしなさい。”(ローマ 12:13)。

私は日本の捕虜だった；この筆者、Jacob & Florence DeShazer ご夫妻を紹介したい。2016年8月15日(月)午後8時のNHKドキュメンタリー【ふたりの贖罪(しょくざい)～日本とアメリカ・憎しみを越えて～ 憎悪が、世界を覆い尽くしている。どうすれば、憎しみの連鎖を断ち切ることができるのか。その手がかりを与えてくれる2人の人物がいる。70年前、殺戮の最前線にいた日米2人の兵士である。】「トラトラトラ」を打電した真珠湾攻撃隊の総指揮官、淵田美津雄。その後もラバウル、ミッドウェーを戦い、戦場の修羅場をくぐってきた淵田だが、1951年、キリスト教の洗礼を受け、アメリカに渡り、伝道者となった。淵田が回心したのは、ある人物との出会いがきっかけだった。元米陸軍の爆撃手ジェイコブ・デシェイサーは真珠湾への復讐心に燃え、日本本土への初空襲を志願、初めてB25 16機からなる爆撃隊が東京始め日本各地を空襲し名古屋に300発近くの焼夷弾を投下した。乗機はそのあと中国大陸の日本軍支配地域に不時着したために日本軍の捕虜になり、60日間尋問と拷問を受ける。その後、上海で戦時国際法違反で裁判が行われ終身禁錮刑となり、南京で戦争犯人として獄中生活を送る。その時、仲間の1人が病死した際に、葬儀を行うために日本人看守が差し入れた聖書により、キリスト教に回心する。戦後キリスト教の宣教師となり、日本に戻り、自分が爆撃した名古屋を拠点に全国で伝道活動を行った。戦争から4年後の冬、ふたりは運命の出会いを果たす。デシェイサーの書いた布教活動の小冊子「私は日本の捕虜だった」を淵田が渋谷駅で偶然受け取ったのだ。以来ふたりは、人生をかけて贖罪と自省の旅を続ける。淵田はアメリカで、デシェイサーは日本で。ふたりの物語は、「憎しみと報復の連鎖」に覆われた今の世界に、確かなメッセージとなるはずである。D師が43年前の11月に桜ヶ丘教会で礼拝メッセージを語られ、その日に我が家を訪ねてくださり、日本橋で妹が女将のうなぎ割烹大江戸に招待する。以来、フローレンス夫人が召される8年前までの36年間、毎年クリスマスカード交換をしました。

YMCA一橋寮との出会い；1993年頃に桜ヶ丘教会員の山口朝子さんが寮母をしておられたが、体調が優れないとのことで手伝いを依頼され、やがてすべてを引き継ぐようになったようです。運転免許も大きな助けとなり、7人乗りのワンボックスカーで府中の卸売市場で買い物をし、寮に行くという生活が16年ほど続き、幸い無事故無違反でした。当時の寮の駐車場へは道路から狭い通路を曲がりながらバックで入らなければならなかつたが、車を傷つけることもなく、よく通つたことと褒めてやりたい。当時は各学年4人ずつの男子寮生16人の夕食を作るのが仕事だが、ある時から昼食を作り出すと寮生に喜ばれ、彼らは昼になると飛んで帰るようになったとか。バーべキューでは自宅から米国持ち帰りの大きなグリルを運び、時には私もお手伝いに伺ったことがあります。クリスマス会では如水会館にも何度か伺いました。週一度火曜日夜の聖書の学びも休まず出席、学生たちの相談相手として、親御さんたちとの交流もあり、息子たち(寮生OB)とは不通になつても親御さんとは続くといった方が何人かあります。寮母を辞めても太いきずなが寮生OBと結ばれており、結婚式の波が押し寄せる時期があり、嬉々として出かけていきました。中には仲人まで仰せつかつた方もあり、親しい交わりが続きました。賀状交換も妻の方が多かつたようです。

水口功牧師がYMCA一橋寮のチューターになられたのは2003年からで、そのきっかけは、当時、寮母をしていた琶壽恵の声掛けによることです。当時、水口師は南大沢チャペル開拓伝道の3年目で、外部奉仕を行うことに躊躇されたそうですが、妻は南大沢チャペルに水口師をお訪ねし、水口師が牧師になる前に奉仕されていたKGKでの大学生伝道の経験を生かしていただきたいとお勧めしあ引き受けいただいたとのことです。「まさか

それから今までずっと関わるとは最初のうちには考えてもおりませんでしたが、こうして今でも大学生の魂と直接関わる機会をいただけているのは、ひとえに野澤姉のおかげです。」と水口師は話しておられます。そのことから橋田陽平さん(2024年卒)が当教会で受洗し、他にも数人の現役生が礼拝に見えています。毎年のクリスマスイヴ礼拝にお顔を見せてくださるOBの方々もおられます。

闘病生活に入る; 1989年10月に乳がんが見つかり当時は山手線大塚の癌研究所(今は有明に)で左乳房切除。その後、外来化学療法で戦い、克服する。2019年7月に脳梗塞に、翌年4月に居間で転倒し右足大腿頸部骨折で手術、2022年5月に二度目の脳梗塞に、軽度のアルツハイマー型認知症も見られ、翌年7月に三度目の脳梗塞に。続く11月に血中酸素濃度低下で入院、細菌性肺炎との診断で2週間余り入院、車いす生活になり、車の助手席を回転昇降式にする。退院時、「施設に入るか、大変だが自宅で看るか」と問われ、「自宅で」と即答する。本人は常に明るく痛みや苦しみを訴えることもなく、教会生活も、木曜日10時半からの祈祷会、聖日10時からの礼拝出席も拒むことは一度もなく、皆さんから声をかけていただぐのを喜ぶ。

車いすから落下させる大失態; 我が家は5階建ての1階だが道路まで階段が5段あり、いつも妻を乗せたまま介助人が前後に二人で上り下りするのだが、下りなら車いすのハンドルをしっかりと押し下げて前輪を上げれば降りられるのではとの安易で愚かな考えにいたり、一段降りたところで妻の重量にハンドル制御が効かず、妻は頭から落下1、2階先まで滑り落ち、完全に死なせてしまったと思いました。本人を見ると額にこぶが、意識もしっかりとしており、痛がる様子もない。この日は木曜日の祈祷会出席の外出で、毎回教会途中の聖ヶ丘で盲人+盲導犬と認知症状のご婦人を妻とともに送迎しており、すでに準備しておられるはずなので出来れば行きたいとの思いが頭をよぎり、外傷があるから脳には損傷がないのではと身勝手な解釈をする。本人に教会に行くかと尋ねると「行く」と言う。痛がる様子もない。直前に居間を出るとき妻はメガネを外していく、と珍しいことを言い、メガネを預かる。もし、メガネをしておればおそらく大けがをしたに違いない。勿論落下の際には自らの愚かさを差し置いて神様、助けてくださいと心の中で叫ぶ。しかし、神様は確かに働いてくださった。亡くなつても不思議はない大きな事故を起こした者の叫びを聞いて。“私が呼ぶとき、主は聞いてくださる。”(詩篇 4:3)、“苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。”(詩篇 50:15)階段を下るとき、介護人は後ろ向きに車いすの重量を両手で全身で受け降りなければならないことを学ぶ。

終末を迎える; 球壽恵は6年前から三度脳梗塞にかかり、2年前から車いす生活に入り、自宅には訪問看護師が週3回、訪問医師が月2回、デイサービス週2回、二泊三日のショートステイに月2回、他に訪問歯科医、訪問理容師と介護保険を最大限に利用しました。これらすべてが担当のケア・マネージャさんの行き届いた管理のうちにに行われました。そして徐々に体が衰え、食が細り、やがて飲み物以外は全く受け付けなくなりました。それでも表情は変わらず穏やかで、死の前日までイエス・ノーもはつきりしていました。担当医から最後はどうしますか?食事を取れなくなつても胃ろうでの延命をする方も多いですよと問われましたが、自然の流れに、すべてを神様にお任せします、私たちはクリスチヤンで病気になる前に最後は神様にお委ねし、延命措置はしないと確認しあつてみると申したら、先生も信仰を持つ人は違いますね、と感心しておられました。7月半ばから発熱することが増え、召される10日前には仙台から長男夫婦が、その息子家族4人が都心からお別れに来宅、妻もひ孫二人の賑やかさを喜んでいました。死の一週間位前までは食事を与えながら、食べた、食べなかつたで一喜一憂していましたが、この状態で食事を与えることは延命措置になるとの老人介護施設長(クリスチヤン)の言葉が思い出され、私が最早回復の見込みなく、意識もややもうろうとしている妻の命を延ばそうとしているとすればそれは控えるべきと気

づかされました。それから私の祈りは変わりました。「神よ、妻のたましいも体もあなたの御手にお委ねします。どうか、苦しむことなく御国にお迎えください。」と。実は、数十年前にある方が死を前にして何時間も荒い呼吸で苦しみの声を上げ、その声が廊下にまで響くのが今も耳から離れず、ご親族がどんなに辛い思いをされたか計り知れなかったからです。枕元で天国の讃美歌を歌い、祈り続けました。夜の7時半、呼吸が少しずつ弱まり、すっと止まりました。厳粛な一瞬でした。同居している二人の息子に「お母さん、天国に帰ったよ」と伝え、仙台にいる長男にも連絡、それぞれが冷静に受け止めました。看護師、医師の訪問を受け、医師から「死亡時刻は8時14分です」との告知があり、続いて、桜が丘教会の水口牧師と葬儀社担当者が見え、火葬場が混んでいる中で早い日時としてその場で告別式が8月5日火曜日11時半と決まりました。

病床と告別式で歌った「天国」の讃美歌、新聖歌471番の一節：

“われ聞けり「かなたには 麗しき都あり」
輝ける彼の岸に われはまもなく着かん

「ハレルヤ」と歌いつつ 歌いつつ進み行かん わが足は弱けれど 導き給え 主よ”

天国では先立たれた多くの先輩たちに迎えられ、囲まれて大歓迎を受けていることでしょう。信仰生活66年間に先に天国に帰られた多くの懐かしい方々と。もう一つの讃美歌、新聖歌518番の一節を：

“きよき岸辺に やがて着きて 天つ御國に ついに昇らん

その日数えて 玉の御門に 友も親族も われを待つらん
やがて会いなん 愛でにし者と やがて会いなん”

妻琶壽恵の87年10か月余りの生涯の中でのYMCA一橋寮で歩んだ16年間は心から寮生の一人ひとりを主からいただいた愛で愛し、主に仕えるように寮生たちに仕え、時には母のように彼らの心に寄り添い、それぞれの巣立ちを喜び、卒業後もその歩みに心を配り、祈り続けた人でした。今は天国に在って、争いも煩いも明日の憂いもないときを過ごしていることでしょう。そして、先だった人たちと再会していることでしょう。

告別説教のみことば；「よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。」（マタイの福音書25:21）主に感謝！ハレルヤ！



デシェイザー師夫妻を日本橋の料亭にご招待 1982年11月



2025/8/5故野澤琶寿恵告別式出席者リスト(YMCA一橋寮関係)

No	卒業年	お名前	No	卒業年	お名前	No	卒業年	お名前
1	(H11)1999	白潟 大	9	(H15)2003	面谷 隆祐	17	(H21)2009	平川太一朗
2		板倉 寛	10		野吾 雅史	18	(H21)2009	嶋 浩太郎
3		本村 天	11	(H16)2004	松木 雄太	19	(H22)2010	千葉 謙
4	(H12)2000	吉田 護	12	(H17)2005	白川 嶺	20		権藤 孝典
5		堀口洋次郎	13		白川 あや	21		安藤 誠
6	(H13)2001	磯尾 健司	14	(H18)2006	中村 翔平	22	(H23)2011	高橋 知治
7		久門 武史	15	(H20)2008	南 弘穀	23		門脇 拓弥
8	(H15)2003	大門 雅弘	16	(H21)2009	後藤 俊二			

告別式次第

2025年8月5日(火) 11時30分

司式:水口 功 (桜ヶ丘キリスト教会主任牧師)

奏楽:藤巻美代子 (桜ヶ丘キリスト教会奏楽者)

賛美 新聖歌 209(慈しみ深き)

聖書朗読 (故人愛唱聖句) 詩篇 23篇1~6節

祈祷

司式者

賛美 (故人愛唱讃美歌) 新聖歌 21 (輝く日を仰ぐとき)

故人想い出

特別賛美

聖書朗読 マタイの福音書 25章19~23節
ローマ人への手紙 12章13節

告別説教 よくやった 良い忠実なしもべだ 司式者

弔電

賛美 新聖歌 508 (神 共にいまして)

頌栄 新聖歌 63 (父 御子 御靈の)
終祷

遺族からの挨拶

野澤 晃

飾花

野澤 琵壽恵 略歴

- 1937 (昭和 12) 年 9 月 11 日 岡山県新見市菅生で誕生、県立新見高校卒業後、大阪市交通局勤務 (路線バスの車掌や観光バスガイドを勤める)
- 1959 (昭和 34) 年 12 月 27 日 大阪日本橋教会にて晁ほか計 12 人が受洗。
- 1962 (昭和 37) 年 9 月 23 日 晁と結婚、3 人の男子を出産。
- 1967 (昭和 42) 年 夫の転勤により東京都小平市に転居、小金井教会に転入会。
- 1970 (昭和 45) 年 夫の転勤により米国ミシガン州に転居、ファーンデイル FM 教会に出席。
- 1975 (昭和 50) 年 夫の帰任により帰国し小平団地に戻り、小金井教会に復帰。
- 1979 (昭和 54) 年 小金井教会の障害を持つ子供の理髪のため理容師国家資格を取得し理容ボランティア活動に用い、聖書宣教会の神学生の理髪には 3 年余り通う。
- 1981 (昭和 56) 年 現在の八王子市松が谷に転居、桜ヶ丘教会に転入。
- 1993 (平成 5) 年から 16 年間、国立市の一橋大学 YMCA 一橋寮で延べ 250 人余りの昼食夕食のお世話や、寮生や親御さんたちの相談に当たる。
- 1989 (平成 1) 年 乳がん手術、6 年前から 3 回脳梗塞発症、車椅子生活になる老健施設でデイサービス、ショートステイのお世話に、また、訪問看護、診療などの手厚い介護を受ける。

○足が不自由になつても、車いすで祈祷会、礼拝に必ず出席を希望した。教会では多くの方々が声をかけてくださり、車の乗り降りを手伝つて下さり、毎週二回の教会集会出席が楽しみであり、嫌がることは一度もなかつた。

○在米中に自動車運転免許を取得し、不得意な運転でワンボックスカーを使い、国立市の一橋大学 YMCA 寮の寮母として 16 年間、府中卸売市場で食材を仕入れ、昼食夕食を 16 人 (各学年 4 人ずつ) の寮生たちに用意し、時には良き相談相手になり親御さんとも連絡を取り合つていた。

○いまなお、20~30 人の OB から連絡をいただいている。毎年のクリスマス集会にも OB が出席。

○40 歳の時に、小金井教会の会員の障害をもつたお子さんのために理容専門学校 2 年、インター研修 1 年を終えて国家資格を取り、その子を始め神学校の牧師の卵のヘアーカットを数年行つた。

○他人をもてなすこと、他人を喜ばせることが大好きで、野澤家は来客が多く、時には 20~30 人、延べ千百人を我が家に迎え、喜んでいただいた。

○教会行事で十数回、米軍の多摩リクリエーションセンターや自宅近くの八王子の大塚公園で午前のソフトボールと午後東中野公園での BBQ をセットにした野外親睦会では常に 60~70 人が集い、先頭に立つて食事作りを楽しむ。

海外だより — コロンビアってどういうところ？

高杉 優弘(昭63年法)

皆さん、こんにちは。コロンビアという国は、ご存知でしょうか。あまり聞いたことがない方もおられると思いますが、南米大陸の一番北の方にある国です。私が駐コロンビア日本大使を務めてこの4年間、日本ではあまりにコロンビアについての情報が少ないと痛感しましたので、なかなか一言で説明するのは難しいですが、コロンビアを離任するに際し、少しだけ紹介させていただこうと思います。

コロンビアは危ない国？

コロンビアといつて、皆さんは何が思い浮かぶでしょうか。日本ではほとんどコロンビアのニュースは流れませんので、あまりイメージがないかもしれません、やはり一番に来るのは「危険な国」ということでしょうか。私も日本から来られた方から「コロンビアの治安はどうですか」と聞かれて、いつも返事に困っています。

ネトフリの「ナルコス」というドラマをご覧になった方もいるかもしれません、かつて世界最悪の殺人発生率を誇った1990年代から2000年代にかけてのイメージがまだ根強く残っているように思います。今は、当時と比べると見違えるように治安は改善していますが、とは言っても、地方部を中心にまだまだ治安が悪い地域もありますので、治安が良いとも言えませんが、とにかく日本で一般に抱かれているイメージよりははるかに良いです。大卒以上のレベル(ちなみに、大学進学率は約55%です。)で考えれば、文化・芸術面を含むQOL(生活の質)は日本よりはるかに高いでしょう。

一点だけ、この数年の動きとして興味深いのは、殺人事件の多く(約4割)が殺し屋(暗殺者)によるものになってきていることです。今のコロンビア大統領は、元左翼ゲリラなのですが、地方に跋扈する有象無象の違法武装組織に対し、力による制圧ではなく、対話での和平実現という高い理想を持っています。もちろんこんな性善説が犯罪集団に通用するわけもなく、違法武装組織(もうかつての FARC(コロンビア革命軍、2016年に投降。)のような大手ではなく、中小乱立状態です。)がこの機に乗じて勢力を拡大していますが、その結果、彼ら同士の抗争が増えたりします(まるで暴力団同士の縄張り争いです。)。殺し屋に狙われるのは大抵は麻薬取引関係者です。

「美の国」コロンビア？

少し暗い話から入ってしまいましたが、コロンビアは、「美の国 コロンビア」として、大々的なプロモーションを打っています。山勝ちの地形で、地理的断絶があることもあって、多様性にあふれています。人種的にも文化的にもそうですが、やはり一番は自然の多様性でしょう。コロンビアは、2番目に生物多様性が豊かな国だとよく自慢しています(ちなみに世界一はブラジルのようです。)。特に鳥は、世界の鳥類の約20%にあたる約1900種が生息しており、世界一です。ユネスコの世界遺産も、写真のカルタヘナ(カリブ海沿岸)をはじめ、9つあります。



さらに、コロンビアは中南米で3C(チリ、コスタリカ、コロンビア)と言われる美人国でもあります。特に、ミスコンは盛んで、ミスワールド、ミスユニバース、ミスインターナショナル等、様々な国内大会が開催されています。かつては、サッカーW杯並みに国民が熱狂するイベントだったものが、最近は少し勢いが落ちているようですが、やはり日本とは意識が違うように思います。ミスインターナショナルは、日本の団体が主催している関係で、毎年東京で世界大会が開催され、各ミスは日本に約3週間滞在して、様々な日本文化に触れる機会を得ますので、貴重な知日経験です。また、昨年の世界大会で優勝したミスグローブ(写真)は、14歳まで練馬区(光が丘)で生まれ育った方で、日本語もペラペラですし、大使館でも大変仲良くしています。

日本との関係は?

私が感じるのは、コロンビア人はとても意識高い系だということです。人種的にも欧州系、メスティソ(欧州系と先住民の混血)が人口の87%を占めており、ラテンアメリカ人というよりもラテンアメリカに住んでいるヨーロッパ人だと思っている節があります。そのおかげか、最近はやりのグローバルサウスの一員ではあるものの、伝統的にはほとんど西側諸国と言っていい外交姿勢を取っているので、日本にとっても、また、米国にとっても、地域のとても重要なパートナーです。問題は、意識は高いけど、実行がイマイチという点で、この点では少し苦労しています。

日本との関係では、日本がコロンビアに多く輸出しているのは、ご多分に漏れず、トヨタなどの自動車ですが、コロンビアからは、特にコーヒーと花です。コロンビアのコーヒーは、スペシャリティコーヒーと言って、高価格高品質を売りにしているのですが、日本の輸入元としてはブラジル、ベトナムに次ぐ第3位です。ブラジルやベトナムのコーヒーよりも単価が2~3倍するので、ブレンドには向きませんが、あちこちで目にされることがあると思いますので、一度試してみてください。私の友人などは、コロンビア・コーヒーは酸味が強いと言ったりしていますが、なかなか美味しいと思いますよ。ちなみに、コロンビアのコーヒーが日本に初めて紹介されたのは1970年の大阪万博で、「エメラルド・マウンテン」という希少で高品質なコーヒーとして売り出されました。そうです、例のジョージア缶コーヒーです。なお、「エメラルド・マウンテン」というのは、日本でのブランド名(登録商標)ですので、コロンビアではありません。



コーヒーと並んで、日本とコロンビアを結んでいるのは、花です。現在、コロンビアは、オランダに次ぐ世界第2位の花卉の輸出大国になっていますが、それほど古い歴史があるわけではなく、1960年代に米国コロラド大学の博士課程の学生がコロンビアの緯度や高度に鑑み、これは行けるんじゃないかと試験的に栽培を始めたところ、これがうまくいき、70年代から急速に広まったものです。特にカーネーションには強く、日本市場でも、国内消費の約3分の2が輸入カーネーションですが、そのうち約7割がコロンビア産です。食べ物と違って原産地表記がされていないのが残念ですが、皆さんのが花屋で見かけるカーネーションの約4割はコロンビアから来たものという計算です。カーネーションのみならず、薔薇や菊、アジサイなどの栽培も盛んで、これもコロンビアが「美の国」と打ち出している理由の一つです。なお、最近、日本の企業がコロンビアでスイートピーの生産を始めました。コロンビアではスイートピーは全く出回っておらず、コロンビア人に聞いても皆知らないと言うのですが、北米市場向けに輸出して大成功を収めています(来年は600万本くらいだそうです。)。

それから、コロンビアは文学・芸術の国としても知られています。画家・彫刻家のフェルナンド・ボテロは世界的に有名ですし、文学では、ガブリエル・ガルシア・マルケスが知られています。ガルシア・マルケスは、コロンビア唯一のノーベル文学賞受賞者ですが、「百年の孤独」、「族長の秋」、「予告された殺人の記録」、「コレラ時代の愛」といった代表作があり、読まれた方もおられるのではないかと思います。特に、「百年の孤独」は、1967年に出版された本ですが、日本で昨年6月に文庫化され、どうしてだかわかりませんが、一躍ベストセラーになりました。ネットでもドラマ化され、現在、シーズン2の公開待ちです。ガルシア・マルケスの世界というのは、マジックリアリズムと言われていますが、非現実的な話を緻密な描写でリアルに描くもので、とつつきにくいかもしれません、いかにもコロンビアらしいと思います。

コロンビアはいい国なのか?

その他、食事やサルサ、サッカーをはじめ、コロンビアの魅力を語ったら尽きないのですが、それではコロンビアはそんなにいい国なのかというと、もちろん問題も抱えています。冒頭で述べた治安の問題もそうですが、その背景にあるのは社会的格差です。富の偏在を示す指標であるジニ係数で見ても、コロンビアは世界最悪のレベルにあり、上位1%の高所得者層が国の富(世帯資産総額)の約40%を保有しています(OECDの報告書では、コロンビアで低所得層から中流に這い上がるには11世代かかるとされています。要するに、親ガチャが著しいということです。)。これに、コカイン生産(世界の約60%がコロンビア)、違法金採掘(最近ではコカインよりも儲かるよう

です。)等の違法経済によるブラックマネーの流入が犯罪組織の収益源となり、地方部の住民を武力で支配し、言いなりにさせている状況があります。この問題の解決には、日本をはじめ、欧米各国も力を入れていますが、なかなかうまい解決策は見つからず、試行錯誤を重ねているところです。



コロンビアにはこうした負の面もありますが、それでもコロンビアには民度も高い、魅力的な人たちが多いです。日本ではあまりにもコロンビアに関する情報が少ないので、悪いイメージが先立ちますが、その意味で、今年の大坂・関西万博のコロンビア館に130万人の方が訪れたのは、コロンビアを知る機会として大いに役立ったと思います。とにかく百聞は一見に如かずですから、好奇心のある方は是非コロンビアに注目してみてください。

大使って何やっているの？

最後に、大使って何をしているのという質問を受けることがありますので、一言触れておきます。もちろんネットフリの「ザ・ディプロマット」ほど権謀術数に明け暮れているわけではありませんが、要するに、日本政府という会社の現地支店長のようなものです。相手国との関係では日本政府を代表しますので、閣僚レベルを含めて、こちらから色々なお願いをしたり、先方から色々頼まれたりもします。また、一緒にこういうことをやらないかと働きかけたり、立場の違いを踏まえて折衝を行うこともあります。相手国政府だけでなく、民間や地方政府との関係でも様々な関係構築を図って、少しでも日本に好意的な対応を引き出すのが主な仕事です。また、現地の日本人の保護も重要な役割となっています。日本にとって望ましい結果を引き出せるよう、カードの切り方などのかけひきは当然ありますが、これはコロンビアに限ったことではないと思いますが、やはり基本は「人と人」の関係です。日本大使という看板を背負っているにしても、それなりの信頼関係がなければ、腹を割った話合いはできません。ものすごく幅広い分野をカバーしなければならないこともそうですが、それなりの知見に加えて、こいつとは話す意味があると思われる必要がいるで、その意味では、総合的な人間力が試される仕事だと思います。とにかくたくさん何度も人に会って、食事をして、それなりに面白いと思われる話を重ねることが大事で、まあ「営業」みたいなものです。

(在コロンビア日本国特命全権大使)

40 年前の卒業生からの海外便り ～中国に行こう、中国を知ろう～

峯村政孝(昭 61 年社)

一部の皆様とは、2025 年 5 月の「富田さん(寮母)お別れの会」の時にお会いしましたが、たいへんご無沙汰しております。卒業して 40 年になる、峯村です。

「海外便り」とのことなのですが、私は、卒業後 40 年、サラリーマン生活 40 年のうちの 25 年を中国で過ごしております。今は、第 3 の就職をしたばかりで、一瞬? 日本にいますが、12 月からまた中国に赴任することになっており、2026 年は、26 年目の中国生活が始まろうとしています。

今日は、そういう峯村から、どちらかと言うと、若めの方を対象にお話をさせていただきます。まず 2 つの実感からお話をさせていただきたいと思います。

1) 中国→「時間的お得感」「空間的お得感」

私がはじめて中国に行ったのは、大学 4 年の秋、1985 年の秋でした。翌年、商社に就職したのですが、入社前からの念願が叶って 1989 年から 2 年間の中国研修生活を送り、それ以降、ずっと中国と関係のある仕事をしてきました。

この時期日本は、バブルが崩壊し、その後「失われた 30 年」の低迷期に突入しました。それに対して中国は、奇跡的なスピードで、GDP では、2010 年に日本を抜いたかと思ったら、その後 15 年で、日本の 5 倍にまで急成長を遂げました。当然、社会・環境が大きく変化しました。

この 40 年間、中国の大きな変化を肌で感じながら過ごすことができ、40 年が、80 年にも 120 年にも感じることができて、人生を長く楽しめたような、とても「時間的お得感」を感じています。

40 年前、中国社会が、将来的には、道路を作ったり、ビルを作ったり、様相を変えることは想像ができました。しかし、社会・環境が変わると、人が変わる。人の変化は、想像を遥かに上回るものでした。あの時 20 歳だった中国人は、今 60 歳になっているわけですが、今の小綺麗で礼儀正しい 60 歳の中国人は、40 年前、20 歳の時にはどこにいたのか? 1985 年の中国では、そんな小綺麗で礼儀正しい人は、見たことがありません。1995 年くらいまでは、経済背景の違いが大きすぎて、中国人と普通の友達付き合いをする、世間話をするということも、ままなりませんでしたが、1995 年くらいから、価値観を共有して、お付き合いができるようになった気がします。

社会とは、環境とは、かくも人の外面のみならず内面まで変える力があるのか、と思い知らされました。この、急速に様相を変える社会を見ながら、社会・環境とともに大きく変化する人を、目にし、肌で感じながら過ごした 40 年間は、とても興味深いものでした。

さて次は、「空間的お得感」です。

中国は、2 時間飛行機に乗れば着きます。人の顔は、日本人と区別がつきません。でも、その歩んできた歴史が大きく違い、社会が全然違い、そのため、人の「生態」も日本人と違う部分が多い。青い目をして茶色い髪の毛をしていれば、「生態」が日本人と全然違うことを、受け容れやすいと思うのですが、外見は日本人と区別がつかないのに、「生態」が日本人と違う。その辿ってきた歴史の違いから生じるものだと思いますが、1 人の人が生きる 80-100 年の暮らしの違いだけで生じる違いではありません。人の 80-100 年の人生には、何千年もの歴史によっ

て作られた、社会・環境が背景としてあって、だからこんなに「生態」の違いが生じるのです。飛行機で 2 時間のところに、全然違う世界がある。飛行機に 2 時間乗って行けば、全然違う人を見ることができる、これは、「空間的お得感」と感じています。

なお、歴史が一体どう違うのか、という話については、長くなるので一言だけ、日本は中国に対して圧倒的に「平和ボケ」とだけ言っておきます。

ということで、こんなお得な経験をしないことはとてももったいない。ぜひ、中国に行って、いろんな物を見て、人を見て、体験してみてください。楽しいことばかりとは言えませんが、日本では絶対見られない物・人を見ることがで、日本では絶対できない体験をすることができます。日本という小さい国で、80-100 年という短い人生が、広く大きく、そして長い人生になります。私は、中国という、近くで遠い、似ていて全然違う国・人と、40 年間お付き合いしたことによって、限られた人生が、とても有意義に、豊かに感じることができたような気になっています。

2)「危ない！」

40 年前のアンケートで、中国に興味がある、好意を持っている、と答えた日本の若者は、80%でした。同様に、日本に興味がある、好意を持っている、と答えた中国の若者も、80%でした。40 年後の今、この結果は、全く逆になっています。中国に関心がない、良い印象を持っていない、と答える日本の若者が 80%です。中国側のアンケートでも同様の結果になっています。

私は、このような状況は、とても危ない状況だと感じています。世論には、大きく社会を動かす、環境を変える力があり、それによって、為政者すら予期しなかった歴史の流れを引き起こす可能性があります。為政者が時に誤った判断、あるいは、発言をする、これは、残念ながら避けられないことです。問題は、それに対する市民の反応です。市民の反応によって、為政者の誤りは、増幅されることもあれば、消滅することもあります。私の祖父は、東大卒の公務員だったのですが、中国戦線に行きその後シベリア抑留生活をしました。その祖父が言っていました。「昭和初期、右翼や軍隊がアホなことをはじめたが、エリートである自分とは関係のない世界のできごとだと思っていた。気がついたら自分が戦場に行くことになっていた。」

日中戦争のきっかけとなった、1937 年の盧溝橋事件、北京の日本軍演習地でのつまらない誤解、これを政府は、抑えようとしたのですが、軍が暴走、そして、世論が軍を支持しました。満州侵略のきっかけとなった、1931 年の柳条湖事件、その 3 年前の張作霖爆殺事件の時同様、軍の暴挙に対し、政府は不拡大方針でした。張作霖爆殺事件は、收まりましたが、3 年後の柳条湖事件は、世論の後押しを受けて、拡大路線へと進みました。この 3 年間で、社会・環境、そして世論が変わっていたのです。

世論とは、往々にして、強行路線が柔軟路線よりも支持を得がちです。政治家は、柔軟路線をとると、軟弱という批判を受け勝ちです。市民は、冷静に、自分の目で見て、自分で判断する責任があります。民主主義とは、悪く言うと、間違っているが数の多いものが勝ち。数の多い意見が、「正しい意見」になる。そして、選挙で票を得られなければ失職する政治家は、世論の制約の中で動き、最近のように、ポピュリズムというような状況を呈するようになる。

問題は、この世論を形成する市民が、相手を知らず、時には偏る情報や意見によってイメージを作る、判断をする、ということです。

私は商社勤務時代、ハルビンに駐在し、ロシア国境の農場を舞台に農業プロジェクトをやっていたのですが、農

場の人に何度か言われたことがあります。「峯村は日本人なのに優しくて良いやつだなあ。」私が「そう？ あんたが今まで会った日本人は怖くて悪いやつだったの？」と聞くと、「いや、俺は日本人に会ったのは峯村が初めてだ。」部下に日本出張に行かせると、部下の子供が、「おかあさん、日本に行かないで！ 日本に行ったらひどい目に遭うよ！」というようなことがありました。

まずは自分の足で立って、自分の目で見ましょう。

もちろん、必ずしも好印象をもつとは限りません。行ってみたらより悪い印象になるかもしれません。でも、少なくとも、大きく歴史を動かす可能性がある、ということを踏まえて、自分の足でその地に立って、自分の目で見ておいた方がいいと思います。世界各国に行くことは無理ですが、飛行機に乗って 2 時間で行ける中国、過去 15 年にも及ぶ戦争をした中国、これからも、無視したくてもできない中国は、見ておきましょう。

3) 日本人代表

私は間もなく、26 年目の中国生活に入ろうとしています。

40 年間がんばってきたのに、日中関係は、40 年前より悪化してしまっており、とても無力感を感じています。ですが、力の続く限り、少しでも良い方向に向かうように、力を尽くしたい。63 歳にして、その思いだけです。

どんな普通の日本人でも、中国にいれば、日本人代表です。私を通して、「日本人は xxx だ」というイメージをもつ人は多いでしょう。また、その人は、別の人には、「日本人って xxx だよ」と言うでしょう。私が出会う中国人のうち、少しでも多くの人が、日本人に親しみを感じてくれて、誰かが日本人の悪口を言っていたら、「そんなことないよ、私の知っている日本人は xxx だよ。」と言ってくれたらいいな、と思っています。経済人として、日中の経済的結びつきを強めて、政治的な衝突が起きても、お互いの経済的依存関係によって関係が保たれるようにできれば、と思ってがんばってきて、そして、大きな無力感を感じているわけですが、少なくとも、中国で、日本人代表として、コンビニの店員と接する、電車で向かい合わせで座る、こんなところでも、日中友好に貢献できます。

経済的結びつきを強める、という大望は捨てず、かつ、日常的な現実的な「できること」を着実にやっていきたい、と思っています。

4) アホで弱い人間

今この瞬間でも、地球のどこかで戦争をしている人がいる。大量殺人が行われている。市民が選んだ、どんな偉そうな政治家でも、これを解決することができない。なんで人間とはここまでアホな動物なのでしょうか。サザンオールスターズの「ピースとハイライト」という曲の歌詞に、「20 世紀で懲りたはずでしょ」という言葉があります。まだ懲りない？ もう 1000 年昔の話になってしまった？

コロナの 3 年間に思ったことはありませんか？ 世界中で、一生懸命に命を救う活動をしている、その同じ時にウクライナで大量に人殺しが始まった。なんじゃこりや？

戦場で人殺しをしている人同士は、少なくとも開戦間もない時は、何の恨みもないはずです。その後、復讐が復讐を呼ぶ、憎悪が増してしまう。1937 年 12 月 13 日の南京大虐殺、これは、7 月 7 日の誤解から始まった盧溝橋事件を拡大することになって、8 月 13 日に始まった上海戦線、当然中国軍の抵抗が強く、日本軍に、南京まで進軍する過程で多くの戦死者が出た。そこで日本の軍人たちは、憎悪を増し、南京城を突破した時には、狂気の集団になっていた。でないと、あんな残虐な行為はしないでしょう。

人間はアホであると同時に、とても弱い。社会や環境で、その本質まで大きく変わってしまいます。南京で残虐行為をした人は、きっと普段は私と変わらない普通の人だったのだと思います。

市民として、相手を知り、受け容れ、尊重し合う。そういうことが、すごく大事なのだと思います。1人 1 人が相手を知り、受け容れ、尊重し合うことで、社会の雰囲気が保たれ、平和が保たれる。日中戦争で日本人に殺された中国人は、2000 万人です。その人 1 人 1 人に、家族もいれば親友もいた。この事実は消せません。中国人が、日本人に対して、ある程度の恨みや恐怖をもっても当然です。でも中国人にわかつてもらいたいのは、当時の日本の軍人は、行きたくて中国戦場に行ったわけではないと思います。日本人も、政府の命令によって戦場に行かされた被害者なのです。なぜ行かされることになってしまったのでしょうか。なぜそういう状況を許してしまったのでしょうか。さて今は大丈夫でしょうか？ 今も同じ状況が作られようとしているかもしれない。また同じことが起こらない、という保証は全くありません。

5)「中国に行こう」「中国を知ろう」

日本と中国は、隣人です。隣人は、関係が悪くてどうしようもなくなったら、引越しすることができますが、日本と中国は、永遠に引越しできない隣人です。ならば、できるだけ相手を理解して、尊重して、仲良くすることによって、自分も楽しく暮らしたい、と思いませんか？

結婚しても、関係が悪くてどうしようもなくなったら、離婚する、別居することができますが、日本と中国は、いつ目が覚めても隣にいます。ならば、できるだけ我慢できることは我慢して、仲良く楽しく暮らしたいと思いませんか？日本人は、どうしても同じアジア人に対しては、ある程度の優越感がある、というか、優越感をもちたい、と思っている。なので、アジア人について、日本人と相容れない部分があると、「あいつは間違っている」「あいつはわかつていない」ということになり勝ちです。欧米人に相容れない部分があっても、そうは思わないのではないでしょうか。それは、優劣の話をする前に、中国人、アジア人が、日本人と近い、簡単に理解し合える、と思っているからではないでしょうか。外見は似ていても、何千年も全然違う歴史を辿ってきた人ですから、「違う」のです。優劣はわかりませんが、とにかく「違う」のです。同じアジア人ですから、欧米人と比べれば、遥かに理解しやすい、共感しやすい、でも、その歴史の違いから、確実に「違う」。まずは中国の歴史を少し勉強して、その「違う」を認識して、それを前提にして、そして、

「中国に行こう」「中国を知ろう」！

女性の時代

多様化する社会において求められる新たな視点

古倉義彦(昭60年法)

一橋 YMCA 寮に女子寮が併設されたと聞き、ひっくり返るほど驚きました。

私が卒業した愛媛の愛光学園も最近男女共学になったことを聞いてはいましたが、あの、男子寮の粗雑な雰囲気の食堂やシャワールームを記憶にとどめている者にとって、衝撃の事実です。

しかしながら、現代社会は「女性の時代」とも称され、女性がさまざまな分野で活躍する姿がますます目立っています。これは単なる一時的な流行ではなく、社会構造や価値観の変化、そして人権意識の高まりによるものです。その中で、男性はどのような能力を身につけるべきなのか。男子諸氏のアイデンティーは、どんなものなのでしょうか？それとも、男性・女性などと言って騒いでいる私がもう古いのでしょうか？女性の社会進出は、政治、経済、科学、教育、芸術などあらゆる分野で見られます。管理職やリーダーシップの立場に就く女性も増え、意思決定の場に多様な視点が持ち込まれるようになりました。こうした社会では、性別にとらわれない能力や個性が重視され、協働や共感、柔軟性が重視されています。

女性の活躍が進む社会において、男性にも従来とは異なる能力や姿勢が求められているように思います。

これは、一種の社会変化に対する対応と言う意味で、どの時代にも青年諸氏にとって重要な課題ではないかと思います。

- 共感力とコミュニケーション能力: 多様な価値観を理解し、相手の立場に立って考える力が不可欠です。チームワークや協働が重視される現代では、対話や傾聴の姿勢が求められます。
- 柔軟性と適応力: 変化の激しい社会環境において、固定観念にとらわれず新しい価値観を受け入れる柔軟性が重要です。
- 自己理解と自己管理: 自分の強みや弱みを客観的に認識し、感情や行動を適切にコントロールする能力がリーダーシップにもつながります。
- 協働・サポート力: 他者と協力し、必要に応じてサポート役に回る謙虚さや多様な役割を担う姿勢も大切です。
- 学び続ける姿勢: 新しい知識やスキルを積極的に学び続けることで、社会の変化に対応できます。

これら5項目は、それぞれ徹底して取り組んだ先には偶然を媒介として大きな報酬と言いますか、成果を手にすることが多い項目です。

学び続ける姿勢を貫けば、その延長で何か自分の得意とするもの、あるいは一生のテーマを授かることもあるでしょう。

私はクリスチャンではありませんが、この YM 寮で見聞きしたクリスチャニティは、図らずも、上記のどの項目にも通じる信仰を持っていると思います。

現代社会においては、多くの宗教団体が男女平等や多様性を受け入れる方向に変化しつつあります。宗教の教えを通じて得られる「他者への思いやり」や「寛容性」、「自己を見つめ直す姿勢」は、女性の活躍する社会においても重要な価値です。宗教的価値観を柔軟に解釈し、時代の変化に応じてアップデートすることが、より良い共生社会の実現につながるのでしょう。

女性が活躍する現代社会では、男性もまた従来の役割にとらわれず、新たな能力や価値観を身につけることが求められています。共感力や柔軟性、協働力、自己理解などは、性別を問わず重要な資質です。また、宗教も

社会の変化とともに進化し、男女が共に尊重し合える社会の実現に貢献できる可能性を持っています。個々人が自らを見つめ直し、変化を受け入れる姿勢こそが、これから時代に求められる在り方だと言え、まさに YMCA の女子寮併設はその一里塚になることを希望します。

現役の YM 寮青年諸氏は、近くに女子寮があることいろいろと意識して、協調性や見返る力を自然と身に着けられるかもしれませんね。

現役の寮生諸氏はそんな社会的進化の重要なバトンを受け取っていることを考えつつ、寮生活を謳歌してほしいものです。

書評：『戦時下の教会を知ろう～新たな戦争を回避するために～』

佐藤周一(昭 54 年法)

1. はじめに

今年 2025 年は、昭和 20 年(1945 年)8 月の敗戦から 80 年が経過した節目の年だった。80 年という歳月は一つの世代の終わりを意味し、具体的には戦争当事者の多くが冥界入りして戦争体験に関する「ナマ」の声を聞くことが不可能になってきたことを意味する。

3 年前に 96 歳で亡くなった母は大正 15 年(1926 年)生れで 18 歳の時に満蒙開拓団の一員として宮城県内の貧しい農家から満州に渡った。長兄は既に出征し(昭和 19 年 11 月にフィリピン・レイテ島で戦死)10 代半ばで育ち盛りの弟二人を食べさせる口減らしの意味で、男勝りだった母は勇躍「満州で新たな未来を築こう」の呼びかけに応じたのである。

しかし開拓団を守る役割の関東軍は、戦況悪化に伴い昭和 20 年の前半には南方への転進が命じられて満州を離れており、本土空襲・沖縄戦の敗北・特攻作戦の挫折と、坂を転がるように敗戦が濃厚となる中、長崎に 2 発目の原爆が落とされた 8 月 9 日にソ連軍が日ソ中立条約を一方的に破棄して満州に侵攻。護衛の無い開拓団は忽ち囚われて、働く男性はシベリアに送られ、婦女子や高齢者は近傍の収容所に収監された。

当時二十歳目前の母は、囚人出身も多いソ連軍兵士の餌食になる前には、初恋相手だった関東軍将校から渡されたナンブ拳銃で自決する覚悟をしていたそうだが、幸いなことに収監先では暴行など酷い目に遇うことなく、翌年の秋には無事、引き揚げ船で帰国した。

満州開拓を奨めた日本政府は現地に残された数十万人の日本人を事実上見捨てた為、2 割近くが飢えや病気で命を落としたほか、婦女子の中には「中国残留孤児・婦人」となった人も多い中、栄養失調になりながらも母が帰還できたのは奇跡的なことだった。因みに母と同じ年の父は病気がちで体格が劣っていたことから召集が遅れ、命拾いしていた。

終戦から 10 年後の昭和 30 年(1955 年)に生れた私は、戦争体験者である親世代の話を聞いて育ったこともあり、太平洋戦争については小さい頃から一定の視点を得ていた。

生まれ育った東京・下町が昭和 20 年 3 月に大規模な無差別爆撃の被害に遭い、甚大な犠牲を払ったことを小学生の頃から学ばされていました。地元小学校の音楽教師の夫君が作家の早乙女勝元氏(東京大空襲・戦災資

料センター初代館長)だったこともあり、その著作を通じて無辜の一般市民が無抵抗のまま戦争の犠牲になつたことを憤り、昭和天皇や政治指導者たちは一体何をしていたのか、なぜ無謀な戦争を開始し、戦況が悪化してもズルズルと継続することになったのか、その背景を知りたいと思うようになっていた。

中学～高校で学ぶうち、日本の降伏条件であるポツダム宣言受託に際して国が拘ったのは「国体＝天皇制」の存続であり、それが確約されたことを知り昭和天皇が「聖断」して玉音放送に至る経緯を学んだ。一橋大学入学後は、戦後の日本国憲法で「国民統合の象徴」として天皇を位置づけた背景を詳しく知りたくて、憲法学の杉原泰雄ゼミに参加した。

その背景詳細に関する見解は省略するが、同じ敗戦国のドイツと比較しても、日本は戦争責任の追及を曖昧にしたまま歴史的総括を怠ってきたことが、今日の政治腐敗や指導者層の無責任体質の醸成に繋がっていると観るのが私の基本的な考え方である。

前置きが長くなってしまったが、戦後80年の節目の今年、マスコミが昭和史の振り返りを特集し、TV や映画で太平洋戦争関連の番組や作品が公開されたほか、出版物も多かった。そんな中、書店で偶々手に取った本が表題の書籍である。著者の山口陽一氏は、私より三歳下の 1958 年生れ。東京基督教大学特別教授・日本同盟基督教団正教師を務めながら、『近代日本のクリスチヤン経営者たち』『日本開国とプロテスタント宣教 150 年』など著書も多い研究者である。

いのちのことば社から今年 8 月 15 日に発行された表題本の帯には「キリスト教会は4機の戦闘機を献納した」と戦争中の教会側の加担を示す衝撃的な言葉が並んでいる。私は西洋文化の象徴でもあるキリスト教は国家神道による総動員体制下では弾圧の対象となり、苦難の時代を過ごしていたものと考えていたのだが、あにはからんや、自ら天皇制を支持する側に回り、戦争そのものにも積極的に加担していたことを知って驚いた。以下、書籍の内容を概観しながら、コメントを付していきたい。

2. なぜ教会は戦時体制に巻き込まれたのか

明治維新後の近代日本において、禁教の対象ではなくなったキリスト教の「再」宣教は、 1872 年 3 月に横浜に設立された「日本基督公会」が嚆矢とされている。日本人の信徒を対象とした我が国最初のプロテスタント教会である。キリスト教史家の大内三郎によれば「明治期のキリスト教徒は『国家』を離れてキリスト教信仰を考えることはできず、士族青 年にリードされたプロテスタント教会は、国害とされたキリスト教を否定し、報國の志をもって日本の近代化に貢献することを目指した」とされている。内村鑑三が唱えた「二つの J (JESUS と JAPAN) に身を捧げよ」の精神そのものである。

とはいって、偶像礼拝を拒否したり、安息日を厳守する初期の入信者たちが迫害されることは当然であり、特に初期の牧師たちは旧佐幕派の士族出身者が多く、薩長の藩閥政治 に唯々諾々と従わない気概も残っていたことから日本社会との軋轢は激しかった。

しかしながら、大日本帝国憲法の発布や教育勅語の施行など、天皇制国家体制が明確 に方向づけられると、日清・日露戦争を経る内、教会は国体との衝突を避け、むしろ融和 を心がけるようになっていく。大逆事件 (1910 年) は社会主義者弾圧を主目的としたもの だったが、プロテスタント受洗者の減少にも影響を及ぼしたと云われている。

そして欧米において 20 世紀初頭に勃興し始めた社会主义を、既存のキリスト教が抑え込む社会的な役割に注目した内務省事務次官・床次竹二郎が国策協力組織を形成すべく、教派神道・仏教諸派・キリスト教代表者ら 70 名余を集めて政府関係者と会した。この「三教会同」と称される会合(1912 年)では「皇室を盛り立てるために国民道徳を高め、宗教と政治・教育が融和して国家を盛り立てるようにし、皇室と国家のために政教一致で行きましょう」とのスローガンを声明として発表した。「報國の志」が次第に「国策協力」に変容し始め、政治利用されることを薄々知りながら、日本での伝道好機と捉える「甘さ」があったと言わざるを得ない。特に明治憲法下での天皇の位置づけの変容、すなわち天皇機関説が排斥されたり、天皇の神格化が進みだした状態を横目で見ながら、教会は「天皇の神社」を非宗教の「国民儀礼」と位置づけることで、偶像崇拜を禁ずる聖書の教えに背くと共に、唯一絶対神への信仰を堅守する教会の任務を自ら放棄していくことになる。

この頃、ミッション系大学の中では様々な衝突も生じ始めていた(1932 年:上智大学生の靖国神社参拝拒否問題、1935 年:同志社大学内で神棚が取り外されたことを問題化など)ほか、1925 年に創建されていた朝鮮神宮(天照大神と明治天皇を祭神とする)に対し、1938 年に日本基督教会議長は現地教会牧師らに対し神宮参拝を求めたところ、参拝を拒否した教会が 200 カ所も閉鎖されたほか、2 千人が投獄されたと云われている。中には朱基徹牧師のように拷問の末に殉教した者も含まれる。

3. どうして、積極的な加担まで教会はしたのか

日米開戦の半年前(1941 年 6 月)、千代田区の富士見町教会において日本基督教団の創立総会がプロテスタント33教派(信徒数は約 20 万人)の合同行事として執り行われた。総会では国民儀礼として「君が代斎唱」「宮城遙拝」「皇軍兵士のための黙祷」がセットとして行われ、「我らは基督教信者であると同時に、日本臣民であり、皇國に忠誠を尽くすを以て第一とす」と宣誓もしている。当時の教団規則(生活綱領)には「皇國の道に従いて信仰に徹し、各其の分を尽くして皇運を扶翼し奉るべし」と記されている。「神の栄光を現す」べきところ、「皇運を扶翼する」ことが第一義とされたのである。(「扶翼」とは助けること)

「キリスト教の神と天皇」は、まさに聖と俗の異次元の存在であるはずなのに、なぜ「二夫にまみえる」かのごとく、教会は天皇にも仕えることが出来たのだろうか。ひとつには、前述の通り、天皇崇拝を非宗教の「国民儀礼」と解釈したことである。維新以降の近代化の中で、キリスト教はゼロからのスタートではなく、禁教下で国害とされたキリスト教の克服という「マイナス」から再宣教が始まり、「報國の宗教」であることを証しするために、皇運を扶翼することで日本の近代化に貢献しようとしたのである。

しかし、そのような大義名分は、宗教団体法(1939 年)を通じ、あらゆる宗教・宗派を戦時体制に組み込む政府の狡猾な施策の前には意味をなさず、神格化された天皇への忠誠を求める流れに逆らうこともないまま、教会は太平洋戦争を聖戦と呼び、殉国を殉教とみなす組織へと変貌を遂げていく。

南方攻略の拠点であったガダルカナル島からの撤退を余儀なくされ、戦局が明らかに不利に転じた 1943 年の秋には、日本基督教団は全国の教会から 72 万円超(現在の貨幣価値で 2 億 4 千万円余)の献金を集め、海軍・陸軍に各 2 機づつ「戦闘機」を献納している。零戦 1 機が約 20 万円(現在貨幣で約 7 千万円～1 億円)したそうであるが、「病院船」ならともかく、殺戮兵器である戦闘機を献納していることに驚かされる。

ただししかし少數ながら、信徒の中には反戦活動や兵役拒否した者もいた。賀川豊彦は 1941 年の 4 月から 8 月にかけ、日本基督教連盟の戦争回避代表団に加わって米国内を講演すること 300 余回。帰国後には近衛首相と

日米間の平和工作について協議している。

また日露戦争時には、矢部喜好牧師(1884～1935)が日本人初の良心的兵役拒否により投獄されている。服役後の再召集時には衛生兵として従軍している。第一次大戦を経験した内村鑑三は「戦争は悪事であると同時に刑罰でもある。負ける戦争ばかりでなく、勝つ戦争もまた刑罰である」と無教会派独自の非戦論を展開したが、教会派本流は可戦論だった。

4. 戦後教会の戦責告白と懺悔の道のり

1945年8月15日、日本基督教団の幹部たちは焼け残った神田錦町の教団事務所で玉音放送を聞き、承諾必謹の祈祷会が開かれた。そこでは「天皇にお仕えする力が足りずに敗れてしまったことを懺悔すると共に、新日本建設のための新たな報国を誓う」内容だった。

目標は変わったものの、相変わらず「報国」のキリスト教であり、晴れ晴れとはしない戦後のスタートではあったが、ともかく狂気の時代は去り、教会にはキリスト教ブームが訪れた。

しかしながら、戦時下での教会による戦争加担への罪責を表明するには22年という長い時間を要すことになる。1967年に日本基督教団議長・鈴木正久による「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」がそれである。以下に主要部分を引用する。

「『世の光』『地の塩』である教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした。まさに 国を愛する故にこそ、キリスト者の良心的判断によって、祖国の歩みに対し正しい判断を なすべきでありました。しかるにわたしどもは、教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努力することを、内外に向かって声明いたしました。まことに わたしどもの祖国が罪を犯したとき、わたしどもの教会もまた、その罪におちいりました。 わたしどもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し、主にゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞に心からのゆるしを請う次第であります。」

この戦責告白は教団内に紛争を巻き起こしたが、アジアの教会との関係では、かけがえのない役割を果たした。日本国憲法の平和主義がアジアに生きる戦後日本の悔い改めの果実であったように、日本の合同教会の悔い改めはアジアにおける日本の教会の出発点となったのである。1990年には日本基督教団が「韓国・朝鮮の基督教会に対して行った神社参拝強要についての罪の告白と謝罪」が行われた。この謝罪は、戦後50年の節目に行われた1995年の「村山談話」につながっていく。

「わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道を進んで国民を存亡の危機 に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多 大の損害と苦痛を与えました。私は、未来に誤ち無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止め、ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心から のお詫びの気持ちを表明いたします。」

しかし我々は、自民党の保守本流層など「国体護持受益者」は、戦争加害に向き合うことなく、依然として靖国神社参拝など「報国」思想を堅持していることを知っている。村山談話の10年前、1985年には「戦後政治の総決算」を標榜する中曾根康弘首相が靖国神社を公式参拝したためアジア諸国からの批判が集中した。同年、西ドイツのヴァイツゼッカ一大統領は、講演「荒れ野の 40 年」において「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります」と語り、同じ敗戦国でありながら独日の首脳間の大きな落差が印象付けられた。

5. 戦後教会の反省を受けて、我々は何を考えるべきか

前掲の通り、戦後教会は「国家を神と並べる偶像礼拝と、国民の生命さえ顧みない侵略戦争への加担は、神への愛と隣人への愛への背反であった」と自らの過ちを率直に懺悔し真摯に反省している。

戦後 80 年を経て、今また世界は独裁主義陣営が民主主義陣営より多数派となり、ロシアによるウクライナ侵攻など「戦争が日常化する」時代を迎えていた。憲法 9 条を抱く我が国においては、戦死者を出すことなく 80 年を経過したが、第一次安倍内閣(2006～2007 年)では、教育基本法を改正し、愛国心教育と行政による教育関与を進めたほか、憲法改正に向けた国民投票法が可決された。第二次安倍内閣(2012～2020 年)は「日本を取り戻す」をスローガンに安保関連法案を制定すると共に、靖国神社への首相公式参拝は「憲法が禁じる国の宗教的活動には当たらない」との解釈を示した。戦前の日本への回帰志向が明確であり、歴史修正主義や排外主義が横行する素地を形成したと云える。

そして 2025 年 7 月の参院選では、極右政党である参政党が大幅に議席を伸ばして話題となつたが、欧米各国でも右翼的な思潮が拡大しつつあり、トランプ大統領の自国ファースト主義は民主主義陣営の盟主としての矜持を失わせつつあるとしか映らない。

こうした「内向き思考」が大勢を占めつつある混沌とした世界情勢の中で、我が国はどのようなスタンスを取るべきか、本書は次のように結んでいる。「過去に目を閉ざさずに、かつ現在の戦争の現実を考え抜き、平和をつくりだす政治を積み重ねていかなければならぬ。日本国憲法の本領を今こそ発揮すべきときである」と。

憲法学徒の一人として、私も今こそ憲法 9 条の精神を世界の恒久平和達成に活かすべく「単なるお題目」として唱えるレベルを脱し、「再宣教」の時代が到来したと考えて行動すべきであると思料する。昨年ノーベル平和賞を受賞した原爆被団協のごとく、粘り強く諦めずに、戦争放棄を通じて神への愛と隣人への愛が達成されるよう、常に考え行動したいと思う。YMCA 一橋寮の寮生諸君にも戦後教会史を振り返りながら、再び戦争に加担しないためには何を「見張り」ながら、どう行動すべきか、じっくり考えて頂きたいものである。

完璧と妥協

飯塚陵雅(法学部1年)

0. はじめに

2025年度に入寮しました、法学部1年の飯塚陵雅と申します。出身は千葉県ですが、中学から高校を卒業するまでは群馬県で過ごしました。現在はバレーボール同好会に所属し、授業や寮生活と並行して日々活動しています。まだまだ未熟な部分多い私ですが、これから4年間どうぞよろしくお願ひいたします。

1. 大学生活初年度を振り返って

大学生活も一年目が終わりに近づいた今日、この一年を振り返ると、私の生活は「妥協」と向き合う時間の連續だったように思われる。幼いころから私は細部を気にし、何事も人よりできていなければ落ち着かない、そんな性格だった。テスト勉強でも、理解しきれていない部分一つでもあると不安が消えず、すべてを潰してからでないと次に進めない。そんな「完璧主義」に近い姿勢が、今まで自分を縛ると同時に、支えてきたことも確かである。勉学やスポーツに人一倍打ち込むことができたのも、ある意味その性格の賜物であり、一橋大学に入学できたのもその延長にある。しかし大学に入り環境が一変したことにより、自分の中で当然に存在していた「完璧」という考え方も揺らぎ始めた。授業や人間関係、生活スタイルなどあらゆる事柄に主体性が求められ、何もかもが自分の選択と判断にゆだねられる。そんな環境の中で、自分がこれまで拠り所にしていた完璧主義の正体を改めて冷静に分析し見つめなおす機会が多く訪れた。

2. 「完璧」の正体

そもそも、私が求めていた「完璧」とは何だったのか。振り返ってみれば、それは「自分の定めた及第点を常に超えること」が基盤にあり、その延長線上に「すべてにおいて100点を目指すこと」があったように思う。その根底には、おそらく強いプライドが存在した。人並みにすらできない自分を想像することを恐れ、どこか劣っている部分があれば、まるで自分のすべてが否定されるのではないかという過剰な恐怖に支配されていた。しかし、大学受験期から大学生活の始まりにかけて、その思考回路には変化が生じていた。それが「妥協」という感覚の芽生えである。以前の自分にとって妥協とは、どこか敗北にも似た響きを有し、受け入れがたい、あるいは避けるべき態度であった。しかし今では、その意味が大きく変わりつつある。

3. 「完璧」のための「妥協」

大学生活では、こなすべきタスクや学ぶべき知識の量と幅、求められる判断の速さなど、あらゆる側面でこれまでとは比較にならない負荷がかかる。以前のように、すべてを完璧に処理することは物理的にも精神的にも不可能であることを痛感せざるをえなかった。その中で私が学んだことは、「妥協」とは単なる諦めではなく、むしろ最善を尽くすための手段だということであった。すなわち限られた時間と労力を最も効果的に配分するための手段

であるということだ。すべてタスクに同じ比重で向き合い常に完璧を目指すのではなく、優先順位をつけ、注力するべき領域を明確にする。そのうえで思い切って手放すべき部分を見極める。これは合理性と自省に基づいた判断であり、その判断を誤らないことこそ、大学生活における生産性と成長に直結する。そして適切に「妥協」することで、本来注力するべき部分に集中でき、結果としてより質の高いパフォーマンスを発揮できるのである。この気づきによって、私は自分自身にかけていた無用なプレッシャーから徐々に解放された。入学直後は立て続けに体調を崩すこともあったが、今ではそうした不調もほとんどなくなり、精神的に軽くなった実感がある。完璧であらねばならないという呪縛から離れたことで、生活そのものに余裕が生まれたように思う。

4. 最後に

この一年で得た最も大きな学びは、妥協は後退でなく前進のための主体的な選択であるということだ。これから先の大学生活でも、適切な妥協と努力のバランスを見極めつつ、自身の可能性をより広げていきたいと考えている。精神的な余裕を取り戻した今の自分が、今後どのように成長していくのか、自らにも大きな期待を抱いている。

鉄道貨物輸送の役割-石油輸送

中田勇輔(経済学部1年)

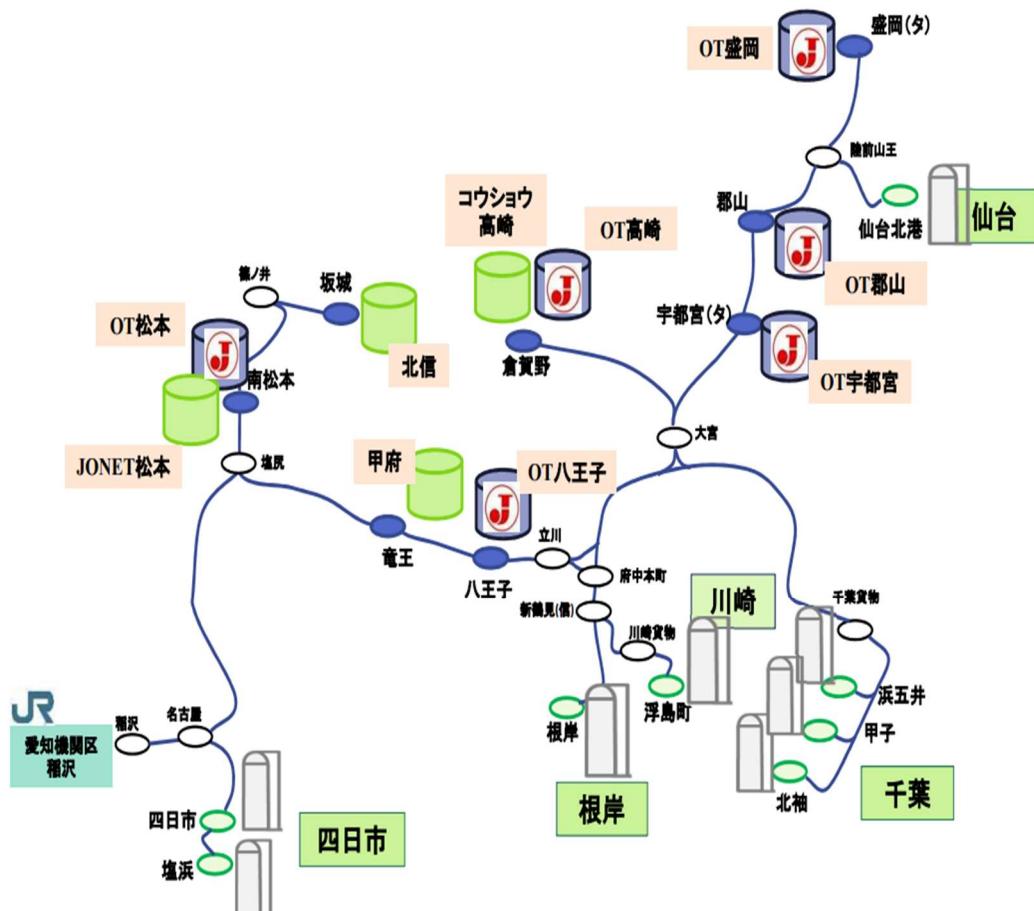
0. ご挨拶

はじめまして、今年4月に入寮した経済学部1年の中田勇輔です。一橋大学・津田塾大学写真部と一橋大学鉄道研究会に所属しています。先日の一橋祭で展示された一橋鉄研の研究誌「続・鉄道貨物輸送の今-2025-」より、僕が寄稿した『鉄道貨物輸送の役割-石油輸送』を、鉄道知識がない方に向けて再構成しました。全文は一橋鉄研のホームページで公開されていますので、ご興味のある方はぜひご覧ください。

1. 鉄道石油輸送の現状—運転区間と輸送量

中東などから輸入された原油は、日本全国に19箇所ある製油所で精製されて石油製品となり、日本全国の油槽所(石油製品の一時的な貯蔵施設)に送られる。製油所から油槽所への輸送には主に内航タンカーが使われるが、港から距離のある内陸部への輸送では鉄道が用いられている。2025年4月現在の鉄道による石油輸送区間は以下のとおりである。

図1 国内の石油輸送区間



1 国内の石油輸送の発送地

発駅(会社名/路線名)	製油所	製油所所在地
仙台北港(仙台臨海鉄道臨海本線)	ENEOS 仙台製油所	宮城県仙台市
浜五井(京葉臨海鉄道臨海本線)	コスモ石油千葉製油所	千葉県市原市
甲子(京葉臨海鉄道臨海本線)	大阪国際石油精製千葉製油所	千葉県市原市
北袖(京葉臨海鉄道臨海本線)	富士石油袖ヶ浦製油所	千葉県袖ヶ浦市
浮島町(神奈川臨海鉄道浮島線)	ENEOS 川崎製油所	神奈川県川崎市
根岸(JR 東日本根岸線)	ENEOS 根岸製油所	神奈川県横浜市
四日市(JR 東海関西本線)	コスモ石油四日市製油所	三重県四日市市
塩浜(JR 貨物関西本線貨物支線)	昭和四日市石油四日市製油所	三重県四日市市

表2 国内の石油輸送の到着地

着駅(会社名/路線名)	着駅所在地	発駅	本数
盛岡(タ)(JR 東日本東北本線)	岩手県盛岡市	仙台北港	2(+1)
郡山(JR 東日本東北本線)	福島県郡山市	仙台北港、浜五井、浮島町	4
宇都宮(タ)(JR 東日本東北本線)	栃木県河内郡上三川町	浜五井、甲子、浮島町、根岸	6(+1)
倉賀野(JR 東日本高崎線)	群馬県高崎市	浜五井、北袖、浮島町、根岸	9(+1)
八王子(JR 東日本中央本線)	東京都八王子市	浜五井、根岸	4
竜王(JR 東日本中央本線)	山梨県甲斐市	根岸	2
南松本(JR 東日本篠ノ井線)	長野県松本市	浜五井、北袖、浮島町、四日市、塩浜	6
坂城(しなの鉄道線)	長野県埴科郡坂城町	根岸	2(+1)

注)「本数」は平日に運転される石油輸送列車の本数(多くの石油輸送列車は土日運休)。カッコ内は繁忙期(=冬季。暖房の使用などで石油の需要が高まる)に運転される臨時列車の本数。この他にも臨時列車が運行されることがある。

日本国内の主要 5 油種(ガソリン、灯油、軽油、A 重油、B・C 重油)の需要の約 6%、年間でおよそ 700 万キロリットルが鉄道で輸送されており、これは大型のタンクローリー 350 万台分に当たる。特に内陸 3 県(群馬、栃木、長野)では県内の石油需要の 8 割以上が鉄道によって運ばれている(群馬 102%、栃木 89%、長野 86%)など、石油輸送において鉄道が占める役割は大きい。

2. 鉄道石油輸送の現状—車両

現在の石油輸送には、タキ 43000 形とタキ 1000 形という 2 形式、1200 両以上の車両が使われている。基本的に緑と灰色のツートンカラーの車両と黒色(タキ 43000 形のみ)の車両は日本石油輸送株式会社(JOT)所有、青色の車両は日本オイルターミナル株式会社(OT)の所有である。ただし、両社の間で車両の貸し借りや移籍が発生するため一部に例外がある。

・タキ 43000 形

1967 年から 1993 年にかけて、何度も仕様変更を重ねながら 819 両が製造されたガソリン専用タンク車。後述するタキ 1000 形による置き換えや北海道での鉄道石油輸送の廃止などで淘汰が進んでいるものの、2025 年 4 月時点では 305 両が運用中である。



JOT 所有、緑と灰色のタキ 43000 形 / JOT 所有、黒のタキ 43000 形 / OT 所有のタキ 43000 形

・タキ 1000 形

1993 年から製造が始まり、2021 年までに 1008 両が製造されたガソリン専用タンク車。最高速度が 75km/h のタキ 43000 形と異なり 95km/h での運転が可能であり、高速貨物列車には専用的に充当される。東日本大震災の津波被害などで一部に廃車が発生したが、2025 年 4 月時点では 958 両が運用中である。



JOT 所有のタキ 1000 形 / OT 所有のタキ 1000 形

3. 鉄道石油輸送の課題と対応

鉄道石油輸送の大きな課題は、災害時の脆弱性である。石油に限らず鉄道貨物輸送は、輸送ルートの一部が寸断された場合、道路交通と比べての迂回輸送を速やかに行うのが難しいという欠点がある。列車の運転には路線

の習熟のための訓練が必要であり、迂回運転ができる訓練済みの運転士の数が不足しているほか、路線の特性によっては特殊な機関車が必要となる場合があるためだ。また、迂回運転が行われた場合でも輸送力が不十分であり、迂回輸送時のコストは現状すべて荷主負担となる。

2011年東日本大震災では、根岸駅から、盛岡貨物ターミナル駅行きは高崎・上越・信越・羽越・奥羽・青い森鉄道・IGRいわて銀河鉄道線経由で、郡山駅行きは高崎・上越・信越・磐越西線経由で迂回輸送が行われたことは有名だ。この時、コンテナ列車が日常的に走行するルートを通る盛岡行きは3月18日から迂回輸送が始まり、最長18両編成の列車が一日2本という輸送量を確保できた。一方で、通常貨物列車が走行せず非電化である磐越西線を通る必要があった郡山行きは、磐越西線の復旧初日である3月26日から迂回輸送が始まったものの、磐越西線を運転できる運転士が一人しかおらず、JR貨物社員の訓練が済むまでの間はJR東日本の社員が常務して対応した。また、磐越西線の急勾配のため、一列車あたりのタンク車は10両に制限されるなど、通常運行しない路線での迂回輸送の難しさが浮き彫りになった。

JR貨物は、運転士の養成や機関車の増備、迂回輸送時のコストなどにかかる予算について公的支援を求めるとともに、鉄道不通時の迂回輸送のパターン化、運転士の養成、機関車の迂回運転対応改造などを進めている。

4. 参考文献

- ・トラベルMOOK 貨物列車の世界(交通新聞社 2025)
- ・2025 貨物時刻表(公益社団法人 鉄道貨物協会 2025)
- ・よみがえれ！みちのくの鉄道～東日本大震災からの復興の軌跡～(東北の鉄道震災復興誌編集委員会 2012)
- ・JR貨物HP
<https://www.jrfreight.co.jp/about> (閲覧日 2025.10.26)
<https://www.jrfreight.co.jp/service/transport/petroleum.html> (閲覧日 2025.10.26)
- ・国土交通省 今後の鉄道物流のあり方に関する検討会 第2回JR貨物資料
<https://www.mlit.go.jp/tetudo/content/001473649.pdf> (閲覧日 2025.10.19)
- ・国土交通省 今後の鉄道物流のあり方に関する検討会 第3回ヒアリング資料
<https://www.mlit.go.jp/tetudo/content/001485832.pdf> (閲覧日 2025.10.19)
- ・一般財団法人日本エネルギー経済研究所 石油情報センター
https://oil-info.ieej.or.jp/whats_sekiyu/1-13.html (閲覧日 2025.10.26)

始まった寮生活

目黒蒼弥(法学部1年)

寮での生活、そして大学生活が始まり、いつの間にか半年以上が経過した。寮では聖書研究や夜遅くまでわちやわちやするなど、今までに無い経験をさせてもらったり、他にも部活やバイトを始めたりと、かなり濃い期間だった。そのせいか、寮生活、そして大学生活のはじめの頃を振り返ってみると、かなり昔のように感じる。それだけ、寮や大学での生活が充実していたとも言えると思う。本当に、この寮に入って正解だったと感じる。多分、一人暮らしだったら、大学でのコミュニティは部活だけで、充実度は半減していただろう。

でも、自分は入試後に寮の見学をしてから数日間は、寮に入ることにあまり前向きでは無かった。実際、自分が高校生の時は「寮生活だけはしたくない。絶対、一人暮らしがいい」とずっとと思っていた。しかし、大学生活が始まっていることを考えると、自分は積極的に見ず知らずの人に話しかけて、仲良くなるようなタイプではないので、大学生活を豊かにするために、コミュニティは可能な限りあった方が良いと感じた。他にも、自分の取り巻く環境を考慮すると、寮食や家賃の安さのメリットはかなり大きな存在だった。だからこそ、自分は入寮することを決めた。それでも、寮生活に対しては「他の住民に迷惑をかけまくるのではないか」「寮の仲間と仲良くなれるのか」など多くの不安はあった。

しかし、いざ寮生活が始まると、先輩方のみならずOBの人も優しく暖かく接してくれて、そんなちっぽけな不安なんて一瞬にして消え去った。他にも、履修登録や大学生活について詳しく教えてくれたり、ご飯をおごってくれたりなど、色々な面でお世話になっていた。多分、これからもお世話になるだろう。来年は、今年、自分がしてもらったことを来年入ってくる新入寮生にしてあげたい。他にも、夜にくだらない話をしながら、ご飯を食べたり、スマブラやボードゲームなどで遊んだり、寮ならではのことがたくさんできた気がする。でも、くだらない話をしていたのに、急に政治や社会問題とかの真面目な話をするのは一橋生らしさを感じる。ちなみに、自分は馬鹿なので、頭の良い他の寮生が真面目な話をし始めると、ついて行けなくなってしまう。だから、真面目な話が始まったら、大体の場合、会話から積極的に離脱している。

さあ、ここで、この寮生活には欠かせない聖書研究について語ろうと思う。4月から始まり、学期中の毎週水曜日に行っている聖書研究。最初は前提となる知識はほとんどないので、質問に対する考えが全く思い浮かばないことが多々あった。それでも、的外れな回答をすることを恐れずに考えをのべていった。少し慣れた頃になると初めてのレジュメの担当がまわってきた。問題作成は思ったより難しく、問題を作れても、「すぐに議論がつきてしまうので無いいか」という不安から、作った問題を使わなかつたり、そのせいで十分に問題が作れなくて結局、議論を盛り上げることが不可能に近い問題を作ってしまったりしまった。それでも、山田さんや白川さん、瀧山さんが上手く議論を広げてくれて、かなり助かった。来年は逆の立場に立って、どんな問題がきても議論を盛り上げられるようにしていきたい。秋学期になると、夏休みという1ヶ月半以上のブランクがあり、色々忘れていることも多かったが、春夏学期に比べると、大分積極的に発言できるようになった気がする。だとしても、前提となる知識の量や問い合わせの作成能力が不足していたり、発言しても内容が薄かつたり上手く自分の意見を上手に伝えられなかつたりなど、様々

な課題はあるが、焦らず聖書研究で少しづつ培っていきたい。おそらく、この聖書研究で培った力が将来の仕事で生かすことができる場面はあるだろう。

なんやかんや色々？と話してきたが、一つ確実に言えることは YMCA 一橋寮での生活は楽しい。ただ、楽しいことが必ずしも良いわけではない。楽しさのせいで、多くの寮生は生活習慣は終わっている。自分も終わっていると思うが、大学生という点や他の寮生の生活習慣を考慮すると、かなりマシな方である。生活習慣をこれ以上悪くしないためにも、寮の誘惑とは懸命に戦っていきたい。

書評「Das Nationalsozialistische Massenlied」(国家社会主義的大衆音楽)

古家大輝(商学部 1 年)

前置き

政治と音楽の関係に关心があった私は、国家社会主義と音楽の関係について解説した本を探していたが、Axis History Forum というサイトで紹介されていた本書を幸運にも一橋図書館で見つけることができた。語学力不足の私は通読に大変苦労したが、辞書や機械翻訳の力を借りて数か月がかりで大意をつかむことができた。個人的に興味深い内容だったので、ここで取り上げさせていただきたい。

本文

本書の序章にもある通り、従来のナチス時代の音楽研究は、排斥された「退廃音楽」や利用された「権威的な古典音楽」の分析に終始しがちであった。しかし、本書の最大の貢献は、ナチ党が創設期から第二次世界大戦終結に至るまで一貫してイデオロギーを内包した大衆音楽を重視し、積極的に創作・利用してきた歴史を豊富な一次資料に基づき掘り起こした点にある。Karl Preiberg や Joseph Wulf など、従来の音楽分析を補強するものとして副次的に大衆音楽の分析を行った人間が数人いたとはいえ、この観点は本書が出版された 1993 年当時は先行研究がほとんど存在しない、まさに空白地帯であった。本書が明らかにした論点は以下の 2 点に集約される。

1. ナチ党黎明期から第二次世界大戦までのイデオロギーの系譜

本書では、国家社会主義の大衆音楽をナチ党の政権奪取までに歌われた戦闘歌(Kampflied),ナチ党政権下における儀礼歌、そして大戦下における兵士の歌の三段階に区分し、各段階においてもさらにそれぞれの楽曲の特徴を鑑みて、できうる限り詳細かつ厳密な分類を試みている。第一段階、Kampflied の時代においては驚くほどナチ党独自の旋律は見当たらない。ナチスは第一次世界大戦で兵士たちに親しまれた前線の歌、16 世紀のランツクネヒトの歌や 19 世紀のナポレオン戦争時代の愛唱歌、民謡、果ては対立する共産党の労働歌からまで自在に旋律を流用し、音楽を作つてみせた。1980 年代に BBC ロシア語放送のアナウンサーが「偶然にも」ソ連の「航

空行進曲」とナチスの *Kampflied der Nationalsozialisten* のメロディが同じであることを発見して大変驚いたという話があるが、このような事例は Kampflied の時代においては珍しいことではなかった。しかし、1933 年にナチ党が政権を掌握すると、国家社会主義的大衆音楽を取り巻く環境は大きく変容する。闘争期に作られた Kampflied は引き続き盛んに演奏・録音され、Telefunken、Gloria、Victor といった大手レコード会社から次々と出版されたものの、政権獲得に伴ってそのプロパガンダ機能は急速に希薄化していった。1934 年に主要な Kampflied の録音が一段落した頃には、Massenlied に残された役割は主として儀礼歌としてのそれに限られるようになる。この時期に制作された楽曲のタイトル一例えば *Adolf Hitlers Lieblingsblume ist das schlichte Edelweiß* や *Am Adolf Hitler Platz* といった過度に露骨な命名は、当時の作り手たちが新たな方向性を見失っていたことを示唆しているかも知れない。1936 年にスペイン内戦が勃発し、ドイツが義勇軍を派遣すると状況は再び大きく変化する。「コンドル軍団」として派遣されたパイロットたちは、従来の兵士の歌に国家社会主義的イデオロギーを結びつけた新たな飛行士歌を生み出し、国家社会主義的大衆音楽は国防軍の軍楽との関係を徐々に強めていった。闘争期とは対照的に、楽曲制作の中心は厳格な古典的音楽教育を受けた軍楽隊出身の作曲家へと移行する。そして独ソ戦の開戦期には、国家社会主義が想定した「敵」とドイツ国家が現実に直面する軍事的敵とが重なり合うことで、この結びつきは極点に達する。1941 年に発表された「フィンランドから黒海まで (Von Finnland bis zum Schwarzen Meer)」は、まさにこの時期を典型的に示す作品であり、国家社会主義的大衆音楽が国防軍軍歌と一体化していく過程の到達点として理解しうる。

「Den Marsch, von Horst Wessel begonnen Im braunen Gewand der SA, Vollenden die grauen Kolonnen: Die große Stunde ist da!」

「ホルスト・ヴェッセルが始めた行進を、SA の褐色の制服の下で、今灰色の隊列(国防軍)が結実させる、ついに「歴史の大きいなるとき」が訪れたのだ！」(拙訳)

また、本書では、特に党初期から記載されている楽曲やそれ以外で特に重要と思われる楽曲については、余すところなくその旋律の歴史的変遷が詳細に提示されている。章末に合わせてまとめられた膨大な歌集、曲目、出典の項目をも加味すると、本書が「国家社会主義的大衆音楽研究」において寄与した資料的価値は計り知れない。

2. 詩と歌詞の伝統への接続

本書の著者の Alfred Roth は文学研究者である。この背景は本書の分析、特に詩の分析に深みを与えてくれている。前述の資料的価値だけでも本書の価値は十分高いのだが、彼は単に歴史的な事実を並べるだけでなく、ナチスがプロパガンダに利用した大衆音楽の「歌詞」がドイツの伝統的な詩や文学作品に依拠し、あるいはそれを都合のいいように歪曲して利用していたのかを詳細に分析している。例えば、ナチ党の Kampflied で、Horst Wessel lied 登場以前に党歌の地位を得ていた Sturm-lied に対しての分析が例として挙げられる。Sturm-lied の詩を見てみよう。

「Sturm! Sturm! Sturm! Sturm! Sturm! Läutet die Glocken von Turm zu Turm! Läutet, daß Funken zu sprühen beginnen, Judas erscheint, das Reich zu gewinnen, Läutet, daß blutig die Seile sich röten, Rings lauter Brennen und Martern und Töten, Läutet Sturm, daß die Erde sich bäumt Unter dem Donner der rettenden Rache! Wehe dem Volk, das heute noch träumt! Deutschland, erwache! Erwache!」

「嵐！嵐！嵐！嵐！嵐！鐘をならせ！塔から塔へと響き渡らせろ！男たちを、老人を、少年を呼び立てろ、眠っているものを家から叩き出せ、少女たちを階段から連れ出せ、母たちを振りかごから引き離せ、空が鳴り響き、震えあがるほどに、そして復讐の雷鳴の中で狂わせよ！死者をその墓から呼び起せ！ドイツよ、目覚めよ！目覚めよ！」（拙訳）

筆者によれば、この歌の中心的モチーフは古い伝統に由来するという。つまり災害が起きたとき、村から村へと鐘を鳴らして知らせるという何世紀にもわたり農村部で行われてきた慣習のことである。文学においても「この警鐘としての鐘の乱打」というモチーフは広くみられる。例えばゲーテの叙事詩「ヘルマンとドロテア」では、裁判官の語り出しが「いまや絶え間なく、嵐のごとく鐘が鳴り響いた…」という一文で始まる。シラーもまたゲーテの影響を受け、自身の詩「Das Lied von der Glocke」で「塔の上からうめくような声が聞こえるか？あれは“嵐”だ！」と書いている。一方で筆者はこのモチーフ史的なつながりにおいて、「重要なごまかし」があると指摘する。ゲーテやシラーの詩では、それは当時の時代慣習に即した“そのまま”的意味を持つ。ところが Sturm-lied の詩が書かれた 1919 年は既にこの慣習は失われていた。つまりこの曲が継承しているのはもはや現実とは無関係な純粋に比喩的・先導的機能としての「鐘」だけである。つまりナチ党においてはこのモチーフがイデオロギー上での敵との「闘争」の号令として再利用されたのである。

後書き

本書を通読することで、私は Massenlied(大衆歌)とナチズムの関係を多角的な視点から検討することができた。Massenlied は、当時のドイツにおける国家社会主義思想の浸透と動員に対し、疑いなく重要な役割を果たしたと結論づけられる。

政治と音楽の結びつきは歴史的現象にとどまらず、現代においても繰り返し観察される普遍的構造である。たとえば 2024 年アメリカ大統領選挙においては、民主・共和両陣営が積極的に音楽を選挙活動に取り入れた。民主党が多数の著名アーティストを動員したのに対し、共和党陣営はとりわけ「YMCA」を中心楽曲として構築されたキャンペーンを展開した。結果として、どちらの側の宣伝戦略が成功を収めたかは、既に広く知られるところである。

この事例は、「YMCA」がトランプ主義における現代的 Massenlied として機能したことを示唆している。個人アーティスト主体の文化構造が支配的となった 2020 年代においてなお、集団歌唱・同時性・身体的運動を伴う Massenlied の力が顕在化した事実は、メッセージ伝達におけるその強度を象徴的に示している。さらに言えば、我々自身の生活圏にも同様の構造が見出される。聖研活動や寮祭において、私たちは決まって讃美歌を合唱する。讃美歌は、ある側面においてキリスト教的価値観を共有させるための Massenlied と見なしうるものである。

本書が提示するメッセージは、ナチズムに対する警告にとどまらない。むしろ「声を合わせて歌う」という行為が共同体形成における意味を理論的に照らし出す点に、積極的な示唆を与えていたのである。

ドイツでの思い出

花田智紀(法学部 2 年)

私は今年 8 月 4 日から 8 月 30 日までドイツへ短期語学留学プログラムに出かけていました。滞在先はドイツ東部のライプツィヒで、かのバッハがカントル(教会音楽家・音楽監督)として務めたトーマス教会から 30 分ほどのアパートの一室を借りました。ライプツィヒ大学の語学研修校にて午前中はドイツ語でドイツ語を学び、午後はアクティビティや観光する、という生活をしていました。4 週間という短い間でしたが、日本ではなかなか得られない、非常に有意義なコミュニケーションの機会を得ることができました。ドイツで出会った人々は(「優しい」かはさておき)とても親しみやすい人たちでした。私のルームメイトは 5 人で、一橋 2 年生 1 名、3 年生 1 名、千葉大 2 年 3 名でしたが、ここに私の最大のインターナショナルフレンドである Emil が転がり込んでくることになりました。以下に私の友人と彼らに関する宗教観や思い出を紹介します。

Emil(エミール、Azerbaijan)

彼もまたライプツィヒ大学でホームステイをしながらプログラムに参加していた留学生。プログラムでの私の最初の友人であり、休日のアクティビティや小旅行などで最も多くの時間を過ごすことになった。彼とのコミュニケーションでの学びは、アジア観や宗教観、コミュニケーションの違いである。彼らにとってはアジア人の細い目はチャーミングポイントであるらしい(という言い訳の下で差別的ジェスチャーをされた。もちろん訂正させた。)

彼はムスリムだが、じゅんじゅんビールを飲んでいた(「ここはドイツでアゼルバイジャンじゃないから大丈夫!」というノリだった。)。聞くとアゼルバイジャン自体は人口の約 97% がムスリムだが、国民の中にはキリスト教正教会派や山岳ユダヤ人、アルメニア教会派(アルメニア人)がいる。彼曰く、アゼルバイジャンは国の成立や現在の情勢(ナゴルノ・カラバフ紛争、アルメニアとの国境紛争)からナショナリズム意識が強い国ではあるものの、宗教に関してはかなり寛容であるそうだ。アゼルバイジャン自体が公式に国教を定めてはおらず、国としての公式行事に宗教関連のものはない。彼自身も伝統としてムスリムを教授しているが、他の宗教に対して嫌悪感などはなく、「神を信じる」という共通部分で分かり合えると言っていた。彼とは良く Instagram や Whatsapp でぐだらない動画、近況のやり取り、互いの国の世相など様々な話をしている。

Malin(マリン、Deutschland)

ライプツィヒ大学の学生。Fakultät für Geschichte, Kunst- und Regionalwissenschaften, Ostasiatisches Institut, Fachbereich Japanologie (日本風に言うならば歴史・芸術・オリエント学部 東アジア地域部門 日本学専攻)らしい。私たちのプログラムチューターの後輩で、CALVARY CHAPEL LEIPZIG(福音派)という教会を私に紹介してくれた。明るく気さくで友人も多く、彼女の友人とも短い間ながら仲良くしてもらった。彼女は独英日のトリリンガルで、私とのコミュニケーションは基本的に英語を使っており、普段の礼拝での説教の際も英独の同時通訳を務めている。彼女は敬虔な信徒で、主との神秘的体験や救いを重視する考えを持っており、私には少々過激に聞こえるものの納得はできる論理で説教をしてくれた。彼女は日本への旅行から帰ってきたばかりで、僕に日本の感想を話してくれた。「東京は SNS で見たものとは異なっていて、行き交う人々が皆無機質で不愛想だった。」「大阪の人たちは気さくに話しかけてくれる方が多く、ドイツに雰囲気が近いように思えた。」これには私もかなり同感した。確かに、ドイツでは見知らぬ観光客に対しても話しかけてくる人が多かったし、Supermarkt や Marktplatz

などの公共の場で働く店員さんの挨拶は、日本のそれよりも有機的で親しみのあるものだった。「君たちはどこから来たの？」「今日はどこへ行くの？」「朝から寒いよね」なんて話しかけられる体験は、今まで日本で過ごしてきた自分には非常に新鮮だった。彼女とも未だに Instagram で親交があり、Story や DM でちょっとした話をしたりする。

Chapel Leipzig

カルバリー・チャペルとは、1960 年代アメリカ発祥の福音派かつ超教派的な教会であり、伝統的な典礼に縛られず比較的自由かつカジュアルな形での礼拝・活動を行っている。日本では府中や所沢にもあるという。Chapel Leipzig の外観はチャペルというよりはキッチンカフェに近い。

日曜礼拝のほかにも月曜や金曜に男性限定の説教やアイスバス(祈り)、オープンカフェなどの様々な活動を行っているという。毎週の日曜礼拝は Youtube 配信を行っており、オンラインで参加することもできる。この際、各イベントの前後にはコーヒーと軽食を交えて仲良く談話する。別口で寄付金は集めているものの、基本的に食事代は取らず、信徒たちで協力して料理もする。讃美歌は、伝統的なものからポップス歌謡曲を讃美歌風にアレンジしたものなど多岐にわたり、楽器もオルガンやピアノではなく、ギターとキーボードなどカジュアルであった。この場は、讃美(牧師の弾き語り／共同セッション、合唱)、祈り(個人／共同の祈り)、交わり(共同の食事、談話など)、礼拝後に信徒同士が分かれ合い、友情や兄弟姉妹のような関係を築く場所であり、信徒たちのサード・プレイスであった。この教会に集まっていたのは、ライブツイヒに外からやってきた人が多かった。ルーマニアから職業の都合で引っ越してきた人や、ロシア、フランスなどから留学してきた人など、括ろうと思えばある種『よそ者』にあたる人達だという。Chapel Leipzig はまさにそういった人たちも集まれる、宗教共同体といえる。

4 週間という短い滞在だったが、その中で得た経験は、単なる語学留学の枠を超え、私自身の価値観や人との向き合い方に深い影響を与えるものとなった。語学学校での授業はもちろん、街中での何気ない会話、共同生活で交わした夜遅くまでの談笑、初めて訪れた教会での礼拝体験など、日々の小さな出来事の積み重ねが、私の中で“異文化理解”という言葉の意味を立体的なものへと変えていった。

特に、Emil や Malin のように、異なる宗教的背景や文化を持つ友人たちと過ごした時間は、教科書では学べないリアルな価値観の交差点だった。彼らは、自分の文化を大切にしつつも、他者の文化や信仰を柔軟に受け入れようとする姿勢を自然に持っていた。その態度に触ることは、私にとって強い刺激となった。例えば、Emil が自身はムスリムの家庭に生まれながらも、宗教に縛られすぎず現代の生活と調和させようとする姿勢、また Malin が日本文化への深い関心と信仰生活を同時に体現し、教会で通訳という役割を通じて橋渡しの役割をも担っていたこと——どれもが、異文化の中で自分らしさを保ちながら生きるヒントになった。

さらに、Calvary Chapel Leipzig を訪れた経験は、私にとって特別なものとなった。トマス教会やプラハ、ミュンヘンの教会、伝統的なベルリン大聖堂などとは異なる雰囲気の中で、人々が心からの讃美や祈りを捧げ、礼拝後には年齢も国籍も異なる人たちが自然に集まり、食事や会話を楽しんでいた。その空間には共通の宗教を通じて国籍の違いを超え、人と人がありのままに受け入れられる温かさがあった。

こうした体験は、自分がどれだけ狭い枠の中で物事を捉えていたかに気づかせてくれた。国籍や宗教、価値観の違いは互いを理解し合うための手がかりになり得る。実際に生活を共にし、同じ食卓を囲み、時には宗教について真剣に語り合う中で、私は「違い」を恐れるのではなく、「違い」を通して世界の広さに触れることの喜びを知った。友人たちだけでなく、ドイツの私が訪れた都市はどこも開放的で、どこか私のような異質な存在も受け入れてくれるような雰囲気があった。

振り返ると、4週間という期間はあまりに短かったかもしれない。しかし、その短さの中に凝縮された人との出会い、文化の発見、自分自身の内面の変化は、これから的人生を形作る大切な基盤になっていくと感じている。今後もこの経験を土台として、他者への理解や、異文化への興味をさらに深め、自分の視野を広げていきたい。

私の大学生活

本田和士(法学部2年)

一橋大学に入学してからの二年間を振り返ると、私の大学生活の中心には常に「KODAIRA 祭実行委員会」の存在があった。私は一年生の春に KODAIRA 祭実行委員会に入ったが、6月に KODAIRA 祭が終わると、美術装飾(美飾)担当として、継続することを選択した。本委員会は一年生の新歓を盛り上げる KODAIRA 祭を運営する団体であり、単年組織である。構成学年は一年と二年のみで、200 人ほどの一年委員のうち希望した 40 名ほどが二年委員として継続することになる。6月の小平祭に向けて、数え切れないほどの準備や作業を仲間とともに積み重ねてきた。国立の YMCA 一橋寮での生活と、小平祭に向けた日々の作業。その両方が互いに影響しあいながら、私にとっての大学生活を作り上げていた。

美装担当の仕事は、単に絵を描いたり装飾を作ったりするだけではない。KODAIRA 祭全体の方向性に沿って、「会場をどう見せるか」「来場者にどのような印象を与えるか」を考え抜き、デザインを通じて祭りの雰囲気そのものを形づくる重要な役割だ。ロゴ、看板、横断幕、ステージ背景、地面装飾、窓装飾など、私たちの手がける制作物は多岐にわたる。その一つ一つに、企画ごとの意図や来場者の動線、視認性、素材の強度など様々な要素を検討しながら取り組む必要がある。

特に5月に入ると、毎日のように作業室に集まり、パソコンでデザイン案を練り上げるメンバーと、絵の具や木材、布を広げて制作に取り組むメンバーが入り混じる、まさに“大工房”的な光景になる。遅くまで作業が続くことも珍しくなく、気がつけば終電も近くなり、慌てて家に帰るメンバーもいた。そんな中、徒歩5分ほどで帰宅できる YMCA の環境には大いに助けられていたと感じる。そして、遅くまで作業をする時間も、同じ目標に向かう仲間たちと一緒に取り組んでいるという充実感がある。作業しながら交わす何気ない会話や、ふと漏れるため息、成功した時の笑い声……そういった一つ一つが、今では私の大学生活の大切な思い出になっている。

二年生として迎えた今年の KODAIRA 祭では、私は KODAIRA 祭のロゴの作成、ステージバックのデザインの中心として、メインステージの背景デザインと設営に深く携わった。美飾としてもっとも印象的なのは、やはり

「KODAIRA 祭ロゴ」を手がけた経験だ。ロゴはポスター、パンフレット、SNS アイコン、横断幕、委員会皆が着用するウインドブレーカーなど、あらゆる媒体で使用されるため、祭り全体の印象を左右する重要な要素である。テーマをどのように視覚化するか、色づかいでどんな雰囲気を表現するか、文字の形をどう整えるかなど、決めるべきことは多い。特に、一橋大学らしい落ち着きと、小平祭の持つ開放的な雰囲気のどちらも損なわずにまとめるることは大きな挑戦だった。デザイン案を考える際には、実行委員会内で何度も議論を重ねた。自分が良いと思った案でも、他のメンバーから「硬すぎる」「もう少し明るい印象が欲しい」といった意見をもらい、何度も描き直した。時には深夜の寮の共有スペースでタブレットを開き、配色を調整したり、フォントを試行錯誤したりしたこともある。完成までの道のりは決して楽ではなかったが、ポスターが学内に貼り出された瞬間、自分の作ったロゴが学生や地域の方々の目に触れていることを実感し、胸が熱くなった。

また、メインステージは、KODAIRA 祭の中でも最も多くの注目を集める場所だ。サークルの発表やゲスト企画、地域の団体による演目など、さまざまなステージが繰り広げられる。そのため、単に美しいだけでなく、出演者の動きを妨げず、照明や音響と調和し、観客にとっても見やすいデザインが求められる。

加えて、設営期間は、KODAIRA 祭準備の中でも最も忙しい時期だ。朝からパネルを運び、背景のステージバックを接合し、角度や高さをミリ単位で調整し、ときには風にあおられてやり直すこともある。作業は肉体労働の要素が強く、体力を消耗することも多いが、自分の描いたデザインが実際の大きさで組み上がっていく様子を見ると、その疲れが一気に吹き飛ぶような感動がある。完成したステージの前で、出演者がリハーサルを行う姿を見た時、「このステージで皆が輝ける空間をつくれたのだ」と実感できた。

KODAIRA 祭当日、観客がステージに見入ったり、友人同士で写真を撮り合っていたりする様子を見たとき、自分の仕事が誰かの思い出をつくる一部になっていることを強く感じた。ロゴやステージデザインのように、イベントの印象を左右する重要な部分に携わる責任は大きいが、それ以上にやりがいがある。この経験は、大学での学びとはまた別の形で、自分を大きく成長させてくれたと感じている。

一方、国立の YMCA 一橋寮での生活は、KODAIRA 祭実行委員会の活動を支える“裏方の拠点”でもあった。寮は大学から近く、寮長の花田も同じ委員会であったため、委員会の愚痴などを話したりもした。夜遅くまで作業をして帰ってきたとき、共有スペースで友人が課題をしている姿を見ると、不思議と気持ちが落ち着き、「自分もがんばろう」と思える。寮生活のおかげで、忙しい中でも前向きに活動に取り組めたと実感している。

また、寮での生活は、自分の時間管理や協調性を鍛える場にもなった。美術の仕事は締切が多く、タスク管理が欠かせない。一方、寮生活では共同での掃除やルール遵守など、周りと協力することが求められる。こうした生活のリズムが、委員会活動の場でも自然と役に立った。今では、デザイン作業の計画やチーム内での役割分担を行う際にも、寮で培った感覚が活きていると感じる。

もちろん、法学部の勉強と両立するのは簡単ではない。判例やレポートを読み込む必要がある科目が多く、特に

試験前は委員会活動とのバランスに悩むこともあった。しかし、授業の合間を上手く使ったり、寮長花田と一緒に勉強をしたりすることで、なんとか両方を進めることができた。忙しい中だからこそ生まれた工夫は、大学生活をより充実したものにしてくれた。

KODAIRA 祭実行委員会に所属して得た最大の収穫は、「自分の手で何かをつくり、多くの人に届ける」喜びを知ったことだ。ロゴやステージという、祭りを象徴する部分を任される責任は大きいが、その分、完成したときの達成感もまた大きい。残りの大学生活でも、KODAIRA 祭実行委員会の活動における学び、寮での生活、そして法学部での学びを大切にしながら、さらに多くの経験を積んでいきたい。ロゴやステージデザインを通じて学んだ「つくる楽しさ」と「責任感」を忘れず、今後も充実した大学生活が送れるよう、日々精進していきたいと思う。

キリスト教精神の入り口

白川優太(経済学部2年)

「キリスト教精神の探求と聖書研究会に対して積極的に取り組むことができる」——これは私が入寮した2024年度の寮生活規則に明記されていた、入寮者として求められる重要な要件のひとつである。私はこの文言を読みながらも長らく抽象的に捉えていたが、最近になって「キリスト教精神」という言葉について、自分の中で一つ筋の通った理解が形になりつつあるように感じた。そこで今回は、この気づきを言語化しておきたいと思う。

私が考える「キリスト教精神」とは、一言でいえば人が困難を乗り越えるための根底にある心のあり方である。より具体的に言い換えると、自らの弱さや限界を素直に認め、全知全能の主の御手に自分を委ねることで、本来であれば到底背負えない重荷を、主のお力添えによって担い歩んでいく生き方である。それは単なる精神的な気合いではなく、人間が有限の存在であると認めるからこそ生まれる謙遜の姿勢とも言えるだろう。

こうした考えを私の中で深める転機となったのが、今年7月に参加した学Y関東地区の春のオリエンテーションで行われた聖書研究であった。私はそこでそのコーディネイトに挑戦し、普段聖書を読む習慣のない参加者とともに、「隣人愛」を主題としたディスカッションを行った。多様な視点から語られる意見はどれも新鮮で刺激的だったが、とりわけ心を揺さぶられたのは、「コリントの信徒への手紙一」が語る「愛」に関する議論の中で出た一つの率直な意見である。

その人はこう語った。「聖書に書かれている“愛”はあまりに理想的すぎて、とても自分には実行できない気がする」。その言葉を聞いたときはっとさせられた。なぜなら、その感想こそがまさに「キリスト教精神」の入口にほかならないと思えたからである。聖書が示す愛——すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える愛——は、人間の力だけで完全に実践することはほとんど不可能である。しかしその「できなさ」こそが、主に身を委ねる一歩へと導いてくれるのだと、そのとき強く感じた。

私たちは理想を掲げながらも、つい自分の力のみでそれを達成しようともがいてしまう。うまくできなければ落ち込み、逆に達成できたと思えば傲慢に傾きがちである。しかし本来、私たちは弱く不完全な存在であり、限界がある。その事実を認めることは敗北ではなく、むしろ主にすがり歩むための大切な入り口である。その意味で、聖書に記される高い理想の「愛」は人を挫折させるためではなく、主へと向かうための道標なのだと気づいた。

こうした気づきと響き合うように、私の中で特に印象に残っている御言葉がある。

「すべて重荷を負って苦労している者は、私のもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう。私は柔軟で心のへりくだつた者だから、私の輻を負い、私に学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に安らぎが得られる。私の輻は負いやすく、私の荷は軽いからである。」(マタイの福音書 11 章 28~30 節)

この御言葉には、主が私たち一人ひとりを深い「愛」をもって迎え入れてくださる温かさがあふれている。取るに足らないほど小さな存在である私たちの弱さも重荷も、主はすべて受け止め、寄り添ってくれる。こうした主の「愛」を謙遜な心で受け取ろうとする姿勢こそが、まさにキリスト教精神の核心なのだと私は感じている。

キリスト教精神とは、単に宗教的な知識を蓄えることでも、道徳的に模範的な行動をとることでもない。むしろ、自らの弱さと誠実に向き合い、それを主に委ねながら主とともに歩もうとする姿勢そのものを指すのだろう。そしてこの姿勢を、今後出会うだろうさまざまな困難において生かしていきたいと願っている。

今回の気づきは、私のキリスト教精神の探求の始まりにすぎない。幸いにも、寮で行われる聖書研究会は回を重ねるごとに活発さを増しているように感じる。聖書に深い理解を持つ寮生や強い関心を寄せる寮生が増えていることが、その背景にあるのだろう。こうした恵まれた環境を与えてくださった主に感謝しつつ、今後もより深いキリスト教精神の探求に励んでいきたい。

北アルプス立山連峰縦走記 2日目

山田圭一郎(経済学部2年)

午前3時、周りのテントは寝静まっている中、我々は起床した。すぐにコッヒエルで水を沸かす。朝食のコーンポタージュを作るためである。隣のテントで寝ていた3人もこちらのテントに入つてもらい、我々はコーンポタージュを食パンに浸して食べた。テントの外が冷えていることもあって、ポタージュの温かさが心地よかった。食後、急いで荷物の整理をしてザックを外に出し、テントの解体作業にとりかかった。再度荷物を整理してトイレ・水汲みを済ませた後、我々は差し当たりの目的地である五色ヶ原山荘を目指して今日の歩みを開始した。真夏だが標高 2400mを超えておりダウンにレインウェアを羽織っても肌寒かった。とはいえ歩き続けるうちに身体も温まり、山荘に着くころには半袖1枚でも過ごせる程になっていた。テント場代を支払った後、鳶山を目指して分岐を南方に進む。山荘から間もない内は依然として五色ヶ原の板道が続き、周囲には背丈の高い植物も少なく空間的な広さを実感できた。そのためか、「これは登山というよりお散歩では」という声もあったが、これはこれで貴重な時

間だと僕は思った。20分ぐらいして道に占める板の比率が低下し、傾斜も急になって本格的に登山が始まった。こうなるとザックの重みが存在感を主張し始め、途端に身体に負荷がかかるようになる。しかし、まだ序盤ということもあってペースを落とすことはなくコースタイム通りに鳶山に着くことができた。とはいえ、普段の山行ではコースタイムを巻くことが多いことを踏まえると先が思いやられる展開ではあった。ここから一度降りることになるのだが、この降り道が鬼門だった。両脇のハイマツが内側に向かって生えているせいで、ハイマツを搔き分けて進まざるを得ず不快だった。また、連日の雨で非常に滑りやすく、ところどころ崩壊している箇所もあり速度を維持しながら進むには注意が必要だった。転んでしまった人もいたがなんとか越中沢乗越まで降りきった。この辺りから霧が酷くなり遠くを見渡すのは難しくなった。周囲の景色が見えなくなると自分たちが進んでいるという感覚が薄れてしまい、歩き続けるモチベーションを維持するのが大変だった。本来であれば展望が良いとされているピークの越中沢岳に到着しても、辺りは白霧が漂うだけで溜息がこぼれた。この時点ですでにメンバー間で歩く速度に若干の差が生まれており、特にI先輩は表情も辛そうだったので心配だった。急坂続きの降り道を黙々と進みスゴ乗越に差し掛かると、スゴ乗越小屋に宿泊した登山客と頻繁にすれ違うようになった。簡単な挨拶を交わした後、「もう少しで(スゴ乗越)小屋ですよ。頑張ってください」と励ましの言葉をいただいた。しかし、「あと少しですよ」と言われ続けるのにもかかわらず一向に小屋に着く気配がない。次の坂上にある開けた場所ではないか、と期待したら単なる崖だったということを繰り返す。それでも、しばらくして簡易風呂として利用されていると思しきドラム缶が目に入り、ついに小屋の到来を予感した。果たして、色とりどりの国旗を引っ提げたトタン外壁の建物に到着した。一区切りついたこともあり、長めに20分ほど休憩をとることにした。100円支払って水を補充し交代でトイレを済ませた後、今日の佳境である薬師岳を目指して活動を再開した。

予め断つておくと、北薬師岳までの道のりは地獄だった。いよいよ体力が底を尽き、今までよりペースが格段に落ちた。それに伴ってメンバーの口数も減り、傍から見た雰囲気はさながらお通夜のようだった。何より問題だったのは、人によって移動速度に差が生じていた点だった。O先輩とM先輩は比較的コースタイム通りのペースを維持できたのに対して、Y先輩とI先輩はその速度にはついていけず自ら「これ以上は速くできない」と言う程だった。必然的に先に進みがちな前者2人が後者2人を待つ展開となり、連携がとれているとは言い難い状況だった。O先輩が「日没入りを回避するためにもコースタイムは維持したい」と言うのに対して、Y先輩やI先輩は見るからに辛そうで限界が近いのは一目瞭然だった。どちらの側にも言い分があるだけに、どちらの肩をもつこともできず歯痒かった。ひとまず、休憩を多めにとる代わりに可能な限りの速度で進むことで合意し、なんとかコースタイムに食らいついでいった。途中、微量の雨がパラつきザックカバーをかける場面もあったが、幸いにも本格的に降り出すことはなかった。Y先輩は後に「7日間の中で北薬師の登りが一番辛かった」と振り返っておられたが、同時に「登山は諦めるとかできないから、そこがいいよな」とも述べている。なるほど、確かに登山中に進むことを諦めたら死が待つのみである。例えどれほど辛かろうと、我々はゴールを目指して歩き続けなければならない。たかが一歩、されど一歩である。果てしないように思える道も、有限である以上必ず終わりがある。相変わらずの急坂を登っている最中、ついにその時がやって来た。忽然と視界が開けた。最後の急坂を終えて稜線に出たと同時に、周囲を覆っていた霧が一気に晴れたのだった。進行方向左手を眺めて、思わず息をのんだ。見える、見えるではないか。雄々しくそびえる薬師岳が。向かって手前側には露出した砂肌、奥側には鬱蒼と茂る樹林帯。銀白と深緑が絶妙な均衡を保って共存していた。それだけではない。さらに左には水晶岳、その奥には後立山連峰が見渡せる。北

アルプスの一端を垣間見た気分になった。しかし、驚くのはまだ早かった。再び歩き始めしばらくすると、それまで陰に隠れていた山が突如として現れた。北薬師岳である。いつの間にやら道も岩場に様変わりしているではないか。この岩、ただの岩ではない。目を見張るほどの巨石集合である。無論、巨大な岩があるというだけではそれほど珍しいこととは言えないだろう。だが、北薬師の岩はそのすべてが大振りなのだ。小石の類が少なく、小さな岩でも持ち上げるのが困難な程だった。山頂付近の岩が見事な山というと蓼科山が思い浮かぶが、大胆さで言えばかの山を遙かに凌駕していた。色彩も見事である。遠目に眺めると日光が反射して純白に輝いて見える一方で、近づいて見ると実際には黒みがかった灰色であることが分かる。見る者を飽きさせぬ蠱惑的な山容に吸い寄せられるように、我々はあつという間に山頂に到達した。(体感時間は5分以下だった。そんなわけないのだが)山頂からは薬師岳がくつきりと見えた。切り立った絶壁、突き出た尖塔——これだけで百名山に選ばれたのも納得である。しかし、薬師岳の真にユニークな要素はまだ他にある。日本最大級のカールのことだ。カールとは氷河が長い年月をかけて山肌を削りとつて形成されたすり鉢状の谷のこと、今の時期は氷がほとんど解けて一面砂肌だった。あるいは、知名度はやや劣るもののモレーンを見つけることもできる。モレーンとは氷河によって運ばれた土が堆積して丘のように盛り上がった地形を指す。(これらの知識は○先輩に教えていただいた。僕は世界史選択で地理には明るくなかったので大変勉強になった)諸外国に比べると日本に氷河地形は少なく、そういった意味でも薬師岳は面白い山だと言える。話が少し逸れたが、北薬師岳山頂を出発した我々は順調に尾根沿いを進み、今日のテント場がある太郎平が見渡せるまでになった。途中、1か所だけ危険な箇所があり、道幅が非常に狭く崖も切り立っていて落ちたら即死だったため、1人ずつ慎重に渡った。そこ以外には基本的に難所もなく標高差も小さかったため、午後1時半、ついに薬師岳山頂に到達した。スゴ乗越小屋以降はほとんど人に出くわなかつたのだが、反対側のルートから登って来た人が大勢いたため山頂は混み合っていた。山頂には小柄だが立派な社が建てられており、小銭を捧げたり参拝したりしている人もいた。ここで悲報が舞い込んだ。I先輩が高山病かもしれないとのことだった。間山付近で薬を飲んでいたこともあり体調が万全ではないのは察していたが、そこまで深刻だったとは気づけなかつただけに言葉が出なかつた。もし高山病なら標高の低い地点まで降りるしかないということで、休憩を延長することはなく太郎平を目指して下山を開始した。

午後2時と日没が近いにもかかわらず、対向からは山頂を目指して登り勤しむ人が大勢いたのは衝撃だった。薬師山荘からのピストンだろうか。確かに、山頂から見て一目でわかるほど山荘はすぐ近くにあった。我々にとつても朗報である。道は今日歩いた道の中で最も易しく、すれ違う方の多くに譲っていただけたこもあって30分ほどで山荘まで降りることができた。ふと振り返り薬師岳に目をやると、思わず声を上げてしまったほどに驚いた。山容が様変わりしていたのである。北薬師岳からはあれほど雄々しく見えた尖塔が今や影を潜め、代わりになだらかな丘陵が佇んでいるではないか。なるほど、南側の山肌は削り取られていないということか。日本アルプスに大雪が降るのは日本海から吹き付ける季節風の影響によるところが大きい。すると必然的に積雪が多いのは北から吹く季節風とぶつかる北側であり、故に北側の方がカールが著しいということだろう。異なる角度から見た際にここまで印象が変わる山は珍しいのではないか。縦走した甲斐があったとしみじみ思った——などと感慨に耽つていると、登山客の一人が「あそこにクマ、いますよ」と教えてくれた。そんなまさかと思って見に行くと、なんと小屋の真裏にツキノワグマがいるではないか。体長がそこまで大きくないため子熊ではないかと推察される。山にクマが出ること自体は残念ながら珍しいことではない。しかし、現在この山小屋の周囲には少なく見積もっても30人は人

が群がっている。本来であれば人を怖がるはずのクマの習性が変化しつつあるという恐ろしい現実を突きつけられた。とはいっても、山荘の主人は慣れっこのように「よく出るんで放っておいて」とのことだった。これを聞いたY先輩は「なんだ常連か」と安心している様子だった。肝が据わっているなど感じる一方で、危険なのは間違いない。タイミングを見計らって山荘から素早く退散した。今日のゴールである太郎平キャンプ場までコースタイムによればあと一時間強である。道の傾斜もほとんどなくここから先はもう大丈夫だと高を括っていた矢先、道は沢と合流した。最初のうちは沢を沿うように下っていくのかと思っていたのだが、その認識は正確ではなかった。むしろ、沢の中に入るという感じで、水量の少ないところを選んで歩くことになった。直近の雨で水かさが増していたこともあり、足を取られないように注意して進む必要があった。本当に正規ルートなのかを確認した程には歩きづらかった。苦労して沢を抜けた先で我々を待っていたのは岩場だった。一つひとつの岩が大きく、降りるのに手間取った。無論、普段の我々であればここまで苦戦することはなかったはずである。しかし、11時間にも及んで歩き続けたせいで我々の足は極度に疲労していた。個人差はあるが、宮田先輩などは比較的楽に降りている印象だったが、僕の場合は足が生まれたばかりの小鹿のように震えていまい、膝に負荷がかからってしまった。先輩方に比べるとまだまだ自分の身体を上手く使えていないことを痛感した。なんとか岩々を降りきると、目に飛び込んできたのは数張のテント。ついにゴールまで着いたのだと喜びに浸った。

しかし、テント場について間もなく我々はある困難に直面することになる。テントを立てるスペースを確保できそうになかったのだ。我々が到着したのは午後3時半過ぎなのだが、そのころにはキャンプ場のありとあらゆるところにテントが設営されていて、4人用テントを二張おける場所は一目見た感じでは残されていなかった。これは後から聞いた話だが、一昨日まで雨だったため山行を中止した登山客が一気に結集してしまったということらしかった。いずれにしても、何とかテントが立つだけのスペースを確保しなければならない。キャンプ場内を探し回った結果、テントを分散させて立てるしかないとの結論に至った。一方は周囲の石をひたすら撤去してなんとかスペースを捻出し、もう一方は斜面のうち比較的傾斜が緩やかな場所に無理やり立てることに。明らかに後者の方が劣悪な環境であり、僕は後者で寝ることになったので少し気が重かった。それより問題なのは、I先輩の今後についてである。先にも述べたように、I先輩は体調が優れず高山病かもしれない。そのため明日単独で折立から下山したいという申し出が本人からあった。「致し方ないのでは」という意見がある一方で、「昨年の短期合宿がそうだったようにパーティーを分割することには安全上のリスクが伴い、ましてや病人を一人で行かせるのは如何なものか」という意見もあった。結局、明日の体調次第で判断することでひとまず合意し、我々は夕食準備に取り掛かった。今日の献立は炊き込みご飯で、 α 米ではなく飯盒に挑戦した——のだが、残念ながら美味しくいただけたのは具材の豚の角煮のみで、ご飯は上手く炊き上がらなかった。原因はいくつか考えられたが、食料の消耗が手痛い長期合宿においては無難に α 米の方が良かったのかもしれない。残飯と化した米をジップロックに押し込み、明日の朝も早いためさっさと寝ることになった。斜面に立てたので当然テント内は盛大に傾いている。快眠は難しいかと諦めかけていたのだが、ザックで足元を底上げすれば意外と平らになることが判明し、ぐっすりと眠ることができた。

「のこす」

三浦 龍平 (SDS 学部 2 年)

スマートフォン一台あれば、本棚もアルバムも書類棚も、すべてポケットの中に入る時代になりました。写真はクラウドに自動保存され、電子書籍はワンクリックで買って、無くす心配もかさばる心配もない。私たちは「データになった情報はほぼ永遠に残る」と、どこかで強く信じているかもしれません。

しかし、ここで立ち止まって考えてみたいのが「のこす」とは本当に何を意味するのか、という本質的な問いです。電子書籍サービスは、この十数年で爆発的に普及しましたが、すでに日本でも複数のストアが事業終了を経験しています。TSUTAYA.com eBOOKs や楽天 Raboo などは、サービス終了に伴い他社への引き継ぎやポイント返金などの対応をしましたが、すべての作品が永続的に読めるという理想はここで途絶えてしまいました。

つまり「買った本」のはずが、実際には「その会社のサーバが動いているあいだだけ読める権利」を買っていただけだった、というケースがあるのです。

特に象徴的なのが、Amazon の電子書籍端末 Kindle から、ジョージ・オーウェルの『1984』などが遠隔操作で一斉削除された事件です。権利処理上の問題が理由でしたが、「自分のお金で購入した本が、ある日突然、棚から消えた」ことに対して大きな批判と訴訟が起り、Amazon は和解と謝罪に追い込まれました。

ここで露わになったのは、「デジタルな本棚の鍵を、本当に握っていたのは誰なのか」という事実です。

クラウドに保存した写真やノートも同じ構造です。名目上は「あなたのデータ」ですが、その実体は、企業が用意したサーバ空間に置かれ、利用規約と事業継続性に依存して存在しています。会社が倒産したら?、事業売却でオーナーが変わったら? その時点で、「誰のものか」「どこへ行くか」は、ユーザーではなく企業と債権者、あるいは買収先が決めることになります。そこまで考えている人は実際にどこまでいるのでしょうか? そして、個人情報が知らないうちに流布されているかもしれません。

もちろん、法制度もこの危うさを放置してきたわけではありません。日本では、2022 年改正の個人情報保護法によって、個人データの開示・利用停止・消去を求める権利が拡充され、情報漏洩時の報告義務や、海外事業者への規制強化、違反時の罰則引き上げなどが行われました。

EU の GDPR では、「忘れられる権利(Right to be forgotten)」や「データポータビリティ権」が定められ、企業に対して「持ち続けるな」「他へ移せ」という方向での義務付けも進んでいます。

ここで興味深い矛盾が生じます。テクノロジーは「情報を永遠に、そして大量に残す」力を持っているはずなのに、法はむしろ「消せる権利」「移せる権利」を強めているのです。つまり、デジタル空間での「のこす」は、技術だけでなく、ビジネスモデルと法律、そして社会の価値判断の上に、常に揺れ動き続ける存在だということです。クラウドに置かれた情報は、保存期間も、利用方法も、消去のタイミングも、「人間社会のルール」によって決まる相対的なものに過ぎません。

では、「永遠に残る情報」など、本当にあり得るのでしょうか。

ここで、紙や石に話を移してみます。

パピルス、粘土板、甲骨文、碑文。古代人は、石や骨や土器といった、あまりにも「アナログ」な素材に、自分たちの記録を刻みつけました。その多くは、国家も企業も宗教も滅びたあともなお土の下から掘り起こされ、数千年後の私たちに当時の社会や信仰、取引の様子を語り続けています。

彼らが持っていたのは、クラウドでも暗号技術でもなく、ただ「物質に託す」という直感でした。火で燃えにくいもの、風雨に削られてもかろうじて読めるもの、人間の政治体制が何度も変わっても、そこに黙って存在し続けるもの- こうした素材を選び、そこに文字や図像を刻み付けたのです。

紙もまた、きわめて人間的な「のこす」の技術です。本棚は電源を必要とせず、利用規約の変更メールも送りつけていません。出版社が倒産しても、印刷された本そのものは、所有者の手元に静かに残り続けます。そこには「アクセス権」ではなく、ほぼ物権に近い「所有」があります。

もちろん、紙や石にも限界があります。燃える、壊れる、場所をとる、検索ができない。そして、機密情報を容易に記録できない、世界に即時的に共有できない。デジタルが解決してきた不便さを、すべて逆戻りしろと言うつもりはありません。しかし、ここで重要なのは、「情報の保存を、どこまで自分のコントロール下に置くか」という発想です。

デジタルには、圧倒的な検索性・複製性・共有性があります。一方で、その存続はインフラと企業と法制度に強く依存し、目に見えないところでログや嗜好データとして二次利用されるリスクも抱えています。生成 AI の学習データとして、自分の投稿や画像がいつの間にか組み込まれていた。そんな時代に、私たちは生きています。

自分は紙や石に「のこす」ことには、三つの意味があると思います。

第一に、主導権の回復です。

自分が本当に残したい契約書、日記、研究ノート、写真などを、紙や物理メディアという形で手元に置くことは、「この記録の生殺与奪権は、プラットフォームではなく自分にある」という宣言でもあります。それが、アイデンティティをも強めるかもしれません。

第二に、時間感覚の回復です。

クラウド上のデータは、容量が許す限り、ほぼ無制限に積み上がっていきます。その結果、「本当に残したいもの」と「なんとなく残ってしまったもの」の境界が曖昧になり、記憶の重みが薄れてしまう。紙に書く、石に刻むという行為には、「これは残すに値するのか？」と自問する刹那の選別作業が伴います。その迷いこそが、情報の優先順位をつけ、人生の輪郭をくっきりさせてくれるのではないかでしょうか。

第三に、忘却とのバランスです。

GDPR が「忘れられる権利」を定め、日本の個人情報保護法がデータの消去請求権を拡充した背景には、「消えなさすぎる情報」の怖さがあります。

だからこそ、私たちは「意図せず残り続けるデータ」を減らし、「意図して残す記録」を選び取る必要がある。紙や石に託された文字は、自然の風化と人間のケアのあいだで、ゆっくりと残るか消えるかを選びます。その揺らぎこそが、人間らしい時間の流れなのかもしれません。

これから「のこす」は、デジタルかアナログかの二者択一ではなく、「どの層に、何を託すか」という設計の問題になっていくでしょう。

クラウドには、検索したいデータや、共同編集したい情報、頻繁に更新される仕事の成果を置く。ローカルのハードディスクやオープンなファイル形式には、自分で守りたいアーカイブを置く。そして、紙や印刷物、場合によっては石碑やモニュメントには、「この社会に、長く問い合わせ続けてほしい言葉」を刻む。こうした多層的な「のこし方」を意識することが、プラットフォーム時代を生きる私たちの、新しいリテラシーではないでしょうか。

クラウドに預けたまま「そのうち見返そう」と思っている記録の中から、あえていくつかを選び取り、紙に印刷してファイルに綴じてみる。ノートに手書きで写してみる。あるいは小さな石に、今年の自分の座右の銘を刻んでみる。そのささやかな行為の中で、「のこす」とは、情報を未来に投げっぱなしにすることではなく、「どんな未来に、どんな自分や社会の姿を手渡したいのか」を決める行為そのものなのだと、実感できるはずです。

それを強く信じ、この会報が後世にまで読み抜かれることを祈って文章を止めたいと思います。

喰らったパンチライン集

金 賢(経済学部3年)

私はかなり多趣味な方な一方で飽き性な部分が多い人間です。しかし中学の頃からずっと楽しみにしているものがあります。それはMCバトルです。MCバトルとはラッパーが即興で対話型のラップをし、基準は色々あると思いますが、自分の中ではどちらがよりカッコよかつたかを競う競技です。

その場で初めて聞かされるビートに乗って即興で言葉を紡いでいく。これは自分ではできないことでとてもカッコよく映ります。また即興ならではの言葉は時とてつもない威力を發揮します。

そんな言葉の集合を“パンチライン”と定義した上で、過去自分がとても魅力的に感じたパンチラインを紹介します。

1. 上から目線じゃねえ。対等で俺が上 MOL53

フィメールラッパーと対戦した時のMOL53のワンベース。この人はアングラ代表みたいなMCなんですが、女性MCが下にみられるがちな風潮がある中、この人がこんなこと言ったら、もう誰も勝てないでしょってくらい現場は上がっていました。このワンベースで自分が下に見られていた時期もあったと表現しつつ、今はこんなにも大きくなつた。お前もこれくらいになれよ。というようなメッセージ性が感じられます。

2. スキルは永遠。墾田永年私財法 Authority

Authorityは後からたくさん出てくるので、軽く紹介すると、青森出身のMCで2018年から信じられないくらい勢いがでて、2019年にMCバトルの主要タイトルのほとんどをとったすごいMCです。2022年にはバトルサミットと

いう大会で 1000 万を手に入れました。センスのある言い回しで韻を踏みつつ対話するスタイルが主人公感が大きい、人気のある MC です。先の MOL53 とは 2019 年の KOK という大会からの因縁があつたりするので、KOK を見る人はこの 2 人の関係性を見て欲しいです。Authority はかなり遅咲きな MC であり、自身の磨いてきたスキルは努力した結果なんだと伝えるようなワンベースです。

3. 繋ぐロード。エゴも欲も罪もドレスコード SAM

これはかっこいいだけなんですが、SAM もセンスフルな韻を踏むんですが Authority よりは詩的です。なので現場での受けがめちゃくちゃに良くて、すごい数優勝しています。

Authority との KOK2019 年のバトルはエグすぎて、後に出る Authority のパンチラインがなかつたら、SAM が勝っていたのではというような接戦でした。

4. 傷が広がって地図になった。その分マイクに一途になった Authority

これも自分の遅咲きを表現しているワンベースかと思います。ペインを受けてもペンを握り続けるこの姿勢。見習いたいですね。

5. お前がウサギでも全力で狩る。それが王となったものの宿命だ Authority

自分を“王”という強い表現をしているのですが、誰も文句を言いません。このワンベースだけでいかに Authority が強かつたかわかりますよね？

6. 自分の価値をわかっているのは自分自身。方位磁針はここだよ吟遊詩人 ファンク

こいつはサラッと踏むのがカッコよすぎなんですが、自身の自由なスタイルを“吟遊詩人”と表現しつつ、強いメッセージ性が感じられます。DOTAMA との UMB 決勝など、ベストバウトメーカーですね。

7. 青い地球の黄色い主人公 Authority

まさに“主人公でした”バトルサミットでジブリ相手に放ったワンベース。ジブリ喰らいすぎて上見てました。言い回しがオシャレかつ熱いっすね。

8. 豊洲 PIT 集合イかれた地下の拡声器集団 Authority

KOK2019。VS SAM での、ワンベース。これもイカついオシャレっすね。どう生きてたら拡声器集団なんて言い回し思いつくんですか？センスがすごすぎる。これで自分は後天性の才能とか無理あるでしょ。普通に。これ有名すぎてめっちゃサンプリングされるイメージです。

9. 好きな服を着て、FACK ルッキズム 脱走

脱走は僕が今一番、注目している MC です。若いのに勢いある対話をしながら韻を踏むスタイルは、Authority の面影を感じさせますね。主人公。これ相手 MOL53 なんですよね。強者にもビビるどころか逆に勢いづく感じ。サイヤ人すぎ。このスタンス最近とてます。

10. ブラックもイエローも切ったら RED ゆ一まろ

こいつは今、改名してるんですが、ディスが多いバトルの中、誰も傷つけず、自身のセンスフルなスキルだけで勝つという、一番かっこいいスタンスなんですが、このワンベースだけで、それが感じられます。S-kanine VS ゆ一まろはめっちゃ有名なんですが、その年のベストバウトなんじやないかってくらい、聞き心地がいいので、興味あつたら見てみてください。

以上、パッと思いついたパンチラインを 10 個挙げました。これらが自分のベスト 10 というわけではないですが、確

実に脳に焼き付くものです。これを見て少しでも MC パトルいいなーと思ったら、一度、なんでもいいので見てみてください。一橋にヘッズが増えることを願います。

「なぜ、私はイエス・キリストを信じるのか」

瀧山恵輝(法学部3年)

一橋 YMCA 寮に入寮して、早くも八か月が経つ。大学一、二年次は横浜の祖父母宅に下宿し、毎日一時間半かけて通学していた。しかし、今年度から大学生になる弟が広島の実家から上京することになり、祖父母宅から大学までの距離がより遠い私が家を出ることになった。新たな住まいを探していた三月、出会ったのが本寮である。家賃、ロケーション、設備のいずれも申し分なく、一人暮らし物件や大学寮がほとんど埋まっていた当時の私にとって、まさしく願ってもない場所であった。

もう一つ、私にとって大きな利点だったのは、本寮がキリスト教精神に基づいて運営されている点である。キリスト者である私にとって、週一度の強制参加の聖書研究会は、同世代の一橋大生と聖書について語り合える、またとない機会であった。今も聖研を通じて、日々養われていると感じている。特に、クリスチャンと聖書を読むことはあっても、そうでない方々と共に読む機会はこれまで経験がなく、そこから得られる新鮮な視点や新たな気づきは、私にとって大変貴重な時間となっている。

私は五代目のクリスチャンとして育った。曾祖母が戦後、韓国人宣教師から受洗して以来、父方の家系では信仰が代々受け継がれ、母方も祖父母をはじめ親族の全員がクリスチャンという、クリスチャン人口が 1% 未満の日本では極めて稀な家庭に生まれた。近年、いわゆる宗教二世の問題が取り上げられることが多いが、宗教五世ともなると、信仰はもはや「宗教」という枠を越え、家族の文化や生活習慣の一部として自然に根付いていく。母の胎内にいる頃から教会に通い、小学生で受洗し、ずっと教会の中で育ってきた私にとって、キリスト教は自らのアイデンティティの一つとして、ごく当たり前に受け止めてきたものであった。あまりにも「クリスチャンである自分」を当然の前提として生きてきたため、なぜ自分がイエス・キリストを信じるのかについて深く考える機会は、それほど多くなかったように思う。しかし、高校・大学へと進み、さまざまな価値観や考え方に対する中で、この問いを意識するようになった。特に、先述のように本寮での聖書研究会は、「自分はなぜイエス・キリストを信じるのか」という問いに、日々向き合う場となっている。

本稿では、この機会を借りて、私なりにこの問いへの答えを言語化してみたいと思う。

そもそも信仰とは何か。聖書はこう定義している。

「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです」(ヘブル 11:1)

すなわち信仰とは、目に見えるものを観察して知覚する種類のものではない。むしろ、まだ完全には証明されていないがゆえに成立するものであり、すべてを理解し尽くしてから受け入れる性質のものでもない。私自身、20年近く聖書に触ってきたが、今もなお理解しきれない箇所や、素直に受け入れがたいと感じる記述もある。

この前提を踏まえたうえで、それでもなお私は、以下の三点から、聖書の語る神は信じるに値すると確信している。

一点目の理由は、それが私にとって最も理性的に納得できる答えだからである。

私たちはどこから来て、なぜ存在し、何のために生きているのか。偶然の爆発で宇宙ができ、偶然アミノ酸が結合して生物になり、偶然の進化の果てに私たちがいる…そのように考えるには、宇宙も生命も、あまりに精巧で秩序立ちすぎているように思える。

「無」から「有」は生まれないし、意思も感情もない物質から、「愛」や「理性」を語る人間が生まれるとは私にはどうしても考えられない。むしろ、そこには明確な意思を持った設計者、すなわち神がいると考える方が自然ではないだろうか。広大な宇宙を造られた神が、同時に私という一人の人間をも意図して造られた。この確信が、私の信仰の土台となっている。

二点目に、聖書のメッセージに深い共感を覚えるからである。

2000年前に書かれた書物でありながら、「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」「自分を愛するように隣人を愛せよ」といった道徳的教えは、時代や文化を超えた普遍性を帶びている。

そもそも、道徳という概念そのものを、神の存在を前提とせずにどこまで説明できるだろうか。文化によって多少の差異はあるにせよ、何が善で、何が悪かを判断する良心は、ほぼ普遍的に人類が持つ性質だと私は考える。もし善悪が完全に相対的なものであるなら、「善」「悪」は単なる個人の好み、あるいは社会の一時的な合意にすぎなくなる。そうだとすれば、ホロコーストのような歴史的悲劇に直面しても、「それは客観的に間違っている」と断罪できず、「当時の文化では許容されたのだから仕方ない」と言わなければならない。

しかし私たちの良心はそれを拒む。時代や地域を超えて、愛は尊く、不当な暴力は悪であるという「普遍的な基準」が、確かに私たちの心に刻まれているからだ。

ここで一つの問い合わせが浮かぶ。

もし客観的な道徳律があるのだとすれば、その背後には「道徳を与えた者」が存在するのではないか。自然淘汰や進化論的な生存本能だけでは、「敵を愛せ」という自己犠牲を伴う崇高な倫理は説明がつかない。

私は、この普遍的な良心の声こそが、物質世界を超えた存在——すなわち神が私たちを造り、その道徳性を刻

み込んだ証しであると信じている。

聖書は私にとって単なる倫理的教科書ではなく、今日を生きるための、確かな力を与えてくれる書物である。聖書に最も多く登場する命令形をご存じだろうか。それは「～してはならない」という禁止ではなく、「恐れるな」という励ましの言葉である。その回数は365回にも及ぶと言われている。「1年365日、毎日神が『恐れるな』と語りかけておられる。」これはキリスト教界でしばしば聞かれる表現だが、私自身、聖書の言葉に幾度となく心が支えられてきた。孤独や不安に押しつぶされそうになる時、聖書の言葉は単なる文字の列ではなく、まるで今、私に向けて語られているかのように生きた力を持って迫ってくる。

「主はみずからあなたに先立って行き、またあなたと共におり、あなたを見放さず、見捨てられないであろう。恐れてはならない、おののいてはならない。」(申命記 31:8)

「主は言われる、わたしがあなたがたに対している計画はわたしが知っている。それは災を与えるというのではなく、平安を与えるとするものであり、あなたがたに将来を与える、希望を与えるとするものである。」(エレミヤ 29:11)

聖書が語る神は、遠くから道徳を説く抽象的存在ではない。私の恐れや弱さを知り、日々の歩みに寄り添い、平安と希望を与えてくださる「生きた人格」である。

私は、その神との出会いの中に、確かな慰めと導きを経験してきた。

そしてその経験こそが、三点目にして私が神を信じる最大の理由である。

聖書を読み、祈り、賛美を捧げる時、言葉では表現しがたい温かさが体の内から湧き上がってくるのを感じる。私たちクリスチヤンはこれを「聖霊」の働きと呼ぶが、その温もりに触れる時、私は時に涙し、時に喜び、自分の弱さや罪深さを知ると同時に、それを包み込む神の圧倒的な愛と赦しに満たされる。この平安は、世の中の何ものにも代えがたい経験だと感じる。

また、神は私の人生の具体的な歩みの中で、祈りに応えてくださる方である。私は中学二年までインターナショナルスクールに通い、そこから日本の教育課程を経て一橋大学に入学するという、まさに怒濤の道のりを歩んできた。その過程には、多くの壁や葛藤があった。しかし、苦しい時こそ祈ると、神は必ず応えてくださった。時に私が望んだ扉が閉ざされることもあったが、神はより良い別の扉を開き、私をここまで導いてくださったのだ。この寮も、主が私に備えてくださっていた場所であることを日々確信している。三月、急遽引っ越す必要が出てきた際、先述のとおりほとんどの物件が埋まっている中で、私にとってこれ以上ない本寮に出会えたことは、まさに神業であった。

今、過去を振り返り、今まで繋がっている一本の道を見るとき、自分の思い描いていた道ではなく、神が用意してくださったこの道こそが、私にとって「最善の道」であったのだと、私は確信するほかない。

神と私の関係のみならず、信仰者たちの「生き方」そのものも私の信仰の大きな原動力となっている。

私の信仰の旅路は、私一人の努力によるものではない。両親をはじめ、家族、牧師、友人たち、本当に多くの人々の祈りと励ましによって支えられてきた。聖書はこの交わりを「神の国」と呼ぶが、私は彼らと共に生きる中で、ある一つの真理を目の当たりにしてきた。それは、イエス・キリストにつながる人生には、確かに「良い実」が結ばれるという事実だ。

「良い木が悪い実をならせることはできませんし、また、悪い木が良い実をならせることもできません……あなたがたは、実によって彼らを見分けることができるのです」(マタイ 7:18-20)

私は周囲のクリスチャンたちの人格や振る舞いの中に、確かに「良い実」を見ている。彼らの誠実さや愛を見る時、その根源にある信仰もまた本物であると確信せざるを得ない。だからこそ、私も彼らと同じ木につながり、同じような実を結ぶ人生を歩みたいと切に願うのである。

以上が、私がイエス・キリストを信じる理由である。拙い文章を、最後まで読んでくださったことに、心から感謝したい。

最後に。私を造り、今まで導いてくださった神は、あなたのために自らの命を捨てるほどに、あなたのことを探しておられる。このことを、ぜひ知っていてほしい。

願わくは、あなたがその神の愛に触れ、あなたのためには備えられた素晴らしい計画を見出す日が来るのを、私は切に祈っている。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」(ヨハネ 3:16)

不安な心のゆくえ：アウグスティヌスに学ぶ恩寵と自由の深み

高天愛(法学部3年)

はじめに

「我らの心は、汝(神)の内に憩うまで平安を得られない」。聖アウグスティヌスのこの言葉が、私の胸に深く刻まれた瞬間は今も忘れられない。これは単なる美文ではなく、現代を生きる我々の内面に潜む根源的な「不安」——成就しても満たされない世俗的願望、自己中心的な心の軋み——を、千数百年前の神学者が余すところなく言い当てた、真理の言葉である。彼の著作との出会いは、知識の獲得を超え、一人の「魂の先達」との、時空を超えた真摯な対話の始まりであった。本稿は、その対話を通じて見出したアウグスティヌス思想の核心が、現代の信仰

生活においても失われることのない輝きを放つことを論じるものである。彼の思索は、信仰と理性、恩寵と自由、個人の魂と歴史の意味といった、我々が今日も直面する根本的問いに対し、一つの堅固な「架け橋」を提示するのである。

『告白録』: 恩寵の光に照らされる「自由意志」の弁証法

『告白録』は、神への祈りという形式をとりながら、人類史において最も赤裸々な魂の内省の記録の一つである。中でも、少年期における「梨盗み」のエピソードの分析は、罪の本質に関するアウグスティヌスの透徹した洞察を示している。彼が指摘するのは、その罪の動機が果実自体への欲求ではなく、「盗む」という行為、すなわち「悪そのものへの愛」にあったという点である。ここで明らかになるのは、罪の根源が往々にして単なる欲求不満ではなく、被造物としての限界を超えるとする「驕慢」、換言すれば神への背反そのものにあるという厳粛な現実である。

このような自己洞察の鋭さは、彼がかつて傾倒したマニ教的な善悪二元論を克服したからこそ可能であった。アウグスティヌスは、悪を独立した実体と見なすことを止め、「善の欠如」として捉えるに至る。換言すれば、悪とは、神によって善きものとして創造された秩序から、人間がその「自由意志」をもって自ら逸脱した結果なのである。梨盗みの行為は、彼に与えられた自由の、根本的な誤った行使の一例であった。

しかし、この自由は、彼を精神的混乱の只中に閉じ込めるだけのものであった。真の転機は、ミラノの庭園での「取って、読め」という声に象徴される、神の一方的な恩寵の介入によってもたらされる。ここに、アウグスティヌス思想の核心がある。彼の理解によれば、原罪以後の人間の意志は傷つき、「真の善」(神)を自発的に選び取る本来の「自由」を喪失している。これは「縛られた自由意志」と呼ばれる状態である。この萎縮した意志を内側から甦らせ、神へと方向転換させる根源的な力、それが人間のあらゆる功績に先立つ神の恩寵なのである。『告白録』は、この圧倒的な恩寵に捉えられた一人の人間が、その全存在——理性、記憶、意志——を以て神への愛へと応答し始める、劇的な出発点の記録なのである。

『神の国』: 歴史を駆動する「愛の秩序」の形而上学

ローマ帝国崩壊という未曾有の危機的状況の中で著述された『神の国』は、単なる時事的な護教論を超えた壮大な歴史哲学である。アウグスティヌスは、地上の帝国の興亡を超えて、世界史を貫く根本的原理を提示する。それが、「二つの愛によって建設される二つの国」という、極めて示唆に富む構図である。

すなわち、「自己への愛に至る神への軽蔑」が建設する「地上の国」と、「神への愛に至る自己の軽蔑」が建設する「神の国」である。この洞察の鮮烈さは、歴史の究極的な駆動力を、政治権力や経済力ではなく、人間の魂の最深層に位置する「愛の方向性」に見出した点にある。彼が描くローマ帝国の興隆は、その建国神話(ロムルスとレムスの兄弟殺し)からして、暴力と不正義に彩られた「自己への愛」の所産であり、「地上の国」の典型であると断じられる。

この視座は、現代社会を省察する上で極めて有効である。飽くなき経済成長と消費、デジタル空間における自己演出と承認欲求、孤立化する個人——これらは全て、形を変えた「地上の国」の論理の現れではないだろうか。ア

ウグスティヌスは、キリスト者がこうした価値観に無批判に同化することを戒める。我々は、この世にあっては「寄留者」であり、究極的な帰属は「神の国」にあるからである。この認識は、現代のキリスト者に、世俗的価値観に対する批判的距離と、この世における精神的独立を促す。

一方で、アウグスティヌスが説くのは、決して現世否定や社会からの逃避ではない。彼の思想の卓抜さは、「神の国」の市民としての、この地上における積極的な責任を同時に強調する点にある。神を第一義的に愛する者にとって、その愛は必然的に「隣人愛」として外在化せざるを得ない。これが、彼の倫理学の枢要をなす「愛の秩序」の概念である。すべての被造物を、神との関係性における正しい序列と比重をもって愛すること、それこそが、キリスト者の在世における責務なのである。この思想は、信仰が単なる内面性に閉じこもるのでなく、社会的正義と隣人への奉仕という具体的な形をとつて現れるべきであることを示唆している。

『三位一体論』: 信仰が理性を呼び覚ます時

アウグスティヌスが『告白録』の情熱的な回心者としてのみ知られるならば、その像は不完全である。『三位一体論』は、彼が比類なき「理性的探求者」であったことを示す金字塔である。ここで彼は、キリスト教最大の神秘たる「三位一体」を、人間理性の限界を自覚しつつ、精緻かつ忍耐強く思索する。

特筆すべきは、彼のアプローチが外界への類推ではなく、人間精神の内面に向けられた点である。つまり、「記憶・知性・意志」という、区別されつつも不可分に一体となって働く心の三作用に、父・子・聖霊の三にして一なる神の姿を見いだそうとする。この「心理学類比」は、神について思索することが、その「像」として創造された人間自身についての深い省察と不可分であることを教える。我々が己の心の働きを注意深く観察するとき、そこにかすかではあれ、創造主のトリニティ的な痕跡を認めることができるのである。

アウグスティヌスは「信仰は理解を求める」と述べた。彼にとって三位一体は、思考を停止させるべき謎ではなく、理性を以て限界まで探究すべき「愛すべき神秘」であった。この姿勢は、現代の信仰生活に重要な指針を与える。信仰とは理性の放棄ではなく、理性をその最高の対象——神——へと向かわせ、そこで初めて理性はその本来の力を十全に發揮することを可能にする。そして同時に、その探求の果てに、理性は自らの限界、すなわち神の神秘の前の「知的謙遜」を学ぶのである。信仰と理性は対立物ではなく、真理へと高みを目指す魂の「両翼」なのである。

終わりに: 変わることなき「平安」への渴望と、恩寵による自由

アウグスティヌスとの思索の旅を振り返り、その思想が千年の時空を超えてなお力強く響く理由を考える。それは、彼が人間の存立の根本条件——神なき故の魂の不安、自由という重い特権と責任、歴史の流れにおける意味の探求——に対して、信仰と理性という両刃の剣をもつて真正面から切り込んだからに他ならない。

彼は「恩寵の博士」と称される。その理由は、救いの初めから終わりまでが、神の一方的な恵みの業であるという彼の確信にある。しかし、この恩寵は人間の意志を無力化するものではない。むしろ、罪に縛られ、真の善を選び得ない「不自由な意志」を、内側から解放し、回復する力なのである。アウグスティヌスにおける「真の自由」とは、善(神)を愛し、選び取る能力の回復を意味する。それは、恩寵によって初めて可能となる、最高次の自由なので

ある。

現代社会は、自己決定権の絶対化を以て「自由」の極致と見なす傾向が強い。しかしアウグスティヌスは、そのような自己中心的な「自由」の追求が、実は欲望と不安への最も深い隸属をもたらすことを警告する。神への愛を原点とし、隣人への責任をその当然の帰結とする生のうちにこそ、眞の自由と共に、深い「平安」が訪れる。彼自身が生涯をかけて求めたもの、そして『告白録』の冒頭で謳ったもの、まさにそれである。

我々の心は今も、無数の「梨」——すなわち、空虚な満足を約束する数多の誘惑——に囲まれ、揺れ動いている。アウグスティヌスという不滅の架け橋は、そのような現代人に対し、変わることのない眞実を指し示し続ける。神の内にこそ魂の安息はあるという確信。そして、その安息へ至る道は、我々の弱き努力ではなく、神の溢れる恵み——恩寵——によって既に開かれているという福音。アウグスティヌスとの対話が我々に遺す最も深遠な信仰の遺産とは、この渴望への誠実さと、恩寵への全幅の信頼を以て、地上の旅路を歩み続ける覚悟なのである。

ワーカホリック予備軍

高瀬ひなた(社会学部4年)

昨今の流行語の一つに「ワークライフバランス」という言葉がある。つい一か月ほど前には高市総理が自民党総裁に就任した際には「働いて、働いて、働いてまいります。」という名言を残して話題になった。私に一国の総理やら、総裁やらに就任するときの気概は到底はかり知ることはできないが、唯一共感できるかもしれないことといえば、私にもワーカホリックの素質があることではないだろうか。ワーカホリックの素質がある、と言っただけで私は自分が勤勉だとは全く思っていない。必要なタスクを計画通り着実に進めることは極めて苦手だ。現に今も卒論の進捗には黄色信号が灯っている。

振り返ってみれば、私の大学生活のワークライフバランスは全く取れていない。勉学は拙いし、せっかく寮に上京して、丁寧な生活を送るかと思いきや、衣食住を投げうってバイトと部活に明け暮れていた。気が付けば卒論提出一か月前。沢山授業を取ろうと思っていたのに、卒業単位ぴったりでフィニッシュを迎えそう。ちなみに今もバイト先でこの会報の構想を練っている。

私と言えば部活だと思っている寮生、OBが多いのではないかと思われるが、自分ではバイトの方が印象深い気がする。そこまで言い切ると部活に失礼な気もする。実際バドミントン部では他で得られないような、悔しい思いをたくさんさせてもらった。部活生活現役生活は悔しいことの方が多かったし、10年間バドミントンを自分なりに頑張ったつもりだったけど、振り返ってみれば、今までの人生で唯一自分の努力が報われないと思ったし、挫折した経験だった。詳しくは部活の会報があるのでそちらで書こうと思っているが、要するに対した選手じゃないし勝負強い選手でもなかった。大学生活の中で、昇格も降格も経験した。昇格は確かに嬉しかったけど、昇格できるはずだというプレッシャーの方がはるかに強かった。昇格しても、上のリーグでは全然勝てなくてつらいことの方が多い

かつたし、挙句の果てに降格し、現役のうちに再昇格はできなかった。ちなみに引退試合はその再昇格をかけた試合で競り負けたものだった。いろいろあれをすればこれをできていればという後悔は浮かぶけれど、その試合の調子が悪かったとは思わない。要するに自分の限界を感じてしまったともいえる。一介の学生アスリートだっただけの人が何を偉そうに語っているのでしょうか。むしろこんな感じだから強くなり切れなかったともいえる気がする。

部活のことはそれくらいにして私が「ワーカホリック予備軍」という話に戻る。私のバイト履歴を書かせていただくと初めてのバイトは高校時代通っていた塾のチューター。朝も働きたくて始めたのがサンマルクカフェ。もっと朝から働くだろうと思って始めたのが、オリジン弁当。ここまで3つの掛け持ちが入寮する前の千葉時代。大学まで2時間以上かけて通いながら、部活を週4回やりながら、このバイトをしていた自分が信じられない。この時のモチベーションは引っ越しの費用をためることと、部活の費用を貯うことだった。大学入って最初の1年も103万の壁が見え隠れしていた。

晴れて上京して初めてのバイトは、西国分寺の個人経営のレストランだった。手渡しでありがたかったが、なんと私がバイトに入って2か月でつぶれた。ものすごく賄いはおいしかったし、お父さんみたいで上京後話も聞いてくれて安心する存在だったけれど、なぜ私を雇ったのかだけは謎だった。つぶれそうなことを察してか入れ替わるように始めたのがエクセルシオールカフェ。ここが一番長くお世話になっているし主戦場ですね。それと半年前に始めたのが内定先の夜勤。今では内定先に一番多く入っていて、もはや寮よりも滞在時間が長い。

世の中にはいわゆるブラック企業と呼ばれるものが残念ながらあって、働き方改革が必要なのは自明ですね。でもそれは働くを得ないから働いているのであって、私は別にそういうわけではない。確かに仕送りは多くないし、バイト代が大きいに越したことはないのだが、何も学生バイトの分際で体を壊す寸前まで働き詰めることなど、誰も求めていない。それなのになぜこんなに働くかと言われば、時間が空いていることがどうも落ち着かない。何も予定のない時間があると、どうしても埋めてしまう。それと同時に、私が多少体力バカであることと、自分の時間が欲しいという感覚というかキャパが多少人よりぶつ壊れているのだろう。特に部活を引退してからは、規則正しくありたいとか、睡眠食事に気をつけなくてだとかの観念が特に薄れてしまって生活リズムなどない。だが自分が必要とされているという感覚や、お金が手に入る感覚や、動き回っているという充実感はある種の自己肯定感になるし、生きがいともいえなくもない。ちなみに忙しすぎると自炊はしないしすぐコンビニで済ませるし体に良いことなんて何一つない。何も予定のない時間は寝ているか食べているかだ。または、稼いだお金を使っている時間。部活を引退してから体もたるむし、肌もあるるし、稼いではいても金遣いは荒くなるし、部屋も汚くなる。こんなのでよいのだろうか。せっかく自分で自由に時間の使い方を決められるのに、こんな使い方でよかったのだろうか。

そんな感じで常にバタバタしていた私に、なんとのんびり時間が表れた。免許合宿だった。11月の初旬山形県米沢市に2週間滞在した。大学生活の中で最も丁寧に生活した2週間だった。シングルルームで一日3食付きだった。ありきたりな表現だが、本当に空気がおいしくて、朝日で目が覚めて日付が変わることには眠くなり、毎日紅葉を眺めながらドライブができた。毎日湯船につかり、片付いた部屋で暮らしていた。ほぼ毎日半日は授業の無

い時間で、コーヒーを入れて山形ローカルのテレビを眺めていた。元来テレビっ子だった幼き日を思い出した。話し相手がいないことだけはさみしかったけど、山形弁の教官の皆さんや職員の方はみんな温かかった。バイト先の大手町の夜景は確かにきれいだけど、見ていてげんなりする。特に今日なんか休憩時間で外にでれば、イルミネーションと華金にはしゃぐサラリーマンだらけで、何とも言えない虚無感を感じた。ああ、来年の地方赴任が待ち遠しい。

少し書いてしまったが、私は無事卒論が提出できれば、来年からは新聞記者として社会人になる。私らしくワーカーライフバランスという概念はあまりない職種だ。さみしがり屋な私は、ワークだかライフだかわからぬくらいの方があつてはいるのだと信じている。なんとなく人口の多いにぎやかなところに赴任したいとうすら思っていたが、今や山形でも青森でもどんな田舎でもどんと来いと思っている。

最後になりますが、この YMCA 女子寮での生活を日々支えてくださっている皆様に感謝申し上げます。まだまだ未熟な女子寮ではありますが、今後ともご指導ご鞭撻をいただきながらよりよい生活の場として続していくことを願っております。

東アフリカ渡航記

古川こころ(社会学部4年)

私は昨年1年間、大学を休学して半年余り東アフリカに滞在しました。ケニアでは現地の企業とNPO法人のもとでインターンとして働き、テロ組織に加入していた若者たちの更生支援などの業務を通じて地域社会に向き合う日々を過ごしました。ウガンダでは別の団体の活動にボランティアとして参加し、職業訓練や栄養指導などの地域開発の現場を肌で感じました。さらにルワンダでは大学に通い、現地の学生と机を並べて学ぶ機会にも恵まれました。その後、タンザニア、エチオピア、エジプトを旅しながら多様な文化と出会い、半年間にわたる濃密な時間を過ごして帰国しました。日本で暮らしていた頃には想像もしなかった日常と出会い、数えきれないほどのハプニングに直面し、それ以上に多くの人に助けられながら、瞬く間に過ぎていった時間でした。

今この経験を振り返って最も印象に残っているのは、私が見た「アフリカ」という場所では、人の死が驚くほど身近に存在していたという事実です。そして、そこに生きる人々と私との間には、決定的な違いなどなく、生まれた環境という偶然以外にはほとんど差がないという気づきでした。街を歩けば交通事故が頻繁に起こり、医療へのアクセスの制限によって、本来であれば治療できる病気でも命を落とす人がいました。民族間の対立や紛争によって命を落とす人々の話を聞きました。もしこれが日本であれば避けられたはずの死と何度も向き合い、どうしてここまで日本と状況が違うのかを問い合わせ続ける日々でした。

それでも、現地の人々のたくましさには何度も圧倒されました。厳しい環境の中で家族を支え、子どもを育て、未来を切り拓こうとする力強い姿に何度も心を動かされました。ときに絶望的とも思える状況を前にも、彼らの多くは笑顔を絶やさず、日常を生き抜いていました。その姿を目にするとたび、私は深い尊敬の念を抱くと同時に、部

外者であり日本人として、自分が彼らの生活や未来に対して何を担いうるのかを、繰り返し自分に問いかけていました。

ルワンダでは1994年の虐殺の被害者・加害者の双方に出会い、ケニアではかつて武装勢力に身を投じていた若者の話を聞きました。どの国でも、路上で施しを求める人々とそれ違い、見えない格差の存在を突きつけられました。タクシーに乗って快適に移動する私と、路上に立ち続ける彼らとの間には深い溝が存在しているかのように感じました。それは努力や意思では埋められない、生まれた場所の違いによって生じた残酷なものであるとも感じました。もし私が彼らと同じ土地に生まれていたら、逆の立場に立っていた可能性もちろんある。その偶然の重さを思うと、彼らを遠い国の他人としては見ることはできませんでした。

ケニアで出会った若者の中には、ジェンダーに基づく暴力に巻き込まれた人もいました。しかし、彼らは単純な加害者という言葉では語れない存在でした。多くの場合、貧困や教育機会の欠如、家庭の崩壊といった複雑な背景が彼らを追い詰め、暴力の連鎖の中へと押し出していました。自分の行為が間違っていると理解しながらも、他の選択肢がなかったと語る人もいました。彼らの姿を前にして、加害者と被害者を一義的に分けることの難しさを痛感し、問題の根底にある構造そのものに目を向けなければならぬと強く感じました。

この半年間、私は自分の存在意義や立ち位置を幾度も問い直しました。日本に生まれ、教育を受け、自由に旅ができるのは自分の努力ではなく単なる偶然の積み重ねです。もし違う環境に生まれていたら、私は彼らの立場にいたかもしれない。それを自覚することで、彼らを他者として距離を置くのではなく、何かが違えば自分だったかもしれない存在として見つめるようになりました。そして、彼らの尊厳を守るために自分が何ができるのか、自分の学びや経験をどう社会に還元できるのかを、これから的人生をかけて考えていきたいという思いが芽生えました。

この一年間の経験は、単なる海外滞在や冒険ではなく、自分の価値観を問い合わせに直すきっかけになりました。世界には構造的な不平等が確かに存在し、そこに生きる人々は決して弱者でも可哀そうな存在でもなく、自分と地続きの現実を生きています。私と彼らを分けるものは何なのか。その偶然をどう意味づけ、どう行動に変えるのか。これからもその問いを胸に、学び、考え、実践を積み重ねていきたいと思います。

最後になりましたが、OBクラウドファンディングにご協力くださった齊藤理事長、温かく背中を押してくださった佐藤理事をはじめ理事会の皆さん、ご支援くださったOBの皆さん、そして一年間の不在中に寮を守り、運営してくださった寮生の皆さんから感謝申し上げます。皆さまの支えがあったからこそ、このようなかけがえのない時間を過ごし、多くの学びを得ることができました。本当にありがとうございました。

ロンドン留学記

吉田元喜(経済学部4年)

昨年度の9月から6月にかけて一橋大学の派遣留学プログラムを利用してイギリスのロンドンにあるロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカル・サイエンス(LSE)という大学に長期留学してきました。長期留学に行った寮生は会報でその報告を行うのが通例となっているそうですので、以下で軽くご報告させていただきます。ご一読いただけますと幸いです。

まず初めに LSE について軽くご紹介させていただきます。私が学んだ LSE という大学は一橋と同じく社会科学に特化した大学となっており、物理、化学、生物といった理系学部や実験施設などはありません。LSE と入学難易度、生徒の質及び実績で近い大学として同じくロンドンに ICL(インペリアル・カレッジ・ロンドン)という、こちらは自然科学に特化した大学があり昨年合併して科学大となった東工大と一橋の関係によく似ています。LSE はこの ICL の他にもロンドンにある有名な大学(UCL、KCL、SOAS など)と連合を組んでおり、この連合がいわゆるロンドン大学と呼ばれます。そのため、実際にはロンドン大学という大学は存在しておらずあくまで旧帝大のようなニュアンスのようです。話を LSE に戻しますが、LSE はイギリスの大学ですのでオックスフォードやケンブリッジなどと同じく学部が3年修士が1年となっています。卒業までが日本やアメリカの大学よりもかなり早いですが卒業生の実績では決してこれらの大学に負けていません。去年、今年と連続して受賞しているノーベル経済学賞受賞者数は16人と世界的に見ても非常に多く、学術以外にも国家元首なども多数輩出しています。

実際にロンドンに留学して自分が考えたこと、感じたことについてそれぞれロンドン生活についてと LSE についての二つに分けて書いていこうと思います。まずロンドン生活における最大の気づきはこれまで自分が世界で何が起きているかについてどれだけ無関心だったかを知れたことでした。ロンドンは大学や金融街があるために国際的なバックグラウンドを持つ人が集中している地域であり、街を歩いているだけでも、様々な異なる人種の人には出会える街です。そのため、当然ながら交流をする友人、知人も皆異なる国から来ていることが多くニュースの話となると国際ニュースになることが多かったです。私は大学附属の学生寮に住んでおり、朝晩は寮のカフェテリアで食事をとっていたのですが世界的なニュースがあるとカフェテリアでの食事は皆当然のようにそれについて話していましたし、新聞を読んで国際関係や政治について語っている人も多かったです。多くの学生が社会や世界で起きていることに高い感度を持っており、またそれへの意見を持っているというのは日本の学生と比較して自立した一社会人に近いと感じました。

次に LSE についてですがこちらもやはり一橋とは多くの面で違いがあるように感じました。今回は特に学生の違いと何がその差を生み出しているかについて述べていこうと思います。LSE の学生の特徴として非常に活動的で熱意のある学生が多かったです。学部を3年間で卒業しないといけないため授業だけでも非常に忙しいのですが、それに加えて一年時からインターンシップ、ヨーロッパ諸国への海外旅行、パブでの飲み会、サークルの運営、趣味への熱中などといつ寝ているのかわからないほどの多くのことをやり遂げている生徒が多かったです。この活動量を生み出しているのは学生が皆自分のやりたいことを持つておらず、それを達成するために活動していることが一因であると思います。留学中に将来何をしたいかという問い合わせに答えられていない学生にはほぼ会いませんで

したし、経済学部の学生のほとんどは授業以外の時間も好んで経済学のニュースを読んだり自分で自習していました。その点で比較すると、日本の学生は自分が何をしたいのかが明確になっていないまま大学に進学し、在学中も何をしたいのかを考える機会が少ないように感じます。自分自身受験時代は第一志望の合格に合格することばかり考え進学後はどこの学部に行きたいかや将来どのような仕事につきたいかを考えることは殆どありませんでした。近年ではAO入試や推薦入試の枠が増えているという話をよく聞きますが、一般入試でもなぜその学部に行きたいのか、その分野でどのような実績を残したのかなどを選考に入れることは入学前の学生に自分自身の選考について考えさせ、入学後の熱意に関係するのではないかと考えました。

ゴミを集めて生きる

見定和樹(経済学部4年)

再会(再開)

ゴミ収集バイトを三年ぶりに再会した。

このバイトは8:30-14:30で途中一時間休憩あり、日当一万円だ。当日、一万円を現金でもらえるため、金欠大学生にはとても割が良く、ありがたいバイトだ。もともとは、私が大学一年の頃、当時四年生だった先輩から紹介され始めたバイトだった。私にとって初めてのバイトがゴミ収集だった。三年間の期間が空いているにも関わらず、おっちゃん達は、僕のことを覚えてくれていた。どことなくおっちゃん達から老いを感じ、寂しさを覚える。紹介してくれた先輩はつい先日結婚式を挙げたらしい。先輩はゴミ収集のおっちゃん達から人気だったため、結婚したことを伝えると皆喜んでいた。

金曜日

私が毎週入っている金曜日は不燃ごみの日だ。不燃ごみは、すべての家が出しているわけではないので他の曜日に比べてすぐ終わる。金曜はアタリの曜である。現場は清瀬駅からバスで15分ほど行った先にある事務所だ。事務所は経営だけでなく、事務所自体も傾いている。比喩表現としての「傾き」が建築に表象されている。

6:30 アラーム

移動に時間がかかるため、6:30起きで向かう。ただひたすらに眠い。もう一回寝たい。だが、ゴミ収集はバイトであり、仕事である。何とか身体を起こし、歯だけシャシャッ磨き寝癖を付けたまま出勤する。行きの電車はサラリーマンや、現場マンが多く、みんな虚空を見つめている。どうにかして席に座り、少しでも体力を消耗せずに出勤するかに、体力を消耗しているように見える。朝早くに起き、ぎちぎちのハコに詰め込まれながら毎日各自の目的地へと向かう人達を尊敬する。

現場

私は8時頃に到着して、事務所でタイムカードを切る。隣にあるプレハブの休憩所で着替える。休憩所にはすでに青い制服に身を包んだおっちゃん達が待機している。最近までワールドシリーズがあったので、もっぱら話題は大谷翔平、野球好きが多い印象。8:15に朝礼がある。おっちゃん達は、物憂げそうな表情をして煙草を吸って

いる。社長からの「最近寒くなってきたから、トイレが近くなることでしょう。ぐれぐれも便所内で用を足してください。以前、外でしたうちの社員が通報されたので。」ありがたいお言葉をいただく。

8:30 出発

ゴミ収集は毎回 4~5 台のゴミ収集車を使って、各々の担当箇所のゴミを収集する。ペアは基本的に固定されおり、私は 80 歳手前のおじちゃんとゆく。毎回、電気風呂が気持ちよいという話をしてくれるし、肉まんをくれる。孫が私と同い年からか、特別に良く扱ってくれるように感じる。電気風呂の電気はもう少し強くしてほしいみたい。

収集開始

まずは、団地のゴミ集積所から集める。ゴミ収集をはじめてわかったことだが、集積所のゴミ出しマナーは悪い。戸建てと違って、誰がどのゴミを出したかわからないからだ。匿名がゆえに、ルールを守らなくても良いという考えは今の SNS で起こっている問題と同じ背景を共有しているように思える。集積所は最悪だ。ゴミ袋を持ちあげたら後ろから奴ら(G)が四散する。ゴミ収集は「きつい・きたない・きけん」の 3K 網羅型労働だ。集積所のゴミ袋を取つたらその裏からおびただしい数の G が爆散、臭いはまだ耐えられてもこればかりは耐え難い。

給与/驚きました

ゴミ収集のおっちゃん達は手取りで月 20 万らしい。無くてはならない仕事にも関わらず。

ゴミ収集の人手が足りなくなったらどうなるのだろうか？ 実際に私のバイト先の事務所は高齢化が進み、人手は減っている。誰か一人がその日いなくなるだけで、大きな痛手となる。もし仮に、ゴミ収集のおっちゃん達が減びたらどうなるか考えてみたい。一週間もしない内に街のそこら中が汚れ、臭い(💩: ぼくだよ！)が充満する。ネズミと、G の楽園の完成だ。ゴキブリの居場所は火星なんかではなく、地球なのだ。

「地球の平和を守る正義のヒーロー」のおっちゃん達の中には別の仕事をしている人もいるらしい。50 代くらいのまだまだ動けるおっちゃんもいるが、最近お世話になっているおじちゃんは 80 手前だったみたいに、現役世代卒業後も、曲がった腰・おぼつかない足取りで仕事をする。いや、しないといけない。生きるために働かないといけないのだ。

※//ここで伏線回収！ 金曜日は不燃ごみの日、つまり不要になった家具家電が捨てられているのだ！ 毎週金曜日だけ、△「宝探し」イベントが発生△ ビニール袋を破り、中の「ゴミ」からまだ使えそうな「モノ」を探す。先週、ペアのおじちゃんは厚底のフライパンをゲット！ !//

質問

この前知り合いにゴミ収集社員の給与の話をしてみた。

「なぜ、ゴミ収集仕事の給与は低いのか。」

「誰にでもできる仕事だからじゃない？」

Q 誰にでもできる仕事とは？

⇒誰かじゃないと出来ない仕事とは？

Q 必要不可欠な仕事であるにもかかわらず、十分な暮らしをするための給与が支払われていないことは問題ではない?

⇒なぜ、必要不可欠な仕事が正しく(?)評価されていない仕組みなのか?(?)

ブルシット・ジョブ/BULLSHIT JOBS

デヴィッド・グレーバー著「ブルシット・ジョブ」を想起。ちゃんと読んだわけでは無いし、ちゃんと読む力も気もまだないのでメモ書きのような断片的なものになってしまうが。

ニューヨーク生まれの文化人類学者であり、アクティヴィストのグレーバーは2013年春『ストライキ!』というウェブマガジンにて小論の寄稿を寄せたことが端を発し、本書をまとめた。ブルシット・ジョブは「社会にほとんど、あるいはまったく貢献していない仕事が、現代には驚くほど大量に存在する。」として、そのような仕事をまとめてブルシット・ジョブ(=牛の糞みたいな仕事)と呼んだ。本書では、そういったブルシット・ジョブの特徴、そしてなぜブルシット・ジョブは生まれるのか等に深く言及し、「労働とは本来何かを必要とする人へ、その必要なものや、ことを行なうことが本来の労働であり、それはつまりケア労働を意味する。」として、ケア労働の重要性を説く。そして、「ケア労働にはゴミ収集等の清掃業も含まれており、『人を支え、維持し、生活・社会を成り立たせる労働』が軽視され、低賃金である。」と、批判した。

グレーバーに限らず、ケア労働は徐々に陽の目を浴び、その重要性を説く研究等は蓄積されてきているように感じる。おっちゃん達が本物のヒーローとして世間から評価される日を信じて。

狭間としての「ハーフ」、狭間としての「台湾」

樋口祐熙(社会学研究科修士1年)

本稿は、私の最後の会報である。寮生活の振り返りもやろうかと思ったが、それは他の寮生に任せることにしよう。この5年間の私の道筋は、自身の生い立ちをいかに引き受けるのかという問題であった。私は、日本と台湾の間に生まれたいわゆる「日台ハーフ」である。ここ5年間、自分がどう生きるかを考えるために自分が置かれた世界を知ろうとした。これは、その営みの暫定的な軌跡であり、私が何者であるかについての説明であり、読む者に対する訴えの企てである。

・狭間としての「ハーフ」

日本における「ハーフ」カテゴリは、「日本人」と「外国人」という二分法と密接な関係がある。

明治維新以降の日本史は、国民化および「他者」を統治し膨張する帝国化の平行的なプロジェクトの歴史である。まず北海道と沖縄を内に取り込み、現地住民に対する同化を図った。その後台湾を初めとして朝鮮半島、樺太、南洋、満洲などに進出、「外地」等の支配を通して帝国膨張を図って来た。その中で帝国圏内には活発な人口移動が発生しており、外地に進出する内地人も多かった。他方、日本は明治維新以降、ハワイ、北米、南米などに移民を送り出してきた存在でもあり、いわば「移民送り出し国」でもあった。戦前は、帝国圏の内外において、活発に集団的な移動が行われた時代であった。

しかし、戦前の帝国状況は、太平洋戦争の終結後、領土・国民、として統治体制が再編される過程で、断絶されたものとして忘却された。「戦後日本」の自画像において、基本的なメンバーは戦後日本の領土に定住する、日本語と日本文化を身に着ける「日本人」とされた。明治期の編入以前から北海道や沖縄に暮らした人々やその子孫の存在や記憶は他者化されたまま顧みられなかった。また朝鮮半島等の植民地出身者で内地に残った人々も、外地に居住していたために内地と異なる歴史経験をもつ者も例外化された。このようにして彼等は「日本人」の主流の歴史記憶からは零れ落ちる存在となった。戦前に経験された「外地」と「他者」の記憶が忘却された「戦後日本」においては、日本は「日本人」という単一民族によって構成されるという神話が有力な言説となっていた。「日本人」というカテゴリは、国籍の意味での「日本人」、文化的な「日本人」、ルーツ・民族的な意味の「日本人」など、様々な意味を持って使われたが、これらは暗に一致するものとされ、いずれかの要素を満たさない存在は想定されなかった。戦後日本において、人間を区別する最も基本的な枠組みは、「日本人」と「外国人」という二分法とされ、その基準は国籍、ルーツ、身体的特徴・言語・文化など、様々な要素がその場に応じて選択されてきた。

様々な基準が都度選択されながら実践される「日本人」と「外国人」の二分法は、今日の日本社会においても、強力な人間の区別の方法として機能している。日本国籍に帰化した海外出身者が、見た目や所作、ルーツ等を理由に、「日本人」として承認されずに攻撃されることもある。日本国籍を離脱した人に対して、ノーベル賞受賞やスポーツでの活躍などの理由で、「日本人」とみなされて賞賛を受けるという場面もある。日本にルーツがなかったとしても、日本文化と日本語を身に着けていれば、「日本人よりも日本人らしい」などと賞賛を受けることもあるし、日本生まれ日本育ちの日本国籍者であっても「日本人ならだれもが共有する日本文化」とされる常識のようなものを身に着けていなければ、「日本人じゃない」と非難される(私も何度も経験した！)。これらは日常で起こる、様々な基準で選択的に人間を区別しようとする行為である。

「ハーフ」とは、いわばこの「日本人」「外国人」の二分法による眼差しを投げ込まれ、常に引き裂かれる例外的存在である。「ハーフ」は、一般に「日本人」と「外国人」の親を持つ子どもというように解釈される。このような存在は帝国期から「混血」などとして呼ばれていたが、1970年代頃から「ハーフ」という呼称が少しずつ定着していった。この定義は、「ハーフ」が「日本人」と「外国人」のどちらにも所属しうるし、どちらにも完全には所属しえない存在であることを示しており、「日本人」「外国人」という定義が「ハーフ」に先立っている構造である。一般的な枠組みとして「日本人」「外国人」の二分法が強力な社会構造において、「ハーフ」は本人のアイデンティティがいかなるものであるかに関係なく、他者によって無理やりどちらかの枠組みに押し込められようとしてきた。

日本では、多くは容姿などの身体的特徴や振る舞い、名前など、外からみてわかる情報だけで「日本人」か「外国人」か、そしてあるいは例外的に「ハーフ」なのかが推定され、枠組みに押し込まれてしまう。しかし、イメージによる外からの推定は往々にして正確には達成されない。「ハーフ」であっても名前を理由に「日本人」と思われたり、見た目を理由に日本語育ちであっても英語で話しかけられる等の「誤認」が日々行われる。

「誤認」だけではなく、「ハーフ」が知られた後でも、「日本人」「外国人」の二分法に回収しようとする眼差しにさらされる。私は、自分が日台ハーフであると知っている人が、私を他の人に「彼は日本人だ」として紹介する場面に何度も出くわした。逆に、寮生や友人会話しているとき、食文化や趣味嗜好などを理由に「日本人じゃない」と

言わされた。「ハーフ」が自らをどのような人として語ろうとするかに関係なく、「ハーフ」は他人によってカテゴライズされる。

また、「ハーフ」は、しばしばステレオタイプな「ハーフ」性を投影される。たとえば、「白人」とのハーフだとみなされた場合、しばしば「英語」を話すことを期待される。また、「黒人」とのハーフだとみなされた場合、しばしば足が速い/身体能力に優れている等とイメージされる。肌の色が黒い男性の場合、しばしば恐怖や犯罪、暴力と結び付けられ、職務質問を受ける割合が大幅に高まる。女性で「外国人」の見た目をする「ハーフ」だと、しばしば性に奔放なイメージを付与され、セクハラを受けやすくなる。実際の言語状況にかかわらず、バイリンガルであることや、複数国の文化を身に着けていることを期待され、本人がいかなるコンプレックスを抱いているかにかかわらず、「羨ましい」などと言われる。

他方、政治的な言説においても、「ハーフ」はしばしば引き裂かれた存在となる。例えば、近年強力になってきた「日本人ファースト」を掲げ、「外国人への取り締まりを強化」しようとする言説の構造は、「日本人」「外国人」の二分法の典型例である。この言説は、そもそも「日本人」と「外国人」の内実が多様であることを無視した極めて乱暴な言説であり、正当性が殆どないに等しいが、強力なイデオロギーとして「外国人」と見做されうる当事者にとつての脅威となっている。しかしここでも、「ハーフ」が置かれた立場は極めて複雑なものである。自分は「日本人」なのか、「外国人」なのか?これは、国籍のレベルでも、本人のアイデンティティのレベルでも多種多様である。しかし、同一の人間であったとしても、場面と相手によって、「日本人」と認定されたり、「外国人」と見做されたりするのである。「日本人」と「外国人」のみによって対象をくくる議論には、しばしば「ハーフ」の存在が否定されており、あるいは例外化されている。「ハーフ」は語り得ぬ存在に落とし込まれている。

一連の議論で何が言いたかったか。「ハーフ」は、「日本人」「外国人」の二分法によって構築された人間の認識枠組みから零れ落ちた例外的な存在であり、二項対立を維持するために排除された「第三項」である。ありのままの身体や生い立ち、アイデンティティ、言語文化的な状況、生き方の志向性、価値観に至るまで、そのままの存在として想定されない、狭間に落ち込んだ存在である。他者が「ハーフ」を語るとき、「ハーフ」の声は参考されず、「日本人」「外国人」の基準が参照され、押し込まれる。

「ハーフ」は、自身を語る有力な言葉を未だ確立できていない。「ハーフ」が自身を語れるかどうかに対して、私は悲観的である。

第一に、「ハーフ」の存在は散らばっている。「ハーフ」の人数に関する正確な統計は存在しない。日本国籍と外国籍の親を持つ子どもは、新生児の2パーセントほどで推移しているという。しかし、2パーセントの人間を、当事者同士で見つけることは容易ではない。見た目も名前も正確な判断基準にはなり得ない。

第二に、「ハーフ」の経験とアイデンティティ、そして志向性自体があまりに多様である。そもそも、ルーツも経験も、自らのアイデンティティも多様であり、「日本人」と思っている人もいれば、「何者でもない」と思っている人もいる。もちろん、こうしたアイデンティティの問題をとりあえずわきに置き、社会生活に邁進するような生き方も存在する。彼等が一同に会したとして、目指される方向性は一つにはなりえない。「ハーフ」の中には、完全に「日本人」に同化し、承認を得ようとして、自ら「日本人ファースト」を唱える者もいる。

第三に、結局のところ、「日本人」「外国人」の二分法の言説と、それを形作り支えて来た日本の「国民」をめぐる制度が変わらなければ、ハーフはいつまでも例外である。日本が血統主義をとり、二重国籍を認めない制度がその例である。言説と制度は相互に強化しあうが、今の主流な構造——一人の人間は、一つの国籍をもち、一つの国

に完全に帰属する一という日本の国民国家の制度と言説がますます強化される今日、ハーフが表に出て、自らの存在を公式化させようと語ることのリスクは際限がない。

こうした孤立状況のなかで、私がいま未来に対して唱えることができる内容は限られている。まずは、「日本人」という概念、そして「外国人」という概念の単純化と自明視を早急に辞めることである。それぞれの概念が、どのような意味で、いったい誰を指すのか、慎重に検討されなければならない。そうでなければ、二分法の狭間的・例外的産物として生まれ落ちた「ハーフ」というカテゴリを生きる人間の在り方に辿り着くことは不可能である。

・狭間としての「台湾」

ここからは、私が身をおくもう一つの狭間を論じよう。私のルーツの一つである台湾自体が、多義的で、あいまいで、かつ論争の的となる概念である。「台湾」の特徴は、そのあいまいさにあり、台湾島をめぐる歴史的経験からすれば、それは「諸帝国の周縁」という狭間的性格に集約される。

そもそも台湾とは何か？台湾島を指すのか、国際的に台湾と表現される、中華民国と名乗る政治共同体のことなのか？漠然と、台湾島とその周辺島嶼部、及び、それを統治している中華民国とイメージされうるが、それぞれの概念が指す内容と歴史経験は異なるものである。

台湾島は、古くはオーストロネシア系の先住民が住んでいたが、1624年のオランダ東インド会社による支配をきっかけに、漢民族移民が流入した。その後、一時的なスペインの支配の試みもあったが退けられ、またオランダに変わって1662年から鄭成功政権が台湾島を支配した。しかし鄭氏政権は長続きせず、1683年に清朝に編入されることになった。その後、1895年に日清戦争を経て下関条約が結ばれると、台湾島と澎湖諸島は日本統治下に入った。日本統治は50年続き、台湾社会に無視しえない影響を与えたが、1945年の太平洋戦争の結果中華民国政府に接収され、中華民国支配下に入った。この時点で中華民国は大陸にも勢力を置いたが、中国共産党との争いに敗れ、大陸から撤退し、台湾島の周辺や金門島等を実効支配する政治体となった（日本の支配を受けた地域と完全に同一ではないことに注意しなければならない）。当時中華民国は正統な「中国」として承認を受けていたものの、1971年に国連を脱退、諸外国が中華人民共和国を「中国」として認め国交を結んでいく中で、中華民国の国際的立場は孤立を深めた。この時点で、中華民国は、立場的には中国全土を支配する正統な中国と主張しながらも、実態として台湾とその周辺地域のみを実効支配しており、かつ国際社会からは「中国」としての承認も得られていないという、奇妙な政治体制に陥った。これにたいし、台湾島内では戦後続いた国民党政権による独裁と白色テロに対抗して民主化運動が起きていた（台湾内外で独立運動があったことにも注意）。政府としてもその政治体制を実情に合わせる必要に迫られ、民主化とともに国家体制を台湾サイズにする本土化が行われた（「中華民国台湾化」）。ここにきて、中華民国と台湾がおおまかにイコールに結ばれる状態が出来上がったのである。

一連の歴史を見て指摘できるのが、台湾（島）は常にその主権が外来政権に握られ続け、諸帝国間の周縁としての歴史を歩み続けてきたという歴史をもち、むしろ今日のように自由と民主主義という自画像を持つ社会として事実上の主権国家とみなされうるようになったのは、民主化以降の三十数年間だということである。

それまでは、オランダ、スペイン、清朝、日本、そして正統な中国を主張する中華民国と言った一連の支配者の周縁に位置し続けていた。そして今も、台湾社会は、それを実効支配する政治体が主権国家として国際的な承認をほとんど受けていないのみならず、絶えず中華人民共和国から挑戦を受け続けており、その行末は中華人

民共和国とアメリカ、日本などという大国の政治にも大きく左右されるという位置にある。他方、台湾社会の中では、中華民国の正統性自体にも異議を唱え新たな国家を建国する主張を持つ者（台湾独立派）もいれば、現状維持派、統一派に分かれており、大多数は現状維持派であるものの、その行末は未知数である。このようにしてみると、台湾の共同性は極めて脆弱であり、外から利用されやすく、かんたんに崩壊しかねない。

台湾に住む者のアイデンティティも、その歴史によって複雑な道を辿った。そもそも、日本統治期には、台湾住民は「本島人」といわれ、また台湾原住民族は「蕃人」「高砂族」などと呼ばれていた。「台湾人」というアイデンティティは、日本統治期の台湾住民の一部知識人らによって提示されはじめた。しかし、中華民国統治下に入ると、今度は「中国人」であることを迫られるようになった。同時に、中国大陸から200万規模の人民が台湾へ流入してきた。民主化した現在、ようやく多様なエスニックグループを総称した形で、台湾社会の構成員としての「台湾人」アイデンティティが形成されつつあるが、それぞれのエスニックグループの歴史経験も文化も多様である。台湾原住民族、清朝時代から来た漢族移民、中華民国期に台湾へやってきた大陸出身者、現在中華民国の支配地域になっている金門島や媽祖諸島などの住民、そして近年台湾へ移住してきた東南アジア出身の「新移民」、様々な来歴を持って台湾に関わる者。台湾社会において、「台湾人」とは誰なのか？という問はずも、未だ形成途上、議論の途上にあるのである。台湾は国なのか、国ではないのか。中国なのか、中国ではないのか。中国とは、中華人民共和国を指すのか、中華民国を指すのか、中国大陸を指すのか？台湾人とは、いったい誰なのか？独立とは、一体どういう状態を指すのか？こうした問題は立場と解釈により異なる主張が展開されているが、議論は常に混乱している。

日本においても、「台湾」を巡る問題は、それぞれのイデオロギーによって、都合よく語られてきた。ある時は植民地統治肯定論とともに「親日」として語られ、ある時は「自由と民主主義」の先進国として語られた。ある一部の言論は、中華人民共和国が唱える意味においての「台湾は中国の一部である」「台湾は中国の内政問題」という主張をそのまま拡散し、又あるときは、中国（中華人民共和国）を嫌うあまり「台湾と中国は別の国である」「台湾独立支持」という言説も聞かれる。これらの主張はすべて、立場と意図、そして用語の定義によって全く意味が変わってくるが、それを慎重に検討している議論は少なく、誤用も目立つ。結局、現に台湾に生きる人々が何を考えているのかは、日本の議論において参考されることは少ない。11月以降、高市総理の発言で日中関係が動搖し始めているが、それをめぐる日本の世論の状況も、同様である。

・擬態する者として生きる

私は、自分を表現するとき、「日本人の父と台湾人の母を持ちます」という。あるいは、「日台ハーフ」と表現する。しかし、「日本人」も「台湾人」も、その中身は一意に定まるものではない。国籍からいえば、私は日本と中華民国の「二重国籍者」である。しかし、中華民国は日本から国家承認を受けていない。「日台関係」を語るとき、私は何者としてそれを語ればよいのかを知らない。私はよく「日台ハーフ」といっているが、「台」はそもそも国なのかどうかもはつきりしない。狭間としての「台湾」、狭間な存在としての「ハーフ」。私の生きる世界は、公式化された正当な認識枠組みからはみ出たグレーゾーンである。私は、世界の狭間にいながら、日本で生まれ育った経験と名前をもって、「日本人」に擬態しながら生きる者である。

私は、自らが「擬態」せずに済み、そのまま承認される場所を欲している。「日本人」「外国人」の二分法によって人間を峻別しようとする場ではなく、自らの生い立ちと自己認識がそのまま聞き届けられる場を欲している。これまで、知人友人に、自らのことを語ったことはある。しかしながら、語れば語るほど、自らと相手の埋めがたい溝を感じ

じ、孤独を深める結果におわった。所詮他人は他人なのだから、完全に理解され共感されたいわけではない。しかし自身が悩んでいることが悩みである理由を受け止めようとする者は少なかった。何度もクソバイスを語られ、無駄に羨ましがられ、そして「考えすぎ」「しかたがない」「難しい問題だ」「思想が強い」などとして思考を放棄された。自身が何人であるかをきれいに言えない自分からすれば、何の疑いもなく「日本人」と自身を重ねあわせ、「日本人って〇〇だよね」と日本人論を振りかざすことは、無意識に見えないナイフをばらまくような暴力的な特権である。

この原稿は、寮に対する最後の企てであり、捨て台詞でもある。自分は今幸い寮にて上級生の立場であるから、比較的抑圧されにくく、聴かれやすい立場にある。しかし、振り返れば、そうでないときもあった。

最後は自分のことから離れよう。寮には毎年新たに人がやってきて、人が去る。それぞれの背景は、多種多様であるはずである。そのなかには、主流とされるものとは異なるものもあるだろう。こうした要素を持つ者が、不当に抑圧されることのない寮であることを願う。語られぬ声が語られ、聴かれぬ声が聴かれるように。沈黙する存在がどうにか生きられるように。他者が集う寮において、既存の単純化された枠組みで他者を認識しようとするのではなく、目の前の人間の在り方を理解し尊重する土壤が育まれるように。

【思索に影響を与えた文献たち】

若林正丈(編)『台湾研究入門』、周婉窈『図説 台湾の歴史』を始めとする台湾研究文献やゼミでの議論

下地ローレンス吉孝『「混血」と「日本人」—ハーフ・ミックス・ダブルの社会史』

伊豫谷登士翁『グローバリゼーション』

石原真衣『<沈黙>の自伝的民族誌』

各種 SNS やメディア・書籍でのハーフたちの語りたち

スウェーデン留学記

北川諒(経済学 4 年)

私は、2024 年 8 月から 2025 年 6 月まで、スウェーデンのストックホルム経済大学(Stockholm School of Economics)に交換留学していました。

まず初めに、10 ヶ月間、国立の YMCA 一橋寮から離れる留学を許可していただいた一橋 YMCA 理事会の皆様、寮生のみんな、そして留学中の資金的援助をしてくれた私の祖母北川清子に感謝したいと思います。ありがとうございました。

今回の留学は、私の人生で初めての海外での経験となりました。

今、会報を書いている国立の喫茶店から地球 1/3 ほど離れた場所に多くの知人・友人がいること。留学を終えた今では不思議に思います。

語学ができなく、人々の知り合いもいない環境は決して居心地が良い環境ではありませんでした。また、冬の日照時間が極端に少ないとへの順応も求められました。この経験が私の大学生活ひいては、私の人格も変えたこと

は疑いようがありません。

スウェーデン・ストックホルムに留学した理由

スウェーデン・ストックホルムを留学先に選んだのにはいくつか理由があります。

一つ目は、EU 圏内であること。前述のように、私は「海外旅行」なるものを知りませんでした。そのため、この機会にお金が続く限り他国を自分の目で見てみようと思いました。加えて、大学受験の際に、世界史選択であったこともこの気持ちを後押ししたかもしれません。

二つ目の理由としては、英語の技能を高めたいという考えでした。英語話者の比率が多い国であることもスウェーデンを選んだ大きな理由となりました。

三つ目は、私が強く関心を持っている環境問題への対応でスウェーデンは先駆的な立ち位置にあり、Climate Tech(気候問題解決に資するテクノロジーを持った)企業の育成に力を入れていること。Spotify や Minecraft などの世界的なソフトウェア企業がスウェーデン、とりわけストックホルムの地から誕生していることから、その秘訣や土壤を知るためです。

結果として、留学中には、イギリス、フランス、ドイツ、オランダ、ポーランド、フィンランドを旅行することができました。また、授業や学生寮の中でのコミュニケーションは全て英語で、街中や自主的に参加した講演会なども英語で行われており、リスニング、スピーチング、ライティングの能力が留学前と比べても鍛えられました。さらに、スウェーデンでできた友人がスタートアップを立ち上げる様を横で見たり、授業内でもチームで企業プランを考える授業に参加したり、ベンチャーキャピタルで働く社会人の友人を得るなど、起業家大国スウェーデンのインナーサークルにいる人々と直に接する機会を得ました。



(スウェーデンでできた友人の Tobias とのキャンプでの写真)

留学中の活動

授業

留学中の前半にはディスカッションが多めの授業を、後半にはスタンダードなミクロ経済学の授業を中心に講義を受けていました。授業は英語で行われますが、スウェーデン人・もしくは東アジア系の教員の英語は非常に聞き

取りやすく中身が頭に入ります。

一方で、インド人の教員の授業は非常に大変でした。彼のしゃべる英語が全く頭に入りません。そのため、教室の最前列に陣取り、授業内容を録音し、それを家で聞き直すことでなんとか教員が何を意図して喋っていたのかを理解するという有様でした。

スウェーデンらしく、現代の企業の SDGs の取り組みや、Climate Finance の授業などもあり、私の関心に沿った授業を楽しく受講しました。ミクロ経済学の授業や計量経済学の授業は一橋のそれと殆ど変わらないか、少しあまりやすいようなものでした。経済学という学問の特性もあり、世界どこでもやることは変わらないのだなという印象を受けました。

留学中の観光

昨年度の会報の編集後記でも記しましたが、スウェーデンとノルウェーとフィンランドの境にまたがるキルナという土地への旅行は良い思い出となっています。

スウェーデンは国として高低差がなく、見渡す限り地平線が続いているのが特徴です。けれど、キルナは違います。高く鋸状の山が聳え立ち、表面に積もった雪の間からゴツゴツとした岩肌があらわになっています。この土地はスウェーデンの最北端に近く、冬の間はほとんど日照時間がありません。

けれども、こんな土地にも住んでいる人はいます。キルナは鉄鉱石の採掘場があることで有名です。長い間、スウェーデンの産業の屋台骨である鉄鋼業の資源を支えてきました。薄暗い暗い昼間のバスの中から遙か彼方に鉄鉱石の採掘場が見えます。鋸状の山の稜線に沿って煌々としたオレンジ色の光を放っていたことが印象深いです。

ポーランド・アウシュビツツ

アウシュビツツに行くのには、ワルシャワからポーランドの古都クラクフに移動し、さらにそこからバスに乗る必要があります。冬のアウシュビツツは濃い霧に覆われることが多いようです。私が訪れた日にも深い霧に覆われていました。強制収容所はそのほとんどが破壊され、わずかな遺構しか残されていませんが、資料館にある写真や、証言、捕虜の髪の毛で作った帽子や服などの遺物からその悲惨な歴史を感じ取ることができました。

留学中には、日本語を学ぶスウェーデン人の大学生・大学院生とも交流しました。冬にはストックホルムの王宮広場にあるスケートリンクと共に滑ったり、夏には広い原っぱで時間を忘れて(実際日照時間が長すぎて時間感覚が希薄になる)クップというスウェーデン伝統の遊びをしたり、ただただ綺麗な夏のストックホルムの街を散歩したりと、夢の中にいたのではないかというような思い出もできました。

自分の変化について

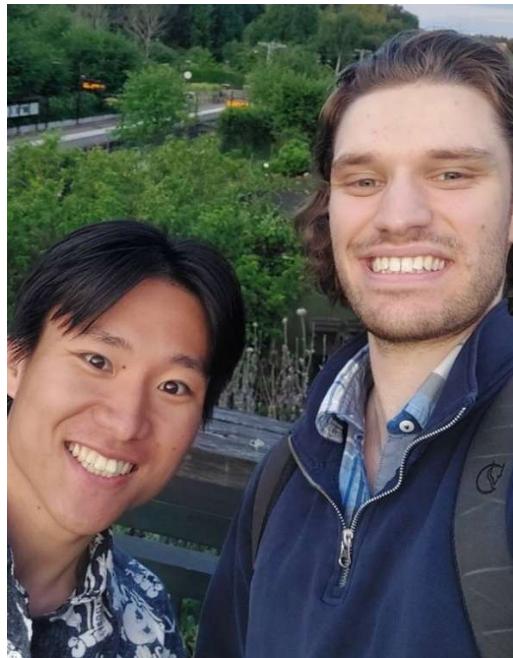
綺麗な思い出もありますが、留学中は悩むことが多かったというのが正直なところです。言語の問題もありますし、あまりにも自分とバックグラウンドや見た目が違う知人たちと共に学んだり、学生寮で生活したりする中で、月並みですが自分の中の当たり前を揺さぶられる瞬間が多くありました。スウェーデンの大学生は、高校卒業後に3年間農業に従事していた人や、30代になってから大学に戻った人、飛び級をした人、教師として教えながら大学に通っている人などがいました。同じ大学生という区切りの中でも、各人の目的意識やライフステージは微妙に異なっていて、尚且つそれが当たり前になっていました。加えて、みんな肩の力が抜けていて、自然体であることが良しとされているように感じました。当初は、日本の大学生とは大きく異なる状況に戸惑いましたが、順応しました。

留学前の自分が持っていた固定観念や「こうあらなくてはいけない」という前提を崩されたように感じます。

留学中の後悔

留学中の後悔といえば、異国で働く経験をしなかったことです。英語でコミュニケーションを取る機会が増えたり、経験を積むことができるというメリット以上に、現地通貨で現金収入を得られるというのは大きかっただろうと思いません。ただでさえ日本に比べて割高&インフレしていく物価に加えて、日々弱くなっていく日本円をニュースで見るのはストレスフルでした。

私のような1年未満滞在の交換留学生はスウェーデン国内の銀行口座を開設できないのですが、なんとかして働く道を探せばよかったと今は思います。



(友人の Neo と)

留学への総括

「こうあらなくてはいけない」という前提を崩されたことが良かったのかどうかは今のところよくわかりません。留学の当初の目的は、大まかに言えば、「バリバリ仕事をするために国際的な経験や英語へのコンプレックス減らしたい」というものだったと思います。

ただ、スウェーデンの中で色々な価値観に晒されすぎてそれを消化できていないような気もします。日本の就活をする上では、このあまりにも多様な価値観に晒されたことが良かったのかどうか、分かりかねます。また、「自分ができる側だ」という認識も何度も崩されました。惨めな気持ちになることも多くありました。なんとか留学から帰ってきたというのが正直なところです。中学時代の恩師の一人に「人間には二つの場所が必要だ。活動するところと帰ってくる場所(ホーム)だ」と言われました。その当時はあまり深い意味を感じとれなかったのですが、留学中はホームの重要性が身に沁みました。心が落ち着くような場所や人間関係を自分のベースとして作ることがいかに重要かが今ではわかります。それに気づけただけでも良かったかもしれません。

また、私の祖母清子と留学最後にスウェーデン・フィンランドの美しい夏を旅できたことも良い思い出となりました。あのような土地が世界のどこかに確かにあるのだと思うだけで、気持ちが少し安らかになります。

可愛げのある寮

加藤 弘人(経済学研究科修士2年)

私は2020年から始めた大学生活を2026年に終えることになります。それは長いようで短く、私にとっては本当に濃い6年間でした。この大学生活を一言で表すとすれば「多様」という言葉になるのではないか、というくらい様々な経験をして成長してきたという感覚があります。しかし、そのなかでも私を大きく変えてくれた経験の1つとして、将来話し続けるだろうと思う経験の1つがこのYMCA一橋寮での寮生活です。ここでは、寮生活で経験したことと絡めながらこの寮の好きなところについて書いてみたいと思います。

この寮は毎年新しい寮生が誕生しますし、所属する寮生は年度によって全く異なります。したがって私がいなかつたときがどうだったかはそこまで詳しく知らないのですが、少なくとも私が住んでいた2年間を念頭にしたいと思います。この寮の特徴をあえて3つ挙げるとするなら「愛」「自立」「可愛げ」なのではないかと私は思っています。

「愛」という面では、まずキリスト教の愛の概念を知っているというところから始まります。寮生の中にクリスチャンは数少ないですが、全員が最初福音書を1年かけて読んでおり、キリスト教の愛を知る機会が全員にあります。このことが、寮生活における寮生同士の関係に影響しているのではないかと私は思っています。例えば、私が先日インフルエンザにかかった時は、誰に強制される訳でもなく寮生が食料を届けてくれたり、お粥を作ってくれたりしました。部屋でそのあたたかいご飯を食べて1人で愛を感じていたわけですが、それはまさに見返りを求める無条件の愛ということができると思います。そのような好意を受けた人は、私も含め次誰かに何かしてあげようという気になると思います。そのような愛の広がりがまさに道徳の教材としてのキリスト教なのではないでしょうか。もちろん神への信仰がキリスト教の最も重要な部分であることは間違いないですが、日常の生活への教訓という意味合いもあると思っています。そのような愛を感じることができるのは、この寮の大きな特徴の1つだと考えています。

次に、「自立」という面は、寮生会議という話し合いの場において表現されていると思います。この寮は自治寮であり、寮内で起こる問題はすべて自分たちで考えて対処するのが基本なわけですが、それを実行しているのは実は本当にすごいことなのではないかと思っています。私が入寮したころには、もうある程度のルールが整備されていて、そのルールに照らし合わせて、あるいはたまに出てくるルールに載っていないことを新たに議論するというのがデフォルトになっていましたが、そのルールも最初から存在したわけではないはずです。長い歴史の中で先輩たちが議論を重ね、自分たちで寮を運営するために必要な事柄をこれだけ蓄積してきたということは、実は大変価値があることだと思います。もちろんすべてのルールを残しているわけではなく、必要に応じて取捨選択してきてはいるのですが、その歴史も大変興味深いものだと思います。ただし、毎週寮生会議で話し合わないといけない議題が出るほどに問題が絶えないという点は何とか改善をしていきたいところではあります。

最後に、「可愛げ」という面についてです。これは私がある程度学年が上の状態で入寮したからこそ感じることかもしません。しかし、私にはこの寮、そして寮生にはどうも可愛げがあるように感じられます。それは決して見た

目的な可愛さだけではありません。ここでいう可愛げとは、もう少し具体的にいうと人間味があふれていて気取っていない雰囲気のことです。寮の中で自分を完璧に見せる必要は全くないですし、各々の生活を自由に送っているその状態がまさに人間らしく、私はとても気に入っています。イベントごとのときにはみんなが純粋においしいご飯にありつき、楽しく語り合う、そういうところも素直で可愛げがあるところだと思います。人から応援される人というのはひたすらに頑張って努力している人だと思い込んでいましたが、この寮に来てからは、可愛げも応援される1つの要素なのではないかと思えるようになりました。卒業後も、可愛げのある後輩と話すために定期的に寮に帰ってきたいと思っています。

韓国研修旅行報告について

1. 韓国研修旅行概要と主な訪問先

- 2025年9月5日から9日、4泊5日の日程で韓国ソウル特別市を訪問し、ベンチャー企業2社、日系企業2社、韓国YMCA及び在韓日本大使館を訪問し、いずれの訪問先でも歓迎と歓待をうけ、大変充実した研修旅行を実施することができた。特に韓国YMCAに所属する梨花女子大及び延世大学の学生との交流会は楽しくまた若い世代として共通の話題で盛り上がった会合であったことをここに特に記載したい。
- また、9月7日の日曜日はメガチャーチの一つであるサラン教会での日曜礼拝を守り、午後は各人自由行動で市内観光を楽しむことができた。サラン教会は今回の訪問先であるイーランサーINCのCEOロイド・パーク氏が聖歌隊メンバーであり教会員であることから、教会での礼拝のご案内をして下さり、前日の夕食会と日曜日のランチ会をご招待くださいました。
- 今回の研修旅行では、如水会ソウル支部をご紹介下さった如水会事務局研修文化グループ伊藤様、また韓国YMCAをご紹介頂いた学生Yご担当福田様、在韓日本大使館をご紹介下さった山崎和之現国連大使、如水会ソウル支部幹事で三菱UFJ銀行ソウル支店副支店長高田様、当会OBであるNIDEC韓国代表取締役会長山崎学様ならびに夕食とランチをご招待くださいましたeLancer CEOロイド・パーク氏並びにベンジャミン投資会社会長McLord Seoung氏ら多くの方々のご支援とご協力に心より感謝申し上げます。これらの方々のご支援とご協力があったればこそ、充実した研修旅行となつたことに改めて感謝を申し上げたい。
- 最終的な日程表は次ページのとおりである。また、訪問先の面談記録と参加寮生の感想文を合わせてここにご記録する。

2. 訪問先面談記録

- ① McLord Seoung
- ② eLancer Inc
- ③ サラン教会
- ④ NIDECKOREA
- ⑤ 在韓日本大使館
- ⑥ 韓国YMCA
- ⑦ 三菱UFJ銀行ソウル支店

3. 参加者感想文

- ① 中田勇輔
- ② 山田圭一郎
- ③ 白川優太
- ④ 金賢
- ⑤ 瀧山恵輝
- ⑥ 吉田元喜

⑦ 北川 謙

日程及び主な訪問先					
	9月5日	9月6日	9月7日	9月8日	9月9日
	第1日(金)	第2日(土曜日)	第3日(日曜日)	第4日(月曜日)	第5日(火曜日)
午前		AM:11:00～PM2:00 EDN Global Ltd. President & CEO McLord B.J. Seoung ソウルクラブ 86, Jangchungdan-ro, Jung-gu, Seooul	ソッチョサラン教会礼拝	AM10:00～NIDEC 韓国訪問 ソウル市江南区テヘラ ナ路110 ケンブリッジ ビルディング20階	三菱UFJ銀行 ソウル 支店 高田 副支店 長 AM:10:～
ランチ		McLord Seoung 昼食会	ロイド氏招待ランチ	ランチ	インチョン空港でのランチ
午後			ソウル市内観光 京福宮、秘苑、明洞、シンサドン eLancer Inc. CEO Lloyd Park PM 4:00 eLancer Inc. LTD , Teheran-ro410, Guannamu-	PM 1:00～ 在韓国 日本大使館 西参事官 加藤専門員	帰国
				PM6:00～9:00 KOREA YMCA	
夜夕食会	成田発深夜便	eLancer Inc. Lloyd Park 招待Dinner	仁寺洞 焼肉	The National Council of YMCAs of Korea 夕食会	

訪問先面談記録

① McLord Seoung EDN Global Ltd. President&CEO

吉田元喜(経済学部4年)

今回お話を伺ったマクロードさんは、ソウル大学で国際関係論を学び、投資銀行業界でキャリアを積んだ後、現在はアンドマネジメントを中心に、特にバイオテクノロジー分野の企業を上場に導く仕事をされている方です。ビジネスと宗教、人生観を深く結びつけて語られる姿がとても印象的でした。

お話を冒頭では「これから人生で直面する多くのビジネスの中で大切なのは運命である」と強調されました。人は

体だけでなく魂と靈を持っており、体は一時的な「家」に過ぎないという説明はとても新鮮でした。魂は五感や直感を担い、靈は魂を生かす力を与えるものであるという整理は、自分自身をどう捉えるべきか改めて考えさせられました。聖書では人間は塵から作られ、神の息吹によって初めて生きる魂になったとされますが、この話を聞いて、生命とは単なる物質ではなく、靈的な次元を持つものなのだと実感しました。

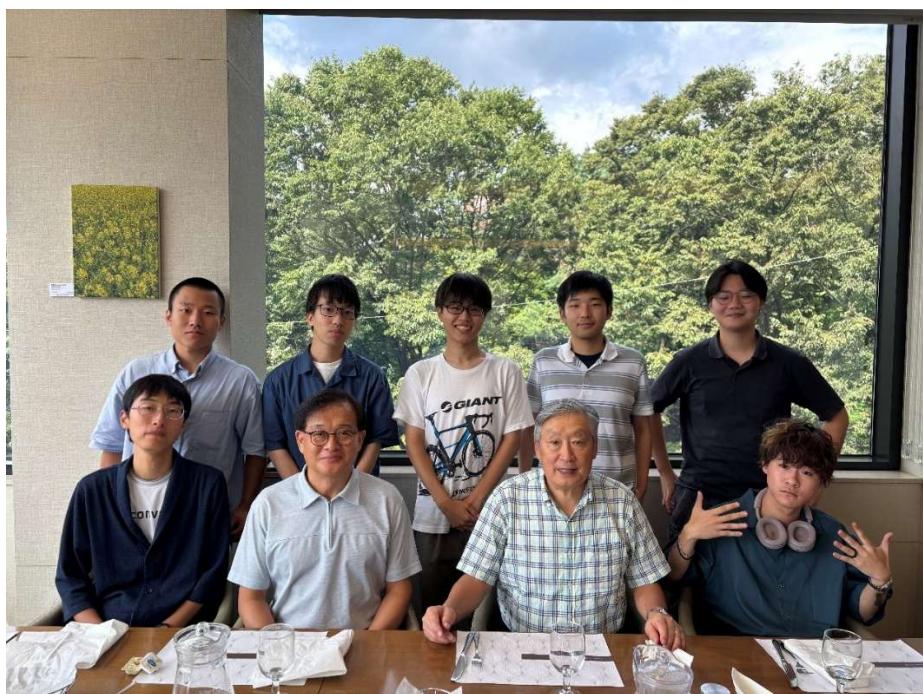
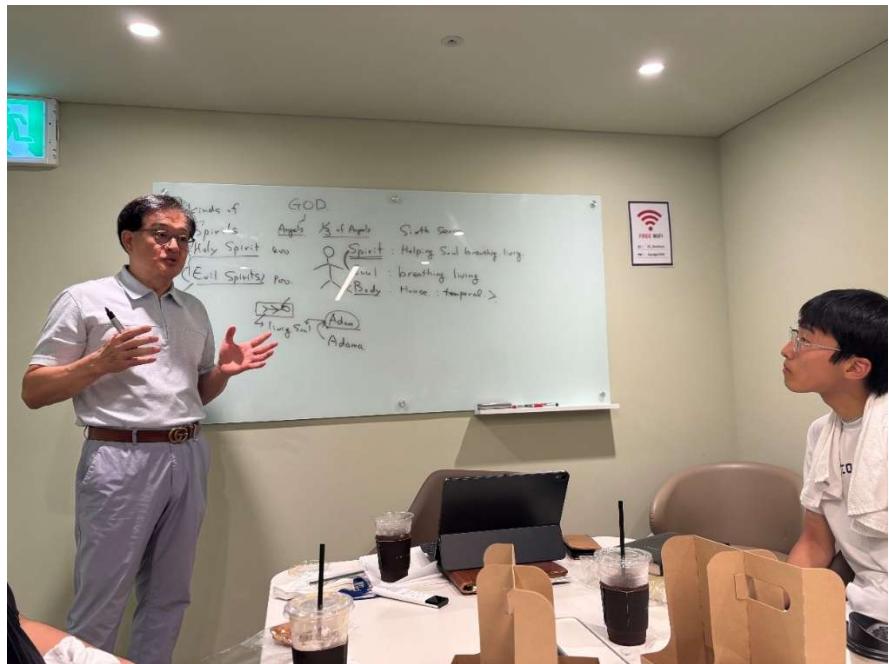
特に心に残ったのは、アダムが罪を犯したことで神から与えられた「栄光」を失い、飢えや病気、死といった苦しみが人類に訪れたという話です。神はその栄光を取り戻すためにイエス・キリストを人として地上に送り、十字架で人類の罪を贖ったという説明は、歴史的出来事ではなく宇宙全体の秩序を回復するための大事件であったと語られました。キリストの磔刑が「盗まれた栄光を取り戻す瞬間」であり、私たちは神の子として再び世界を治める権利を得たという考えは非常に力強いものでした。

マクロードさんは、義(righteousness)についても詳しく説明されました。かつては義は「行うべき行為」でしたが、十字架以後は「状態」として与えられるものであり、神を信じることで自分の中に完全な義が宿るという教えは非常に印象的でした。「モナリザに余計な線を足せば完全性が損なわれるのと同じで、義は付け足すのではなく信じるだけで良い」という例えは分かりやすく、心に残りました。また、「心を守りなさい、命の泉はここから湧き出る」という箴言を引用され、心の向きを常に神に向けることの大切さを説かれたことも印象的です。信仰と想像力(imagination)は密接に結びついており、よいことを思い描くことで人生の方向性も変わるというお話は、自分自身の行動にも活かせる学びだと感じました。

また、ビジネスについても具体的なアドバイスがありました。バイオファーマシーフィールドを選んだ理由は、社会的意義だけでなく収益性の高さにもあると率直に述べられており、宗教的価値観と現実的な投資判断を両立させていく点に説得力がありました。経済学を学ぶ意義についても「経済は希少性から始まる学問であり、私たちが欠乏を感じるのは当然だが、神に問いかけることでその不足を満たせる」という考え方を提示されました。この視点は、学問やキャリアの選択に迷った時に心の拠り所となると感じました。

最後に印象的だったのは、「神に問うことはより深く自分自身に問うことと同じだ」という理事長の言葉です。自己中心的になるのではなく、自分の心を神に向けることで、より良い選択ができるという考えは、将来の進路を考えるうえで大切にしたい指針だと思いました。

今回のお話は、単なる宗教講話ではなく、自分自身の存在の意味や心の向け方、ビジネスと信仰の関係、キャリア選択の姿勢まで幅広く考えさせられるものでした。心を整え、良い方向に想像力を働かせ、神とともに生きることで、これから的人生やビジネスの決断にも迷わず進んでいけるようにしたいと強く感じました。



マックロード氏とのランチ会 ソウルアメリカンクラブにて

② eLncer Inc CEO Lloyd Park

吉田 元喜(経済学部4年)

今回お話を伺ったロイド・パークさんは、25年以上にわたりフリーランスと企業をつなぐプラットフォーム「e-lancer」を運営してきた経営者です。韓国の名門私立大学を卒業後、スタンフォード大学で学び、帰国後に起業されたというキャリアは非常に印象的でした。現在は日本市場にも進出し、CEOとして事業を展開されています。

お話を聞く中で最も印象に残ったのは、「市場の非効率を見つけたらビジネスを始めるべき」という考え方です。韓国ではかつてトヨタの例のように、多重下請けによる仕事の分配が一般的で、中抜きによるコストが大きな問題でした。仕事をどんどん下に流すことで責任を回避する仕組みは安全ではあるものの、無駄が多く非効率的です。しかし近年では、企業が直接フリーランスと契約する動きが広がり、サムソンのような大企業も e-lancer を活用するようになつたといいます。パクさんは、日本市場もいずれ同じように変化し、こうした階層的な構造が崩れていくと予測していました。日本政府は 70 万人以上の IT 人材を確保する計画を掲げていますが、国内だけでは確保が難しいとされており、韓国から人材を送り出す計画があるというお話を非常に具体的で、現実味があると感じました。

さらに、ロイド・パークさんはマクロ経済の動向についても言及され、日本では賃金が上昇傾向にあるため、今後市場環境が改善すると述べていました。市場が拡大するスピードは不確実だが、以前よりは確実に良くなっていく、という前向きな見通しは、ビジネスにおけるリスク感覚の重要性を再認識させるものでした。

また、経営と信仰の関係についての話も非常に興味深いものでした。パクさんは、聖書の教えである「正直さ」を経営者としての重要な資質と位置づけており、議論を重ねることや、得た富を社会に還元することが大切だと語っていました。キリスト教徒はお金を嫌うべきという誤解に対して、アブラハムやヤコブのように神から豊かさを与えた人物を例に挙げ、「キリスト教徒こそ努力して富を得るべきであり、その富を社会に役立てるべきだ」という考えを強調していました。実際、会社では毎週ホームレスの人々に食事や衣服、薬を提供し、聖書を教える活動を続けているそうです。利益追求と社会貢献を同時に実現する姿勢は、これから企業経営においてますます重要になると感じました。

さらに、生成 AI の登場についても現実的な見方を示していました。AI が全てのコードを書くようになると市場への悪影響が大きい一方、AI は万能ではなく、完全に人間の仕事を代替するわけではないと冷静に分析していました。むしろ AI を活用するために新たなエンジニア需要が生まれる可能性があるとし、「市場全体ではむしろチャンスが増える」との見方を示されました。AI やノーコードの台頭を脅威ではなく、次のビジネスチャンスと捉える姿勢は非常に刺激的でした。

最後に、日本と韓国のビジネス文化の違いについての指摘も印象に残りました。日本の企业文化は時間をかけて堅実にものづくりをする点では優れているが、スピード感が求められる電子機器分野では競争力を失いつつあるというお話を耳が痛いものでした。一方で、日本の金融業あるいは製造業は依然として世界中に投資を行い、多くの配当を得ている強みもあると指摘され、今後どの分野に集中すべきかを考えさせられました。

今回の講話を通じて、私は「変化を恐れずに非効率を見抜き、行動することの大切さを学びました。世界の変化は非常に速く、日本がこのまま保守的な姿勢を続ければ取り残される危険があります。パクさんの言葉は、将来自分がビジネスの現場でどのように行動するべきか、どのような視点で市場を観察すべきかを考える大きなきっかけとなりました。



イーランサー本社にて

③ サラン教会

山田圭一郎(経済学部2年)

「教会」——その場所にあなたはどのような印象をお持ちだろうか。厳かな雰囲気のもとに取り仕切られる秘蹟の数々。神聖なる御靈に向かって捧げられる神秘的な讃美歌。あるいは古風でどこか貧しげな民家を連想する方もいるかもしれない。(カトリック教会が壮麗な造りであるのに対して、プロテスタント教会の多くは素朴な造りである) いずれにしても、伝統的で保守的なイメージを持たれている方が圧倒的多数ではなかろうか。ところが、これか

らお話しする韓国ソウルのサラン教会はそういうステレオタイプを大きく覆すほどに現代的な教会だった。ま
ず、建物の形態が日本とはまるきり異なっている。と言って中世ヨーロッパ的な大聖堂のような造りになっているわ
けでもない。一言で形容するなら、「ビル」だった。近頃のソウルには大手町に負けじとばかりに高層ビルが立ち並
んでいるわけだが、サラン教会はそのビル街に違和感なく林立していたのであった。しかも、ビルの中のフロアを
借りているのではなく、ビル全体がサラン教会の持ち物であるという。外観だけから判断したらここが教会だとは刹
那も考えないであろう現代建築の産物だった。

驚愕に値するのは外装だけではない。エスカレータに乗って地下へと降りた我々を待ち受けていたのは、収容人
数 5000 人を超える巨大な礼拝ホールだった。三階分の吹き抜けになっているホールが醸し出す開放的な空間
は圧巻という他ない。正面には 20 人ほどの教会員が集い、その傍らに控える 100 人規模の讃美歌隊とともに讃
美歌を熱唱していた。讃美歌と言っても、日本の教会で専ら歌われている伝統的な讃美歌とは曲調がまったく異
なる。KPOP に影響されたと思しき明るく軽快なメロディーはここがアイドルのコンサート会場かと錯覚させるほどに
現代的だった。

参加した学生の感想は大きく分けて次の二点に集約される。一点目は、あまりに現代的過ぎるスピリチュアルな要
素があまり感じられなかつたという違和感である。二点目は、5000 人以上もの人が所属する教会にもなると雰囲
気に流されているだけで心の底から神を信じていない人も紛れ込んでいるのではないかという疑念である。

最後に、これに対する私の個人的な見解を申し上げて終わりたい。まず、一点目に関しては私は特に違和感を
覚えなかつた。なぜなら、聖書には礼拝の形式を規定する文言はないからである。変えてはならないのは聖書が
語る神との契約という本質的な部分であつて、特に言及のない形式的な部分は変更しても構わないと考えるのが
妥当であろう。この観点で言えば、二点目については私は憂慮すべき問題だと思っている。いくら表面的に神を
賛美する素振りを見せていても、イエス＝キリストが我々の罪を贖うために十字架上で死なれたこと、天に上
りやがて再び地上に来られることを知らなければ、その人の信仰は虚しい。



④ NIDEC KOREA 山崎学代表取締役会長(当会 OB)

中田 勇輔(経済学部1年)

9月8日の午前中にニデック韓国株式会社を訪問し、1985年社会学部卒でYMCA寮の先輩でもあり、27年以上ソウルに駐在している山崎学代表取締役会長と、17年以上ソウルに駐在され、管理部長とSPMS営業部長を兼任されている諏佐顕司さまからお話を伺いました。

初めに、NIDEC韓国についての説明がありました。1999年12月に設立されたNIDEC韓国は、韓国のシリコンバレーと呼ばれ、道の両側に通信・IT系企業が軒を連ねるテヘラン路という大通りに面したビルの20階に事務所を置き、24名が勤務していること、そのうち日本からの駐在は3人だけだということなどを教えていただきました。また、NIDEC韓国が設立されてすぐの2000年の段階では、HDD用や光学ディスクドライブ用などのIT向けのモーターが売り上げの100%を占めていましたが、SSDやUSBメモリなどの登場のためにビジネスポートフォリオの転換をすすめ、現在は車向けや家電向けが85%を占めるまでになったこと、そこからの教訓として「どんな素晴らしい事業・製品でもいつかはピークアウトする。だからマーケティング能力は非常に重要だ」ということも教えていただきました。さらに将来の韓国市場は、「5つの大波」すなわち車の電動化、ロボットの拡張、家電などの省電力化、農業・物流の省人化、5G通信の本格化によって世界が変わるので、それに合わせた事業戦略を立てる必要がある、ということもおっしゃっていました。また、世界の消費電力の半分がモーターの消費電力であり、モーターの効率化を行うことで地球環境の改善をすることがNIDECのCSRであるということも教えていただきました。

続いて質疑応答となり、寮生全員の質問に答えて頂きました。「日本では意思決定に時間がかかるが、NIDECではどうしているのか?」という質問に、「昔は製造業の世界では「とにかく安いのが中国、とにかく早いのが韓国、技術力が高いのが日本」と言われていたが、大きく変わった。中国は政府の投資により技術力が無視できないほど高まり、安く、早い。早さだけでは勝てない。技術力優位性を発揮できる分野で勝負するしかない。それが昔はHDDだったが、今はデータセンターなどで用いる水冷モジュールであり、最優先で取り組んでいる。」とおっしゃっていたのが心に残りました。

⑤ 在韓国 日本大使館一等書記官 西 祐典氏

白川優太(経済学部2年)

今回、在韓日本大使館に勤務する西祐典氏を訪問し、日韓関係や韓国社会の実情について直接お話を伺う機会を得た。西氏は外務省職員として二度目の韓国勤務を経験しており、2015年の日韓慰安婦合意にも深く関わった人物である。その豊富な経験と知見をもとに語られる言葉は、日韓関係の複雑さと韓国社会のダイナミズムを理解するうえで大きな示唆を与えてくれた。

2015年慰安婦合意

西氏は2015年の日韓合意において、日本側の中心的な立場で関わった。当時、安倍総理は「後の世代に繰り

返し謝罪させることはしない」と明言しており、文言の一語一句に至るまで韓国側との間で徹底的な議論が交わされた。合意後は、自国議会の議員一人ひとりに説明を尽くし、政府としての重みを確保したという。この話から、国家間の合意形成の厳密さを知ることができた。

韓国政治の両極化

韓国社会の大きな特徴として、西氏は「政治の両極化」を指摘した。ここ10～20年で保守と進歩の対立が尖鋭化し、政権が交代するたびに政策が180度転換する傾向がある。前政権に対する激しい批判は常態化しており、政治的安定性を損なう要因となっている。他方で、現在の李在明大統領は右派・左派双方の象徴である「青」と「赤」を身につけ、社会の統合を目指す姿勢を見せているという。

反日感情と日韓関係

日韓関係を語る上で避けられないのが、反日感情の存在である。西氏によれば、韓国の政権にとって「反日」は支持率を回復させるための道具として利用されやすく、右派左派を問わず都合に応じて掲げられる。また、教育などを通じて国民に反日感情が刷り込まれており、「日本は歴史を真に反省していない」という認識が根強い。一方で、市民団体の力が強く、国家間の合意が覆されることもあるため、政府が合意を履行し続けることが難しい構造的問題も存在する。しかし近年では、若年層を中心に対日感情が改善しつつあるとの指摘もあり、世代間の認識の差異が今後の日韓関係に変化をもたらす可能性がある。

韓国経済の成長要因

韓国の急速な経済成長について、西氏は三つの要因を挙げた。第一に、大統領制によるトップダウンの迅速な意思決定。第二に、財閥の強力な産業支配力と政府との連携による効率的な開発。第三に、「早く早く」という文化に象徴されるトライ＆エラー型の推進力である。目標を定めたら完璧を待たずに走り出し、失敗を繰り返しながら成果を積み重ねる姿勢が、韓国の経済成長の原動力になったと考えられる。

韓国社会における格差

一方で、韓国社会には深刻な格差問題が存在する。都市格差としてはソウルへの一極集中が顕著であり、大学進学においても「ソウルの大学に入学してこそ評価される」という価値観が根付いている。そのため政府は世宗市への政治機能移転を進めているが、ソウル集中の構造は依然として強固である。また、教育格差も深刻であり、厳しい学歴社会の中で子供一人に月40～50万円もの教育費を投じる家庭も少なくない。これが家庭間格差を拡大させる要因となっている。

韓国社会とキリスト教

韓国社会におけるキリスト教について、西氏は興味深い見解を述べた。西氏によると、韓国人は世代を問わず、「暇だから」「悩みがあるから」と気軽に教会に足を運ぶ傾向があるという。こうした状況の背景として、土着信仰と

キリスト教の親和性が考えられる。韓国におけるキリスト教に対する受け入れられ方は、日本と大きく異なり興味深い要素である。

まとめ

西祐典氏との対話は、日韓関係の現在をよりリアルに捉える機会であり、今後の両国関係の行方を考えるうえで貴重な示唆を与えるものであった。外交の現場に立つ人々の経験と視点を知ることは、国際関係を学ぶ上で大きな意義を持つと言える。



⑥ 韓国 YMCA との交流を通じて学んだこと

瀧山恵輝(法学部3年)

韓国滞在4日目、私たちは現地YMCAの学生たちとの交流会に参加した。様々な大学から集まった10名ほどの学生と職員の方々が、温かく私たちを出迎えてくれた。自己紹介から始まった交流会は、お互いの大学やYMCAの活動について簡単なプレゼンテーションを行うことで、互いの背景を理解する貴重な時間となった。プレゼンテーション後は、彼らが用意してくれた本格的な韓国料理を囲んでの夕食会だ。テーブルを囲み、言葉の壁を越えて簡単な会話を楽しむ中で、緊張は次第に和らいでいった。食事を終えると、今回の交流のハイライトである「文化理解のためのワークショップ」が始まった。このワークショップは、あらかじめ用意された議題に沿って、各々が二つの選択肢から一つを選び、その理由について議論を深めるという形式で進められた。提示されたテーマは多岐にわたり、例えば親に求める姿や人生の決断の仕方、良いリーダー像といった、私たちの価値観の

根幹に触れるような問い合わせが続いた。

今回の交流を通じて、私にはいくつかの発見があった。一つ目は、韓国 YMCA の活動が、私が抱いていた「キリスト教青年会」というイメージとは大きく異なっていたことだ。日本で YMCA というと、私たち一橋 YMCA が毎週聖書研究を行っていることをアイデンティティの一つとして大切にしているように、キリスト教に基づく活動が中心にあるという漠然とした認識があったが、実際に交流した学生や職員のほとんどはクリスチヤンではなく、彼らの活動の主軸は、聖書的なメッセージを広めることよりも、むしろ社会奉仕や慈善活動、そして地域コミュニティへの貢献にあるということを知った。一人のクリスチヤンとして、この事実に少し寂しさを覚えたのも事実だ。一方で、特定の信仰を持たなくとも、YMCA が掲げる「社会奉仕」という理念に共感し、活動に参加しているという事実は、キリスト教が単なる宗教的な教義を超えて、人々の生活や社会の価値観の中に、すでに深く根付いていることの証ではないかと感じた。

二つ目の発見は、同世代の韓国学生であっても、必ずしも皆が英語に堪能であるとは限らない、ということだった。もちろん、ネイティブ並みに話せる学生も数名いたが、今回は特に「日韓の学生交流会」という会の特性もあってか、英語よりも日本語の方が得意な学生が多く、日本語で会話を交わす場面も多かった。私たちは、国際交流というと、まず「英語」が共通語として必要不可欠であると考えがちだ。しかし、この交流を通じて、私はその認識が全てではないことを痛感した。言語能力ももちろん重要だが、それ以上に、相手の文化や歴史を尊重し、互いの言葉を少しでも理解しようとする姿勢、そして何よりも「伝えたい」「分かり合いたい」という強い意志こそが、真のコミュニケーションの基盤なのだ。日本と韓国は、隣国として長い歴史を共にしてきた。今回の交流は、英語という「グローバルスタンダード」な言語を介する以前に、私たち自身が互いの言葉と文化を尊重し、直接関係性を築いていけるはずだという、ごく当たり前の、しかし非常に重要な事実を再認識させてくれた。

そして三つ目に、このワークショップで議論を交わす中で、日韓の同世代の間に、予想していたほどの価値観の大きな隔たりがないことに気づかされた。私たちは、時に「日本人」や「韓国人」といった国単位の大きな枠組みで物事を捉え、両国の歴史問題などを背景に、価値観も大きく異なると考えがちだ。しかし、今回の議論では、先述のような様々なトピックにおいて、日本と韓国の学生の間で意見が分かれることはほとんどなく、むしろ個人の考え方によるところが大きいと感じた。

日韓の間に存在する様々な問題にどう向き合うかという問い合わせに対しても、単に「国家」という大きな枠組みや「○○人」というラベリングで相手を判断するのではなく、まずは目の前にいる個人として対話し、相互理解を図ること。この小さな積み重ねこそが、複雑に絡み合った問題の解決の糸口を見つける第一歩になるような気がした。



⑦ 三菱 UFJ 銀行ソウル支店高田敏雄副支店長 金子健太郎支店長代理 北川諒(経済学部5年)

三菱 UFJ 銀行ソウル支店では、副支店長の高田様(98年経済卒)と金子様(16年経済卒)から、業務内容や韓国社会、進路選択、さらには異国で働くことの苦労ややりがいについて、約 1 時間にわたりお話を伺った。

まず印象的だったのは、取引先の変化についてである。かつては日系企業との取引が中心だったが、現在では韓国企業が 7 割を占めているという。外資系銀行としては HSBC や Standard Chartered に次ぐ存在感を持ち、City Bank や BNP パリバと競っているという話からは、ソウル支店が韓国の金融市场の中で確かな立ち位置を築いていることがうかがえた。

また、韓国の金融機関は財閥系企業と強いつながりを持ち優位に立ってきたものの、人件費高騰により国内工場が海外に移転しつつある中で、グローバル展開では遅れをとっているという現状も伺った。その点、アジアに広いネットワークを持つ三菱 UFJ には、韓国企業との関係をさらに広げる余地があるという。さらに、旧東京銀行時代から築かれてきたネットワークが現在の強みとなっていることを聞き、ビジネスにおける「歴史と継続性の力」を実感した。

韓国の商習慣についても興味深い指摘があった。細部を決め切る前に大枠が固まればすぐに走り出すスタイルは、日本の「慎重に準備してから始める」やり方とは大きく異なる。政治家がまず大きな方向性を打ち出し、そこか

ら一気に物事が進むという点も、スピード感のある社会の特徴として印象に残った。現代の変化の激しい環境では、この柔軟さが強みになっていると感じた。

さらに高田様からは、中国勤務の経験を踏まえて、日本人・韓国人・中国人の国民性の違いについても具体的にお話しいただいた。それぞれの特徴を理解せずに接するとビジネスの障害になり得るが、文化を尊重し、信頼関係を築けたときには特別な面白さがあるという言葉が心に残った。また、「上から目線ではなく、郷に入れば郷に従えの姿勢が大切」という言葉は、国際的な場で働くうえでの心構えとして深く印象づけられた。

進路選択についても示唆を得ることができた。お二人とも共通して「ご縁を大切にしてきた」と語っていたことが心に残った。また、「実際にその会社の人に会うことで、自分に合うかどうか分かる」という助言は、自分の進路を考えるうえで非常に参考になった。私自身も、今後のキャリア選択の場面では、情報だけで判断するのではなく、実際に人と会い、その雰囲気を感じながら決断していきたいと強く思った。

今回のお話を通じて、国際的なビジネスの現場で求められる柔軟さや文化理解の重要性を実感するとともに、自分の進路を考える上での具体的なヒントを得ることができた。



参加者感想文

経済学部1年 中田勇輔

僕にとって初めての海外旅行となった今回の海外研修は、日本と韓国の違いを感じるとともに、類似点を見つけること多かったです5日間でした。

初日の夜、飛行機で仁川空港に着いてタクシーに乗り、一番初めに感じたのは、道路の良さでした。片側4車線で広々としていて、120キロ以上出してもほとんど揺れない右側通行の道路でした。これは、空港内がハングルに満ちていたという(ある種当たり前の)最初の違いに次いで見つけた日本との相違点でした。一方で、タクシーの運転手が、オービスガイドを見てオービスの直前で減速すること繰り返していたのが、数日前に高校同期の車に乗せてもらった首都高のドライブを彷彿とさせるもので、非常に面白かったです。

ホテルは、バスタブがなく、シャワースペースがトイレと完全には仕切られていないためにトイレが濡れることを除けば、日本のビジネスホテルとほとんど変わらず、とても快適に過ごすことができました。

海外研修中、何度も乗ることになった地下鉄では、いつも相違点を見つけることができました。例えば、旋回バー式の自動改札機、広い車内、金属やプラスチックの座席、扉間の固定窓(日本の通勤電車はほとんどが開閉可能)、右側通行と左側通行が混在することなどを見つけましたが、その中でも軍服を着た人を何回も見かけたことが、(休戦中とはいえ)いまだに戦争中の国に来たことを思い出させられ、複雑な気持ちになりました。

日本と韓国の違いを特に感じたことは、道に何とも言えないにおいが充満していたことです。路地に入るとにおいを強く感じましたが、路地でなくとも、いわゆるビル街でないところではどこでも、このにおいを感じました。

このように相違点をあげることができるのは、相違点を除くほとんどが日本と似ているからであり、ビザが不要で駅や空港に日本語表示があることもあって、海外旅行の初心者に向いた場所だと言われる理由がよくわかりました。

今回の研修旅行では、7か所を訪問しました。マクロード氏との座談会では、キリスト教精神について教えて頂きましたが、英語力がないことと、入寮して半年もたっておらず聖書知識が不十分なものもあって、すべてを理解することができませんでした。むしろ昼食時の話し合いのほうが理解しやすく、興味深かったです。ロイド氏との座談会では、ロイド氏が僕を気遣ってはつきりと単純な語彙で話してくださったので、理解しやすかったです。スタートアップ企業の社長からお話を伺うのが初めてだったので、とても刺激的でした。サラン教会は、僕にとって初めての教会訪問でしたが、あらゆる規模が大きく、驚きました。壇上で歌っていた男の人の芝居がかった動きをよく覚えています。NIDEC韓国では、山崎さまが主に話して下さいましたが、韓国が直面する5つの大波の話は、日本にも適用できるお話であり、大変興味深かったです。「好きな仕事をするのもいいが、することになった仕事を好きになれ」と言っていただいたのが心に残っています。在韓日本大使館では、最近の韓国の政治や経済の状況、そして韓国とキリスト教のかかわりについて教えていただきました。韓国内で財閥と中小の格差、ソウルと地方の格差がともに開いているとも教えていただきました。韓国YMCAでは、韓国の大学生と、日韓の文化の違いを探

るために考え方の比較をしました。年が近い外国の方と長い時間話すことができ、非常に刺激的でした。日本語が話せる方が何人もいたのが印象に残っています。三菱UFJ銀行のソウル支店では、韓国における三菱UFJ銀行の概況を伺いました。高田さまは上海での駐在経験もあり、日中韓を比較したお話をしてください、非常に面白かったです。

キリスト教とビジネス(2025/09/06-07) 経済学部2年 山田圭一郎

海外研修の感想を執筆するにあたり、当初は全体の行程を時系列順に追って満遍なく言及する予定だった。しかしながら、私の構成力では一つひとつの内容が薄くなりかねないという危惧と他の学生と構成が被ると面白みに欠けるかもしれないという不安に駆られて断念した。代わりに、私の印象に特に残ったマクロード氏およびロイド氏との対談を取り上げ、キリスト教徒がビジネスに打ち込むことはできるのかというテーマで論じることにしたい。

結論から申し上げよう。私の答えは否である。すなわち、真のクリスチヤンであればビジネスとは距離を置かざるを得ないと私は考える。大前提として、新約聖書では「貧しさ」が強調されている。マタイ5章3節には「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです」とある。この「貧しさ」には経済的な側面が間違いなく含まれている。例えば、続く19,20節では「自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。(中略)自分の宝は、天にたくわえなさい」とある。また、24節には「あなたがたは、神にも仕え、また富にも仕えるということはできません」とある。これらはすべてイエスご自身が語られた御言葉であり、恣意的な解釈の余地は一切残されていない。利潤追求を第一目標とするビジネス活動が神の御思いに適わないのは明らかであろう。ところが、両氏はキリスト教精神とビジネスは両立可能だと主張する。以下、両氏がどのように自身のビジネスを正当化しているのかを要約したうえで、それに対する批判を展開する。

まず、マクロード氏は靈的な世界と現実的な世界を徹底的に分離することで自身のビジネス活動を擁護している。そのうえで、悪霊に唆されて罪を犯しそうになったとしてもイエス=キリストの名によって祈ることで聖霊に導かれて神の御心の通りに歩むことができる、と彼は主張する。この後半の考えは自体は極めて聖書的であり(ローマ6章1、2節参照)私も支持するところである。しかし、前半の考えは聖書的ではない。聖書が語るのは靈と現実の対比ではなく靈と肉との対比である(ローマ7章参照)。しかも、クリスチヤンとはパウロに言わせれば「肉に従って歩まず、御靈に従って歩む私たち(ローマ8章4節)」のことである。このことから、真のクリスチヤンは現実的な世界においても御靈に従って歩むことがわかる。靈的な世界で神に祈っていれば現実的な世界では利潤を追求しても問題という主張はここに破綻している。

次に、ロイド氏の主張に移ろう。彼のそれは単純で聖書は財産を築き豊かになることを推奨しているというものだ。この時点でイエス=キリストの御言葉を完全に無視しており聖書的な主張でないことは明らかである。だが、彼は自身の主張を援用する聖書箇所を持ち合わせていた。彼曰く、創世記ではアブラハムやイサクなど神に愛された人物は経済的に非常に豊かであった。故に、我々は彼らを見習って経済的に豊かになるように努めなければならない、と。

我田引水ここに極まれりと言わざるを得ない。大前提として、アブラハムは自ら豊かになることを望んだのではない。主なる神が「あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう(創世記12章2節)」と約束してくださったのである。アブラハムはお金を稼ごうと努力したから豊かになったのではない。むしろ主のご計画の中で祝福されることが定められたのである。アブラハムにあったのはただ主への信頼だった。事実、22章において彼は主の命令に従って愛する一人息子イサクを神への生贋として捧げようとした。愛息子さえ惜しまない彼が物質的な豊かさなどにどうして執着するだろうか。

両氏に共通して言いたいのは、聖書を自分の都合のいいように読んではならないということである。クリスチャンになるということは、神の御言葉にのみ従って歩む選択をするということである。言い換れば、自分中心の生き方ではなく神中心の生き方ができるように神に作り変えていただくということだ。自分の欲望を擁護するために聖書を引用するなら、それはもはや別の宗教ということになってしまう。(もっとも、別の宗教を否定しているわけではないのでそこで誤解のないように) かくいう私は未だにクリスチャンになることができず罪人として苦しんでいる。肉から出る欲望(金銭的欲望、情欲、嫉妬、自己実現欲など挙げればきりがない)が邪魔をして、主に心を定めることができないのだ。主に背いて現世を楽しむ代わりに永遠の苦しみを受けるか、現世を捨てて神とともにエルサレムで永遠に暮らすか。今回の海外研修を通して、私の悩みは深まる一方であった。

初めての海外渡航 経済学部2年 白川優太

私は今回の海外研修が初の海外渡航であった。私は元々海外研修には参加するつもりは無かった。英語の自信は無く、そもそも海外にもあまり興味が無かったからである。ただ親戚に大学生の間に一度でいいから海外に行くべき、興味が無い場合は行ってから判断すればいい、と言われたため参加することにした。

初めて日本を出て韓国について第一印象は一切の文字情報が読み取れないという不安感であった。幸い今回は同行者のいたため焦りはなかったが、単独行動はできないだろうという恐怖はあった。

二日目に訪れたマクロード氏とロイド氏の所では自分の英語力の無さを非常に後悔することになった。私は今まで英語による会話というものを避けて生きてきた。そんな私には彼らの話に参加することはできずなんとなく話題をつかむことで限界であった。それでもマクロード氏とロイド氏のそれぞれ異なるキリスト教観を感じ取れたことは幸いであった。

二日目の夜は寮生三人とソウル市街の散策に出た。そこで感じたことは、ここは日本とはあまり変わらないかもしれないということだった。相変わらず文字情報は全く読み取れないが、逆に言えばそれ以外に大きな違いは感じなかった。ここで一緒に散策を行った四人は誰も韓国語がしゃべれなかったがそれでも街中で行動をできたという事実は、その後の自分に少し自信を与えてくれた。

三日目に訪れたサラン教会では韓国人の宗教観というものを肌で感じることができた。コンサートホールのような大きな礼拝堂でポップスのような賛美歌を大勢で熱唱しながら祈りを捧げる空間は自分が礼拝に来ていることを忘れさせるようなものであった。そして「宗教」というものにこのように向き合っていく韓国人の宗教観には、日本人

とは一線を画す違いを感じた。もし日本でこのような礼拝が行われていたら、外部の人からは怪しい集団だと指を指されるのではと思った。これが受け入れられる韓国の宗教的な土壤には非常に興味が湧いた。

三日目の午後は自由行動であったため単独行動をしてみることにした。初日に抱えていた不安感はこのときもまだあったが、もう少し自分の足で行動してみたいという冒険心が勝った。言葉が分からず世界をスマホだけを頼りに電車を乗り継いで回るのは、慣れている人からしたら簡単かもしれないが、自分にとってはとても刺激的な体験であった。

四日目に訪れたニーデック、大使館では日本語が通じる安心感で自分にかかっていた緊張を少し解くことができた。特にニーデックでは自分の今後の進路にも関わる貴重な話を聞くことができた。そしてその後に訪れた韓国YMCAでは韓国の同世代の学生との交流が行われた。この交流では、彼らも私たちと何ら変わらない学生だという事を感じた。会話中に見せる表情の機微や仕草は我々がするものと同じであったし考えていることもそこまで違ひはないということを知ることができた。

最終日に訪れた三菱UFJ銀行では前日のニーデックに続き就活において非常に役に立つお話を聞くことができた。特に、ニーデック、UFJどちらの人も業界ではなくそこで働く人に注目して仕事を選んでいたというお話は参考になった。

私はこの五日間で韓国は日本と大きくは変わらないという事を学んだ。また、そうした場所を初めての海外渡航で訪れられた事は幸運であったと思った。そして、研修旅行に行く前よりも海外に対するハードルは自分の中で大きく下がった。これからは今まで避けてきた他国の人との交流ももう少し積極的に行っていきたいと思う。

経済学部3年 金 賢

今回、海外研修に参加する予定ではなかったが、特別にかかる自費を低くしてくださるということで、せっかくなので参加することにした。自身が韓国人であることも一つ今回の研修に参加する理由になったと考える。韓国自体は、自身が生まれてから済州島に3年間住んでいただけでありほとんど記憶はない。しかし本籍地がソウルであり安東の金氏ということもあり今回、ソウルに行けることに嬉しい気持ちがあった。飛行機に乗ること自体もほとんど初めて良い経験になったと再度感じている。私は少し韓国語が話せるが、このレベルでもそんなに不便を感じることなく生活できたので、たとえば英語を使う時もそんなに難しく考えずに自身の考えを伝えることが可能なのではと今回の研修で感じた。韓国に来てみて感じたのは、日本とほぼ大差ない都市空間だなということだった。郊外でも建物はきちんとしているし、道路の舗装も綺麗、中心部には高い建物がありまったく異国を感じさせない土地であった。唯一違うなと感じたのはタクシーの料金くらいで、韓国ではずいぶん安い印象があった。あらためて感じたのは旅行に行くとかなりの確率で体調が悪くなり観光ができないことと、睡眠時のデリケートさであった。小中で参加した修学旅行でも謎の病にかかり十分に楽しめなかつたり、サッカーの選抜で遠征した時も熱を出してあまり動けなかつたのがフラッシュバックした、思うに遠くの地に行くことが自身の中でかなりのストレスになっている

のではと考える。また睡眠時には隣の寮生がいびきをしておりそれが気になってしまいあまりよく寝られない4日間であった。

人々、私は海外に行きたい気持ちはまったくなく、むしろ日本から出たくないという思考の持ち主である。それは特別な理由があるとかはないが、なんとなく自身が在日コミュニティーで育ったことや、育ってきた埼玉の川口が外国人でいっぱいであり、よくないイメージがついているのではと考えている。今回の初とも言える海外への渡航を経験しても、いまだにその考えは変わっていない。それは韓国がいい意味でも悪い意味でも日本と近く所謂“海外に来たぞー”みたいな感覚があまりなかったことも原因かもしれない。人々人混みがある場所は得意ではなく、その特性上、観光という行為に向いていないのかもしれない。とにかく日本での暮らしが自信にとっての完成形になってしまっているので、自身から海外に出向くことは、おそらく今後ないだろう。いい意味でも悪い意味でも、海外への渡航という考えに終止符を打ってくれた、今回の海外研修であった。

法学部3年 瀧山恵輝

今回の韓国研修は、私にとって単なる海外旅行や語学学習の機会にとどまらない、非常に参加する意義のあるものだったと強く感じている。これまでボランティアや留学といった形で渡航したネパール、インドネシア、アメリカの三ヵ国では、街並み、人種、気候、衛生環境、食事など、あらゆる面で日本との大きな違いを感じてきた。しかし、四ヵ国目となる韓国では、まるで日本の都市を歩いているかのような既視感を覚え、文化的な親近感を感じながら滞在することができた。

一方で、活気に満ちたソウルの街並みを目の当たりにし、日本を凌駕する経済成長を肌で感じた。空にそびえ立つ高層ビル群、大型スクリーンがまばゆく光る夜の街、そして最新の電気自動車が四車線道路をスムーズに流れる光景は、韓国の人一人当たりGDPが既に日本を上回っているという統計の事実を実感させるものだった。しかし、その華やかさの裏側には、経済発展に伴う歪みや社会問題も存在していることを同時に知った。現地のIT企業や日本企業を訪問し、様々な話を伺う中で、財閥の強大化に伴う中小企業の空洞化、ソウルへの人口の一極集中、そして社会福祉制度の未熟さといった課題が、韓国社会に深い影を落としていることを実感した。

また、日本大使館を訪問した際には、今なお根深く残る日韓問題について考えさせられた。政府間の交渉の難しさに加え、たとえ外交上の課題が解決したとしても、国民感情としての問題が依然として残るという複雑さを痛感した。これらは一朝一夕には解決し得ない課題であると同時に、今後の両国関係を考える上で避けて通れない問題であると感じた。

しかし、今回の研修で最も大きな収穫となったのは、このような社会問題や歴史的背景を越えた、人々との直接的な交流だった。韓国YMCAで出会った学生たち、私たちを温かく引率してくださったマクロード氏、ロイド氏、そして街中で接した多くの韓国人の方々は、親切でホスピタリティにあふれており、日本への好意を示してくれる場面も少なくなかった。日本では韓国の反目的な側面が強調され、インターネット上でも否定的な意見を目にすることが多いが、現実に触れた韓国の姿はそうしたイメージとは大きく異なっていた。直接韓国の人々と交流した

経験は、私が抱いていた先入観を良い意味で覆し、異文化理解の本当の奥深さを教えてくれた。国籍や言語、宗教といった大きな枠組みで相手を判断するのではなく、目の前の個人と向き合うこと。この姿勢こそが、グローバル社会を生きる上で最も大切なことだと痛感した。メディアや SNS、教科書を通してしか知り得なかった韓国の文化や社会、そして人々の価値観に、自分の肌で触れることができた今回の研修は、私にとって大きな財産となった。文化の隔たりや偏見を超えて、隣国として日韓がともに発展していくことを心から願っている。

学経済学部 4 年 吉田元喜

私にとって通算 2 度目の YMCA 寮海外研修として、人生で初めて韓国を訪ねることができました。はじめに、この貴重な経験を計画してくださった齋藤理事長および理事会の皆様、ご支援いただいた OB 会・如水会の皆様に感謝を申し上げます。

私が YMCA 寮の公式行事として海外研修に参加したのは昨年度のインドネシア訪問以来でしたが、やはり一学生として旅行に行くのとは全く違った経験ができるのが最大の魅力だと思います。私は一橋大学経済学部 GLP に参加しており、そのプログラムの一環として 2 年時に 10 日間の短期調査で中国に赴いて大学や企業大使館で話を伺いました。今回の YMCA 寮の研修はその経験と比較しても学びの面では決して劣るものではないと感じました。齋藤理事長の広い人脈のおかげで、大使館や三菱 UFJ 銀行ソウル支店、韓国 NIDEC などの大企業、さらに理事長と親しい経営者の会社でお話を伺うことができました。特に後者の方々とは食事を共にするなど近しい交流をさせていただき、人柄に触れる機会も多く、これは大学の留学制度では得られなかつた経験でした。

また、YMCA 寮の海外研修だからこそ得られたキリスト教に関する学びも多くありました。メガチャーチのサラン教会などはその大きさに圧倒されつつも観光でも訪れるることは可能でしょうが、キリスト教徒であると同時に会社経営者として金を稼ぐことに対してどのように考えているかを実際に本人に話を聞くことや、韓国の YMCA 団体との交流はやはり一橋 YMCA の一員であるという恵まれた環境があるからこそ得られた希少な経験であったと考えています。将来自分がキリスト教徒にならなかつた場合一生触れることがなかつた経験を積めたことは、寮に所属したことによって得られた一番の財産かもしれません。

韓国について感じたことですが、日本に似ている部分も多い一方でやはり違いもありました。昨年ロンドンに留学してからは旅行先の街並みを日本と比べるのが好きなのですが、ソウルの街並みは日本に非常に近い印象を受けました。感覚的には東京よりも以前住んでいた広島に近いように感じました。発展した中心街がある一方で裏には少し寂れた建物も残っていて、再開発が全域に行き届いていない分、逆に親しみやすさもありました。

歩いていてまず感じたのは若者の多さです。韓国は日本以上に急速に高齢化していると聞いていたので、ソウルに若者が集中して地方にはほとんどいないのではと少し心配になるほどでした。さらに、国立で暮らしている自分に馴染みがなかつたこととして韓国の若者や街全体が深夜にかけてどんどん活気づいていくことでした。その点は日本より欧米に近いと感じました。

メガチャーチについては壇上で数十人の若者がリズムに乗せて聖歌を歌い、オーケストラや聖歌隊による合唱も

あり、日本の教会とは全く違う印象でした。説教も小道具を準備して造り込まれており、大きな労力をかけていると感じました。他に印象的だったのは韓国 YMCA での交流会です。日本人と韓国人の思考の違いをテーマに、個人主義か集団主義かといった質問に答えながらグループで話し合いました。特に面白いと思ったのは、韓国人にとって友人とそれ以外の差が大きいことです。私はよほど親しい友達でなければ気を遣いますし、過激な意見は控えます。しかし韓国では友人と認めれば家族に近いレベルで何でも話せると言い、自分をさらけ出せる関係が当たり前にあることに羨ましさを感じました。

さて、色々と散らかってしまいましたがこのあたりで締めようと思います。帰国前最後の夜、韓国 YMCA からの帰りに小腹が空いたということで皆で居酒屋に入り、吹き抜けの 2 階から韓国の街を見下ろしてビールを飲んでいた時に私は海外研修の終わりを感じるとともに唯一来年度の海外研修に参加できないことを自覚し自分の寮生活の終わりを感じました。自分の寮生活はすでに終着に向かうのみですが、いまだに半年ほどの時間は残されています。この時間をどのように使うのか、寮に対して返せるものはあるのか、予定もそれほどない 4 年生の後期はそんなことを考えながら過ごそうと思います。

韓国海外研修を振り返って 経済学部 4 年 北川諒

韓国海外研修を振り返るにあたり、訪問先へのアポイントメントや、移動・食事の場での通訳など、多方面でご尽力くださった齋藤金義理事長に心より感謝申し上げたい。

今回の研修では、投資家であり敬虔なクリスチヤンである McLord 氏、エンジニア派遣サービスを経営するロイド氏、サラン教会、韓国 Nidec、在韓日本大使館、韓国 YMCA、そして三菱 UFJ ソウル支店を訪問し、韓国の社会・経済・文化、さらには韓国におけるキリスト教の位置づけについて考える貴重な機会を得た。

2 年ぶりに再会した McLord 氏からは、その紳士的な人柄と日本への熱い想いに深く感銘を受けた。土砂降りの中で始まった面会も、帰路にはソウルの青空が広がり、まさに心も晴れ渡る思いだった。説教を通じて「主と自分の間に介在する Spirit を意識すること」の大切さを学んだ。また、「人生は投資のようなもので、タイミングが重要だ」という言葉を胸に刻みたい。

ロイド氏からは、20 年以上の経営経験に裏打ちされたリアリズムに徹した視点と、クリスチヤンとしての快活さが同居する姿を見た。スタンフォードでの経験を背景にした流暢な英語での国際感覚あふれる話しぶりは、私の中で「韓国のビジネスエリート像」として強く印象づけられた。

そのロイド氏と共に訪れたサラン教会での日曜礼拝は、私のキリスト教観を大きく揺さぶった。聖歌隊とオーケストラに加えて、壇上での合唱団と、若者によるドラム演奏など、日本や欧州で目にしてきた礼拝とは全く異なる様子が広がっていた。会場全体が音楽に呼応して、時には手を大きく振りながら、ホール全体が揺れる姿に圧倒された。また、韓国の人々の感情表現の豊かさにも驚かされた。私の勝手なイメージでは、教会は心を静めて個人の内で祈る場所であると考えていた。しかし、喜怒哀楽を素直に出し、同朋と共に礼拝する姿があった。さらに、特に若者が自然に教会に集う姿には衝撃を受けた。そこから、韓国社会においては、日常の延長線上に教会があ

ることを認識した。

韓国 Nidec では山崎様から、韓国経済の飛躍を支えた要因として、財閥の存在、**玕利玕利**(ハリハリ)文化に象徴されるスピード感、そしてハングリー精神を挙げていただいた。また、Nidec が時代を先読みして進化してきたのか日本のモノづくり技術の底堅さについてお話を伺った。山崎様の生き生きとした語り口から「ものづくりの面白さ」に触ることができ、自らの進路選択において製造業を視野に入れたいと考えるきっかけとなった。

在韓日本大使館では、西様から韓国の社会・経済・宗教に関する幅広いお話を伺った。特に、日本と韓国が AI やバイオヘルスの分野で協力していく必要性があるとのお話に強く共感した。イ・ジェミョン大統領が歴史問題を一旦脇に置き、未来志向で協力を模索している姿勢に触れ、両国が持つ強みを活かし合い、新たな時代を切り開いていく可能性を感じた。

研修を通じて最も印象に残ったのは、ソウルの若者の姿である。訪問前は、過度な競争で疲弊した若者が多いのではと予想していたが、実際には目に輝きを宿し、若さを楽しもうとするエネルギーを感じた。もちろん裕福な層に偏った見方かもしれないが、30 年間で GDP を 6 倍に伸ばした韓国のダイナミズムは、日本の停滞感と対照的に映った。韓国 YMCA の若者との交流を通じては、文化や習慣の共通点を再認識すると同時に、彼らの真心のこもった親切さに触ることができた。

韓国社会にも格差や人口減少といった課題は山積している。しかし、日本と韓国がそれぞれの強みを持ち寄り、協力しながら世界の中でプレゼンスを高めていくことができれば、両国の未来はより明るいものになるだろう。今回の研修は、そうした未来を自分自身がどう担っていけるかを考える大きな契機となった。





会計報告

- 今回の研修旅行の総費用は、合計で 768,281 円、一人当たり 109.754 円であった。内訳は航空券が 269 千円、ホテル 218 千円、現地での食事費用 113 千円、現地でのタクシーや地下鉄など移動交通費と SIM カードなどの通信費交通費 74 千円、訪問先6先への手土産と留守番の寮生への手土産 35 千円、現地での観光施設入場料などのその他費用 57 千円である。
- 航空券については、LCC のジンエアを利用し、当初一人3万円強の見込みであったが、参加者1名の名前がパスポートの名前と不一致であることに旅行直前に気が付き、航空券を取り直す不手際があり、そのため多少高くなつたことは、大変申し訳ないことであった。
- 現地での食事は、6日の夕食と7日のランチはイーランサーの招待があり、8日の韓国 YMCA も先方の招待であったが、先方も学生中心の組織であったので、当方から1万円相当の寄付金を行い、食事代の一部を負担した。
- しかし、ソウルでの市内の移動は地下鉄を利用したので、その移動費用は大変安く、またソウルの地下鉄は便利であった。また、仁川空港とホテルの移動は、荷物があったこと、到着日は深夜であったこと出発日はその直前まで面談があり、時間の余裕が少なかった事情により、タクシー2台を利用したが、仁川空港とソウル市内は距離にして約50キロあったにもかかわらず、片道7千円～8千円とソウルのタクシー費用は極めて安かつたと言える。

航空券	269,119	38,446
宿泊ホテル費用(4泊、朝食付き)	218,866	31,267
食事費用	113,462	16,209
通信交通費(地下鉄、タクシー)	74,261	10,609
お土産	35,339	5,048
その他雑費	57,234	8,176
合計	768,281	109,754

➤ 費用の明細は別添のエクセルシートをご参照されたい。また、領収証も別添のとおりである。

以上

寮祭報告

2025年10月25日(土曜日)恒例の寮祭が開催された。午前中は平成17年卒業トヨタ自動車勤務の萩原裕輔氏の講演会があり、その後昼食は焼肉大会をホールで開催した。

講演会記録

報告とりまとめ 山田圭一郎(経済学部2年)

2025年度の寮祭では2005年卒の萩原裕輔氏より「自動車産業のBEVシフト」というテーマでご講演いただいた。萩原兄は一橋大学商学部卒業後にトヨタ自動車に入社され、商品を切り替える際の仕様・販促・台数・デザインなどの方向性を決定するお仕事をされていた。そのご経験をもとに近年ホットな話題である脱ガソリン車について実務的な観点からご説明いただいた次第である。講演会で使用されたスライドの構成に沿って、①マルチパスウェイ戦略、②各国の自動車市場、③トヨタのBEVシフト認識、④学生からの質問への回答という段落構成でまとめることにする。

① マルチパスウェイ戦略

講演の冒頭では、まずトヨタが掲げる「マルチパスウェイ戦略」について説明があった。これは、各国のエネルギー事情や顧客のニーズの違いに対応するため、電動化車両の多様な選択肢を提供するという考え方である。トヨタは一律にBEV(Battery Electric Vehicle、電気自動車)への全面移行を進めるのではなく、地域ごとの環境やインフラ整備状況に応じて、複数の技術を並行して開発・投入している。その背景には、世界の全市場で同じペースで電動化を進めることができないという認識がある。

現在トヨタが展開する電動車には、ハイブリッド車(HEV)、プラグインハイブリッド車(PHEV)、バッテリーEV(BEV)、燃料電池車(FCEV)がある。HEVはプリウスに代表される方式で、エンジンとモーターを併用し燃費を高める。PHEVは外部充電が可能なハイブリッド車であり、バッテリー容量を大きくすることで短距離は電力のみで走行できる。BEVはガソリンを一切使わず、電力のみで駆動する車である。サクラ(同級車)などの事例を挙げながら、EV専用設計による構造上の利点や課題を説明した。FCEVは水素をエネルギー源とし、水素を燃料電池で電気に変換してモーターを回す。トヨタのミライがその代表例である。

さらに、水素燃焼エンジン車(H₂車)にも触れられた。これは水素を燃料として燃焼させ、従来の内燃機関を活かしながら CO₂排出を抑える技術である。しかし水素は非常に燃えやすく、扱いが難しいという課題がある。

② 各国の自動車市場

次に、各国・各地域における自動車市場の特徴について具体的な説明がなされた。まずヨーロッパでは、政策的に BEV の普及が強く推進されている。環境意識の高まりとともに、販売台数の多くが電気自動車となっており、充電インフラの整備も進んでいる。特にノルウェーでは BEV 比率が 80% を超えるという先進的な事例が紹介された。

アジア地域では、国による差が大きい。中国は国家戦略として電動化を進めており、政府補助金の後押しもあって BEV の普及が急速に進展している。BYD などの新興メーカーが台頭しており、既存メーカーも強い競争にさらされている。インドではまだインフラ整備が十分ではないものの、今後急速に成長する市場と見込まれている。東南アジア諸国も同様に、充電設備の不足や電力供給体制の問題があり、当面は HEV が現実的な選択肢とされている。

北米市場は大排気量車の人気が根強く、電動化の進展は比較的ゆるやかである。テスラのような先行メーカーは存在するが、消費者層全体の移行には時間がかかる。こうした状況を踏まえると、トヨタが世界的に一律の戦略を取らない理由が理解できる。つまり、地域ごとのインフラ整備や消費者の購買力、政府の政策を総合的に見極めながら、最適な電動化戦略を選択しているのである。

③ トヨタの BEV シフト認識

講演の最後に、トヨタが BEV シフトをどのように捉えているかについて説明があった。萩原兄はまず、「トヨタの業績は現在好調である」と述べた。販売台数、利益率ともに過去最高水準にあり、世界的な自動車市場の中でも強い競争力を維持している。しかし同時に、「この好調が永遠に続くとは限らない」という強い危機感を社内が共有していることを強調した。

その背景には、今後の技術革新が従来の延長線上では測れない速度で進む可能性があるという認識がある。特に AI やロボティクスの発展により、工場の人間労働が急速に機械に置き換えられていく「爆発的な転換」が起こるのではないかという警戒感が語られた。これまでトヨタは「人が働く工場」を大切にし、技能伝承や現場改善を通じて品質を高めてきたが、もし製造現場のオートメーション化が一気に進めば、従来の強みが失われるおそれもある。

特に、電動化・自動運転・AI 生産といった複合的な変化が一度に起こると、産業構造そのものが塗り替えられる可能性がある。こうした「パラダイムシフト」が目前に迫る中で、トヨタは慎重かつ戦略的に技術転換を進めている。

④ 学生からの質問と講師の回答

講演の後、学生から日本の補助金政策に関する質問がなされた。これに対し萩原兄は、日本政府の補助金政策について「対象が限定的である」という認識を示した。具体的には、商用車など一部の車種は補助の対象外であり、政府が大規模な補助で市場全体を一気に BEV 化しようという姿勢にはなっていないという点を指摘した。講師は、バッテリー価格が十分に下がらない限り、政府が恒常的に大きな補助金を出し続けることは難しく、現時

点では税制や補助の設計によって実効的な普及を図ることに限界があるとの見解を示した。要するに、日本の補助策は万能の手段ではなく、補助のあり方や金額次第で普及スピードに大きな差が出る、という現実的な説明であった。

続いて、インターネット上で目にする「トヨタはハイブリッド技術で圧倒的だから、欧州メーカーはハイブリッドでは勝てないため BEV で勝負している」という趣旨の記事について齋藤理事長から問い合わせた。これに対して萩原兄は、その単純化された見方には注意が必要だと答えた。萩原兄によれば、確かにトヨタはハイブリッド技術に強みを持っているが、欧州メーカーが BEV へ傾いた背景には、各国の規制や政策の違いが大きく影響しているという点を強調した。つまり「欧州のメーカーが BEV を選んだのは、トヨタにハイブリッドで勝てないから」という一因だけで説明できるわけではなく、環境規制の厳格さや市場の要求、インフラ整備状況といった外的条件が欧州での戦略決定を左右している、というのが萩原兄の見解である。兄は、インターネット記事の短絡的な結論よりも、各社の技術選択は規制・インフラ・消費者ニーズといった複合要因によって決まる点を強調して回答を締めくくった。

秋季修養会

2025年11月15日～17日の日程で、京都府宇治市郊外にあるカルメル修道会宇治黙想の家において秋季修養会を開催した。参加者は4年生見定君と2年生花田君、三浦君の3名と少なかったが、修道院長中川博道神父様の講話など充実した修養会であった。

一橋大学基督教青年会 秋季修養会 2025年11月15日(土曜日)～17日(月曜日)			
日時	1日目	2日目	3日目
午前	YMCA一橋寮 午前8時出発	起床:6時	起床 7:00
		8時半 朝食	
		9時半 日曜日ミサ	8時半 朝食
		中川神父 講話	京都見物
午後		キリスト教について深く考える 齋藤理事長	
		夕方到着 開会式	
夕食	カルメル修道院	京都 木屋町 なごみ	YMCA一橋寮帰宅
夜時間	自由時間		
宿泊場所	宇治カルメル会修道院	宇治カルメル会修道院	

2025 年度 秋季修養会感想文

花田智紀(法学部 2 年)

冷戦終結から 35 年以上が経ったが、現代は当時よりもさらに多極化した『分断の時代』を迎えてい。コロナ禍を経て、ロシアのウクライナ侵攻により米欧対中露の構図が明確になったかと思えば、ガザ情勢を巡り米欧においても亀裂が生じた。さらにトランプ政権下の関税政策により大西洋同盟も揺らぎ、国際社会は混迷を極めている。『分断』は国外の話だけではない。国政では既存の政権与党の支持率が下落し、様々な政党が乱立している。また、人々の生活に着目すれば地域共同体の衰退と共に、個人主義・能力主義が人間関係を変質させている。外国人観光客の増加に伴う排外主義の高まりや、SNS での過激な賞賛と非難の応酬など、息苦しさを感じるのは私だけではないだろう。

今回の秋季修養会における中川神父と齋藤理事長の講話のテーマは、まさにこの『分断の世界』にどう抗うか、という点にあった。

中川神父の講話は、『出エジプト記』に見られる「人類の問題性からの脱出」が主題であった。エジプトにおける抑圧や、同胞同士のいじめに見られる「異質な存在への恐れ」「未来への不安」「仲間内の虐め」から来る「関係性の断裂」は、現代の分断そのものである。この閉塞状況からの脱出の鍵は「神の名」にあった。神はモーセに「わたしはある」と名乗り、それは「わたしは必ずあなたと共にいる」という同伴の約束でもあった。さらに新約聖書において、イエスはこの関係を決定的なものにする。「もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。……わたしはあなたがたを友と呼ぶ」。支配と被支配の関係ではなく、神自らが「友」となり、私たちを招いている。この「縦の友情」を基盤に、隣人との「横の友情」を築くことこそが、孤独というエジプトからの脱出なのだ。

一方、齋藤理事長の講話は、この信仰を基に現実社会でどう生きるかを示唆するものであった。理事長は『ヨブ記』を通じ、信仰とは「ご利益」や「因果応報」ではないと語った。現代の能力主義(メソクラシー)は、「成功者は正しく、敗者は努力が足りない」という分断を生む。しかし、聖書の世界観は違う。理不尽な苦難の中にさえ神の同伴を見出し、互いの弱さを認め合う場としての「教会共同体」の重要性が説かれた。損得や能力を超えて人と人が繋がる場を持つこと、それ自体が分断社会への抵抗となる。

中川神父が説く「神との友情」と、齋藤理事長が説く「現世利益を超えた共同体」。この二つの視点は、かつて日本 YMCA 同盟の会合にて世界 YMCA 同盟総主事カルロス・サンヴィー氏が語った「アイデンティティへの問い合わせ」と共鳴する。カルロス氏のスピーチからの引用だが、「排他主義が広がる今だからこそ、私たちは共通の基盤に立ち、"Who am I?"(私は何者か)という問い合わせに対し、『神の友であり、互いに隣人である者』として応答する必要があるのではないか。」

グローバル化や情報技術は、本来、遠く離れた他者と繋がるために発展したはずだ。しかし皮肉にも、それは我々の違いを際立たせ、分断を加速させている側面がある。だからこそ、私たちは意識的に、互いにベクトルを向け合い、対立でなく歩み寄る道を探さなければならない。「わたしは、共にある」。この神の約束を胸に、分断された世界で人の交わりの輪を広げていくこと。それが、今の時代における私たちの「脱出」の道のりなのだと思う。

修養会感想文 「脱出と救済」

三浦 龍平(SDS 学部2年)

戦争や紛争、SNS に溢れる言葉の暴力など、現代社会は分断と緊張が絶えない「争いの時代」にあると言えます。こうした状況下で、私たちは本当に幸福だと言えるのでしょうか。幸福の本質を「他者との関係性」に見出すならば、今、私たちは大きな問いを突きつけられています。この問いに対し、キリスト教は「隣人愛」をもって応答してきましたが、それは単なる倫理的な教えにとどまりません。聖書が語る壮大な「救いの歴史」の中にこそ、その真意があると今回の修養会で学びました。

中川神父は講話の中で、聖書全体を貫くテーマを「人類の閉塞性や完結性からの脱出」だと語られました。「神は人間の叫びに応え、抑圧から自由へと導く方」であり、その象徴的な出来事こそが「出エジプト」です。神父が強調するように、イスラエルの民の苦しみを見、聞き、知った上で導き出す神こそが、救いの歴史の主導者なのです。それは、苦しみのただ中に神が共にいてくださることを示しています。

神の名「わたしはある(ヤハウェ)」についても、神父は「人間と共に在り、歴史に介入する神の自己開示」だと説かれました。聖書の神は、高みから見下ろす遠い存在ではありません。人間の現実に深く関わり、抑圧された構造から連れ出してくださる主体です。この解放は、古代イスラエルの話にとどまらず、現代を生きる私たちが抱える恐れや不信、暴力の論理からの解放という、普遍的な意味を持っています。

この救いの歴史が頂点に達するのが、イエス・キリストという存在です。中川神父の言葉を借りれば、イエスこそが神の名の完全な現れであり、人間の閉塞性を打ち破る「新しい出エジプト」を成し遂げる方です。敵を赦し、弱さに寄り添い、排除された人々の尊厳を取り戻す。イエスの生き方は、神の愛を目に見える形で示しました。救いとは死後の問題だけではなく、現実の暴力や恐れから人をして自由にする神の働きなのだと、イエスの姿は語りかけています。

長い目で見れば人類の暴力は減少している、という研究もあります。法の整備や人権意識の向上がその要因ですが、キリスト教的な隣人愛や赦しの精神が社会倫理として根付いてきたことも、無視できない要素でしょう。「救いとは、恐れや支配の論理から自由になり、共同体を新しくする力である」。中川神父がそう述べるように、聖書の示す救いは、社会全体の暴力を減らしていく動きとも確かに重なっているのです。

現代が「分裂の時代」に見えるのは、暴力そのものより、情報環境によって恐れや不信が増幅されているからかもしれません。そんな時代だからこそ、人を閉塞感から解き放ち、他者との信頼を回復させる「救いの歴史」の視点が必要です。「神は人を抑圧から自由へと導く方」。この視点に立つ時、幸福とは単に争いがない状態ではなく、「互いの尊厳を認め合い、つながりを取り戻す中で味わう自由」だと言えるのではないかでしょうか。

今回の修養会では、キリスト教についての現代の流れと照らし合わせて読むことが出来た。このように読むことは、聖書を断片的にしか読んでいない自分にとってはとても難しいことであるため非常にいい機会であった、社会情

勢に当てに行くような読み方ではなく、根幹を貫くものを自分なりに解釈し、現代社会、自分の生活に当てはまるようなことを見つけていきたい。

秋季修養会 感想文

見定和樹（経済学部4年）

今回秋修養会に参加した。私としては、三度目の参加であり、毎回齊藤理事長のイカしたドライビングスキルをもってドキドキハラハラな5.6時間の旅の後、京都の宇治はカルメル修道会に宿泊させていただき、キリスト教に対する理解を深めた。

今回の講義は中川神父より、旧約の「出エジプト」に示される“人間の問題性からの脱出”という視点からの講義と、齊藤理事長より、自身の体験も交えながら、キリスト教全体の歴史的・信仰的理解を広く扱った二本立てであった。

中川神父の講話では、とりわけ出エジプト記1～3章に描かれる人間の「関係性の断裂」が強調されている。エジプトにおいてイスラエルの民が受けた圧政、未来への恐れから生じる男児殺害命令、仲間内のいじめなど、他者への恐怖・不安・嫌悪が生み出す分断は、単なる古代史ではなく、現代にも通じる普遍的な問題として提示される。中川神父はこれらを「人間の問題性」と呼び、そこからの“脱出”こそが聖書の重要なライトモチーフであると述べる。

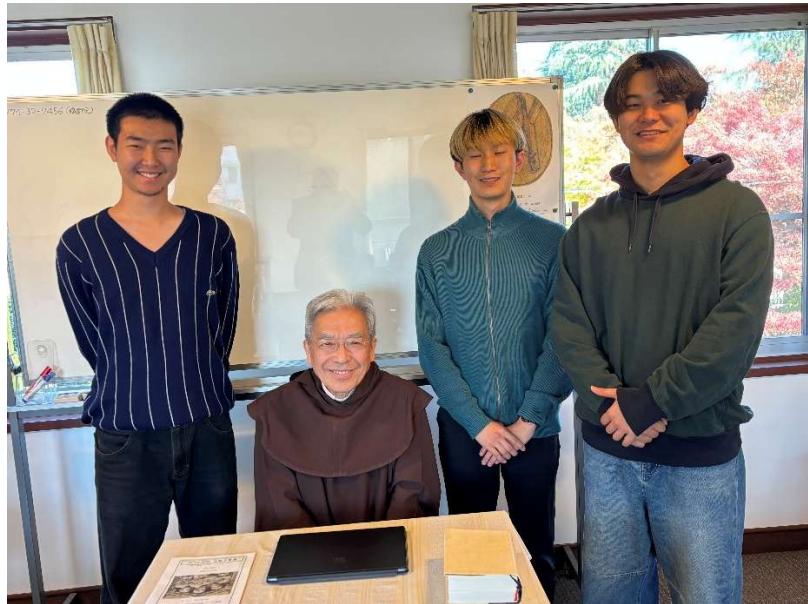
しかし、出エジプトの中心は、単に抑圧から逃げるという歴史的事実だけではない。講話で繰り返し語られるのは、「苦しむ民の叫びを聞き、その痛みを知る神」（出エジプト記3・7）が、モーセを通して人々を連れ出すという“神の同伴”である。神が自らの名を「わたしはある（エイエ・アシェル・エイエ）」と明かす場面は、神が人間の存在に寄り添い、その歩みに関わる存在であることを示す象徴的な出来事であり、脱出の物語の核心に位置づけられる。

他方、齊藤理事長の講話「キリスト教について深く考える」では、出エジプトが“ユダヤ民族が自由を自覚した歴史的契機”として説明される。エジプトの豊かさよりも、自由を求めて脱出を選んだという理解は、中川神父の語る「問題性からの解放」という視点と重なる。また、十戒によって法治国家としてのイスラエルが形成されたという指摘は、神との契約が共同体の秩序と倫理をつくるという点で、脱出が単なる逃避ではなく、新しい生き方の創出であることを示している。

両資料を合わせて考えると、出エジプトとは「自由への旅」であると同時に、「神と共に歩む道」の始まりであると言える。中川神父の講話が強調するように、神は人間の苦しみを放置するのではなく、共にいて導く存在である。その姿勢は新約におけるイエスの「インマヌエル（神は我々と共におられる）」という名に引き継がれ、苦悩や不幸を“除去する”のではなく、“共に担う”神の姿として深化していく。

最終的に、脱出の物語が示すのは、外的な抑圧からの解放だけではなく、人間自身が抱える恐れ・不安・分断といった内面的問題からの解放である。両資料に通底するのは、神が人に一方的に安易な利益を与える存在ではなく、人の苦しみに寄り添いながら「共に生きる道」へと招く存在であるという理解である。その意味で、出エジプトは現代を生きる私たちにとっても、互いに隔たりを生む心の態度から脱し、他者との真の交わりを求めて歩むよう促す象徴的な物語であると言える。

今回の修養会が私にとって最後の修養会となる。改めて、キリスト教に対する理解を深めることができる機会に恵まれていることに感謝し、ラスト聖研で綺麗に締めたいと思う。



(中川博道宇治カルメル会修道院長様と寮生諸兄)

OB・寮生合同クリスマス会(予定)

主イエスの聖なる御名を賛美いたします。

さて、今年も余すところ 1 月あまり、2025 年の終わりが近づいて参りました。今年も大変な猛暑が続く中、洪水や地震の多発、ウクライナでの戦争の継続、パレスチナ・ガザ地区での戦乱の一応の終息が齎されたものの引き続き不安定な状況など、心休まるときのない 1 年でした。そうした中、主イエスのご降誕をつつがなく祝うことができる事を共に喜びたいと存じます。今年のクリスマス礼拝では、現在私が教会生活を守らせて頂いております日本基督教団用賀教会牧師の白正煥先生が説教をしてくださいます。

また、クリスマス礼拝後の祝会では、私の大学時代の同じゼミで学んだ坂田茂君(2024 年 1 月ご逝去)の奥様の坂田直子様にピアノの演奏をして頂きますし、寮生諸兄諸姉には、クリスマスプレゼントとして多額の賞金が当たる YMCA 一橋クイズ勝ち抜き合戦を企画しております。このクイズは当会 130 年史から出題されますので、事前に寮生諸君は読んでおくと、クイズに有利です。

今年も OB 及び寮生の皆さんと心静かに 1 年を振り返り、主のご降誕の大いなる意義について思いめぐらし、来るべき来年の希望と夢を膨らませたいと思います。

何かとご多用かと存じますが、当会にとって、最も大切な行事であるクリスマス会に是非ともご出席くださいますよう心よりお待ち申し上げております。

主にあって

記

1. 日時 2025 年 12 月 13 日(土曜日) 午後 1 時半～午後 4 時(受付午後 1 時)

2. 場所 東京都国立市東 1-20-12 YMCA 一橋ホール

第1部 午後 1時半～2時 15分

クリスマス礼拝 説教者 日本基督教団 用賀教会 牧師 白正煥先生
奏楽 坂田 直子様

第2部 クリスマス祝会 午後 2時 30分～午後 4時

3. 会費 OB 2千円 同伴のご家族ご友人千円

寮生及び同伴の寮生友人 無料

(祝会の中では、クッキーと紅茶のご用意がございます。)

ピアノ演奏 坂田直子様 (東京芸術大学ピアノ科卒)

理事会だより

1. 評議員、理事、監事について

➤ 2025年度の評議員及び理事、監事は以下のとおりで、評議員は2024年度と変更はありませんが、理事では沖縄在住の宮城康智理事が公私とも多忙のため理事を退任されました。

任期 2026年の評議員会まで		卒業年次
寺師並夫		昭和49年
金子衛		昭和58年
川添 淳		昭和61年
青崎 敏彦		昭和52年
大溝 日出夫		平成元年
崔 勇		平成2年

現在の理事及び監事		卒業年次
齋藤金義	代表理事	昭和46年経
加藤 順	理事	昭和47年社
関 和義	理事	昭和50年法
佐藤 周一	理事	昭和54年法
滝澤 英一	理事	昭和60年法
鈴木 宗徳	理事	平成3年社、5年院
安藤 誠	理事	平成22年経
高橋 知史	監事	昭和57年 社会
任期は2026年6月の定時評議員会まで		

2. 理事会および評議員会での重要な決議並びに報告事項

➤ 理事長巻頭言にあるとおり、2025年6月の評議員会において、当会は公益認定取り消しの決議を行い、

現在東京都に対して認定取り消しの申請を行いました。東京都において現在認定取り消しの審議が行われており、2025年度内には認定取り消しが決定される見込みです。認定取り消し決定に伴い、当会が保有している公益目的保有財産（土地、建物など）は、類似の公益事業を行っている公益財団法人日本YMCA同盟に寄付されますが、別途同盟と当会において、無償使用貸借が締結され、引き続き当会が公益目的保有財産を寮舎運営のために利用することに変わりはありません。

- なお、昨年召天されました富田信子元寮母様のご主人の佐藤様から、富田寮母様の遺贈金1,000万円が当会に今年4月に寄付されました。

3. 男子寮、女子寮の運営状況について

- 2025年度は、男子寮の募集は5名でしたが、1年生4名と人員構成を考慮し、3年生1名が入寮したので、この結果、3年生2名、2年生5名とバランスが良い状態となりました。また、4年生は男子2名、女子2名となります。また、今年途中入寮した3年生の瀧山君は唯一のクリスチャン寮生です。
- 女子寮は定員5名に対して、2025年度は平田さんが途中退寮されたので、引き続き3名と2室が空き部屋となっており、この空き室を満室にすることが課題です。

学年	寮生氏名	役職	学部	出身高校
1	目黒蒼弥	雑務	法	富士高校(静岡)
2	飯塚陵雅	雑務	法	前橋高校(群馬)
3	古家大輝	雑務	商	堀川高校(京都)
4	中田勇輔	雑務	経済	開成高校(東京)
5	三浦龍平	雑務	SDS	秋田高校
6	山田圭一郎	雑務	経	日本大学第一高等学校
7	白川優太	広報	経	宇都宮高校
8	本田和士	設備	法	都立小石川中等教育学校
9	花田智紀	寮長	法	高崎高校
10	金賢※	雑務	経済	通信教育
11	瀧山恵輝※	雑務	法	基町高校
12	高天愛	女子寮生	法	中国・東北育才外国語学校(NEYC)
13	吉田元喜	前設備	経	日比谷高校
14	見定和樹	前寮長	経	小松高校
15	高瀬ひなた	女子寮生(前寮長)	社	県立千葉高校
16	古川こころ	女子寮生(寮長)	社	市原中央高校
17	北川 謙	監事(前広報)	経	都立西高校
18	樋口 祐熙	監事(前々寮長)	社	灘高校
19	加藤弘人	会計	経	膳所高校

4. 2025年度の行事等について

- 2025年6月に定時評議員会、9月には韓国海外研修旅行に寮生7名が参加、10月に寮祭を開催し、トヨタ自動車に勤務の平成17年卒萩原裕輔氏が講演を行いました。11月には宇治カルメル会修道院において寮生3名が参加、中川博道神父の講話などキリスト教について学びを深めることができた。12月にはクリスマス会を予定。

4. 合同会社国立建物から毎月の地代受け取り

- 2024年9月に着工となった合同会社国立建物は2025年夏に完成し、9月から民泊事業が開始され、寮生有志が清掃のアルバイトを行っている。

(文責:斎藤金義)

編集後記 1

白川優太(経済学部2年)

2025年度会報担当を務めました白川です。大学生生活も折り返しにさしかかっており時の流れの速さをひしひしと感じております。一つ上の代が空白だった事もあり、来年度には私たちが寮内最古参になるとかならないとか…さて、今年度の会報もそれぞれの寮生の個性が存分に發揮された文章が集まりました。並べて見返してみるとその年の寮の色が見えるようで、私たちも寮の歴史を紡いでいるのだと改めて感じることができます。

末尾になりましたが、YMCA一橋寮の運営がつつがなく行われるよう、絶えずご尽力いただいている斎藤金義理事長をはじめとしたOBの皆様方にこの場をお借りして感謝申し上げます。このような営みが末永く続いていくことを祈って私の編集後記とさせていただきます。

編集後記 2

理事長 斎藤金義

昨年度に引き続き編集人を引き受けております。今回の会報77号では、野澤寮母様の告別式に多くの寮生OBが参列されたこと、ご主人様野澤晃様から心の籠った惜別のご寄稿を頂戴できました。海外からは、コロンビア大使の高杉様、長年中国ビジネスに携われている峯村様の中国に関するご寄稿文を頂戴し、また長年当会との関係が薄かった神戸在住の古倉様からは、同期の瀧澤理事のご紹介でご寄稿を得られました。

寮生寄稿文では、唯一のクリスチャンである瀧山君の「なぜ、私はイエス・キリストを信じるのか」という文は本来の当会寮生の一文として誇りに思えるものですし、女子寮の高天愛さんのアウグスチヌスの一文も当会寮生に相応しい内容だと思います。

多くの寮生は悩みながらも何とか寮生活に馴染めるよう努力されている姿勢が感じられて好ましいと思います。但し、書評とか研究文のようなものは、寮生の生活感が感じられないで課題だと思います。編集人は確かに原稿を集めるまでが大変ですが、誰よりも校正作業をどうして、皆さんの寄稿文を精読できるので、これは他の人にはやらせたくない良い仕事だと思っております。

会報第77号	一橋大学基督教青年会会報 第76号
発行日	2025年12月22日
発行者	公益財団法人 一橋大学基督教青年会
発行者住所	186-0002東京都国立市東1-20-12 YMCA一橋寮
電話(YMCA一橋寮)	042-849-8108
HP Address	<u>財団について - 公益財団法人 一橋基督教青年会</u>
銀行口座(建設口) 銀行口座(普通口)	三菱UFJ銀行本店 普通預金 0868291 普通預金 0680004
郵便振替口座	00100-2-547511
英文振込先 銀行名及び支店名 口座番号	MUFG BANK, LTD. HEAD OFFICE SWIFT CODE: BOTKJPJT 868291 SAVING ACCOUNT (100-8388) MARUNOUCHI, CHIYODA-KU, HIGASHI 1-20-12, KUNITACHI-SHI TOKYO JAPAN
銀行住所 受取人住所	公益財団法人 一橋大学基督教青年会
発行人	理事長 斎藤金義
編集人	白川優太・斎藤金義
印刷・製本	株式会社 平河工業社
電子版会報	会報電子版は当会HP、情報公開からkaiho-takiura\$のパスワードでお読みになれます。